
ゼクシィには載ってなかった事

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼクシイには載ってなかった事

【Nコード】

N5939P

【作者名】

白い黒猫

【あらすじ】

出会って一年だけど、交際期間一ヶ月。急遽結婚することになった月見里百合子。その結婚準備期間って、楽しくはあるけれど、なんか思ってたよりもロマンチックなものでもない？ 月見里百合子はドタバタのプロポーズから結婚式までの日々を振り返ります。黒沢明彦のプロポーズから始まるラブコメディ。

『近距離恋愛シリーズ』の第三弾となります。

結婚前の二人の物語ということで、そういう感じの事を匂わせる文章もあつたりしますので、R15とさせて頂きました。

あゝ結婚（前書き）

コチラは第三弾となっておりますが、第一弾『半径三メートルの箱庭生活』と主人公が同じで、言い換えると月ちゃんシリーズ第二弾。『半径三メートルの箱庭生活』の一月後からの物語となっておりますので、コチラを先に読まれたほうが世界に入りやすいと思います。

あゝ結婚

> i 1 6 4 7 0 — 1 6 0 3 <

壁一面に、所狭しとカップとソーサーが飾られた喫茶店。店員がお客様のイメージのカップで出してくれるというこのお店。私の前にはラッパのように上に広がった形の青い小花のカップが置かれている。そして目の前に座る女性の前には、ピンク色で花が大きく描かれた華やかな丸みを帯びた形状のカップが置かれている。

目の前で瞳を幸せに潤ませ、幸せオーラ全開である後輩の西河実和ちゃんの様子を見ると、なんかそのカップのチョイスを納得してしまう。

彼女の大きめなバックには会社帰りに、一緒に寄った本屋で買った雑誌が大切そうに入れている。私は超能力者ではないので人の心を読む事は出来ないけれど、その後彼女が話してくる内容はなんか予想できた。

「月さん聞いて下さい！ 昨日、黒沢さんからプロポーズの言葉を頂いたんです」

私は予想できていたけど、初めて知って驚いたフリしてから笑顔を作る。そのほうが、彼女も嬉しいだろうし。

「え、そうなんだ！ オメデトウ！ やったね」

実和ちゃんは笑顔を弾けんばかり輝かせ、大きく頷く。

「昨日ですね、『私のギリシャ式結婚』（実在の映画は『マイ・ビ

ツグ・ファット・ウェディング 』観た後……素敵なイタリアン
レストランで誕生祝いして——」

（な、なんて素敵な状況なんだろう。ああ、でもそこはギリシャ料理
レストランに行ってもらいたかったかな）

あの結婚気分を最高に盛り上げてくれるハッピーな映画を観たあとに、
イタリアンレストランにて恋人二人で誕生祝い。プレゼントに指輪でプロポーズ。
私は同期であるその相手の男性の事も見直してしまう。

私も彼女のプロポーズエピソードを嬉々として聞き入ってしまう
私。 A TRUE STORY 真実の物語なだけに伝わってくる感動が生半可ではない。人の
不幸は密の味と言うが、人の幸せはその何十倍の甘い蜜の味だ。私も
思わずニコニコしてしまう。

しかも私は彼女が、相手に一年ほど片想いしている所から見守っている
ので、その喜びも一人である。

「是非、結婚するに当たって、月さんのアドバイスを頂きたいんです！」

ホクホクと可愛い後輩の幸せを喜んでいた私は、その言葉に笑いが
一瞬強張る。

目を夢と希望でキラキラさせている可愛い後輩の前に『ウーン』
と悩む。

別に、応援したくないとか、手伝いたくないとかいうのではない。
映画並にロマンチックなプロポーズで幸せな結婚準備期間をスタート
させた彼女に、ドラマにも小説にもならないような無茶苦茶なプロ
ポーズから結婚生活までの期間を過ごした私がアドバイスなんて
偉そうな事してもよいのだろうか？ 夢を壊しそうだ。

恐らくは彼女のバックに入っている『ゼクシィ』という雑誌の方が有効なアドバイスと情報を彼女に与えるだろう。『ゼクシィ』結婚する人間にとってはバイブルともいえる雑誌だから。

女性にとって、この雑誌を手にしてレジに行くという時の気持ちというのは格別なモノがある。この本を買うという段階になり、『ああ、私結婚するのね』と実感できる事と、コレを堂々と買うことで自分が幸せだという事を世間に向かって声高々に公表しているような気持ちよさがある。

兎に角女性性は、『ゼクシィ』というガイドブックを胸に抱き、夢と希望に満ちたキラキラの結婚式への道のりを歩き出すものだ。しかし、このガイドブック通りに行かないのが、人生の旅というもの。

まあ日本には反面教師という素晴らしい言葉もある。後輩こそは、素敵で楽しい結婚準備期間を過ごしてもらいたい！ そう思い、私は静かに頷き口を開く。

「任せて！ 全力で応援するから」

「はい！ 宜しくおねがいします」

実和ちゃんは、ペコリと可愛く頭を下げる。

あゝ結婚（後書き）

この後の物語、月ちゃんの結婚前の物語と、結婚して一年目の物語が交錯して進んでいきます。

そこまで複雑ではありませんが、その後の物語は過去の物語は『月見里百合子』現在の物語を『太陽百合子』というロゴを話の先頭に付けさせていただいています。

【あゝ結婚】

MATRIMONIO ALL' ITALIANA

1964年 イタリア・アメリカ

監督：ヴィットリオ・デ・シーカ

原作：エドゥアルド・デ・フィリッポ

キャスト：マルチェロ・マストロヤンニ

ソフィア・ローレン

アルド・ブリージ

ピア・リンドストロム

ヴィト・モリコーニ

きのうの夜は… (前書き)

プロポーズ——求婚すること、互いに結婚をすることの意思疎通を図ること。指輪を贈りそれを受け取ること、成立するというのが一般的らしい。ある意味、これがなければ始まらないそんなイベント。

きのうの夜は…

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

四月の中旬で、週の真ん中水曜日

私は会社で、よるめきながら席を立つ。

『人間の一番気持ちが緩む、水曜日作られた車は買うな』と言っけど、もし今日私が車を作っていたとしたら、それは絶対買わない方が良い！ 間違いなく欠陥車になるだろうから――。

私はフラつく身体と頭に喝を入れる為に、給湯室へと向かう。

マグカップを棚から出し、インスタント珈琲の粉を大匙四杯入れる。

「あれ！ 百合ちゃんがインスタント珈琲なんて珍しい！」

入ってきた同期の河瀬夏美ちゃんが、驚きの声を上げる。そうインスタントはあまり普段飲まないのだけど、私が今欲しいのは美味しい珈琲ではなく濃厚なカフェイン成分。

「うん、立ったまま寝むれそうなくらい、眠いの」

夏美ちゃんの目が心配そうに揺れる。

「何かあったの？」

私は力強く頷く。そしてため息をつく。

「なんやかんや、色々あつてね……結婚する事にしたの——昨晚」

夏美ちゃんは、目をまん丸にして絶句する。

昼休みになり私は、夏美ちゃんに強引に外にランチに連れ出される。心配で夕方まで待てなかったみたいだ。

確かに憔悴しきった私の様子は、普通の結婚を決めた女性の『私、昨日プロポーズうけて結婚することにしたの』エヘ!』という雰囲気からかけ離れているのは自覚している。

私はため息をつきながら、夏美ちゃんに、昨晚何があつたかを語りだす。

昨日は仕事も順調で珍しく残業もなかった。私は上機嫌そのままのノリで、恋人である太陽渚くんにメールする。『お疲れ様〜いいな〜俺はやバイ感じ、深夜にはならないと思うけど、はあ〜』といったやり取りを楽しみ帰宅。

母親と二人の穏やかな夕飯を食べ二人で後片付けし、お風呂入り、部屋で寛ぐ。ここまでは平和だった。

十一時、酒の入った父親が家に帰り、私の部屋を訪れた所から、雲行きが怪しくなる。

父親は上機嫌で、『お前に、良い旦那見つけてやったぞ!』と自慢気に言ってくる。酒の席でそんな勝手に人の人生に関わる大変な話を纏めてくるというのもどうかと思う。恐ろしい事に父親は、それを私が喜んで聞いてくれると思ったようだ。

私は、『お父さんが、心配しなくても、自分でなんとかするから大丈夫』とやんわり断ると、途端に機嫌が悪くなる。

「お前が、何時までもフラフラ遊んでるから、探してやったんだろ！ 第一、お前の通ってるシヨボい会社になんかロクデモない男しかないしな！」

流石に、この言葉に私も力チンくるけど、耐える。

「私は、ちゃんと自分なりに人生考えて生きてるから、私のタイミングでこういう問題はすませて欲しい」

私としては、かなり言葉を選んで答えたけど、父親は激怒した。

「何が、自分のタイミングだ、生意気な！ 穀潰しの居候風情が偉そうな事言っな！」

顔をお酒のせいだけでなく真っ赤にした父親が、怒鳴ってくる。いつもなら、耐えてやり過ごしていた理不尽な父親の言動だったが、昨晚は耐えられなかった。というか私にしては珍しくキレた。

「私だって好きでここにいる訳じゃないから！ 邪魔なんですよ？ なら直ぐ出て行ってあげるから！」

といった内容の事を叫んだと思う。

私が、思いがけず怒鳴り返した事に、驚愕している父親を無視し、充電器ごと携帯を手に取り、ベッドの上に置いてあったバッグに入れてそのまま家を飛び出した。

慌てて母が何か叫んだようだが、私は無視して、夜の住宅街を駆け抜ける。

きのうの夜は… (後書き)

【きのうの夜は…】

原題：ABOUT LAST NIGHT…

1986年 アメリカ映画

監督：エドワード・ズウィック

原作：デビッド・マメット

キャスト：ロブ・ロウ

デミ・ムーア

ジェームズ・ベルーシ

エリザベス・パーキンス

キャサリン・キーナー

真夜中のマーチ

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

雲が立ちこめて星すら見えない空の下、私はただ前だけを見て進んでいく。

流石にパジャマという訳ではないが、お風呂入った後の私が着ているモノは、ゴムウエストのラフなパンツとＴシャツに白いパーカーにスニーカー。近所のコンビ二にかるうじて行ける格好である。しかも四月と言っても寒い。でも私は夜の住宅街をズンズン歩き続ける。携帯が、さつきから鳴り続ける。着信メロディーでその電話が家かだと理解する。母からの電話だろう。私は携帯を開け何も言わず速攻切り、その履歴を使い着信拒否設定にして大きく息を吐く。我ながら非情な行動だとはわかっていいる。また母が心配しているであろうその心情も理解している。でも今は一人でいたかった。私は何処に向かうと言うのでもなく、ただ無駄にさ迷うだけ。手で握りしめていた、携帯が震え、軽快にミッショインポツシブルの音楽が鳴ろうとするが、私は液晶に現れた文字を見て、音が鳴る前に通話を押す。

「もしもし」

「わ！ 出るの早！」

こんな時なのに、恋人のチョット慌てた声に、つい笑ってしまう。

「あれ？ 今何処にいるの？ 外？」

大通りを歩く私の背後の音が、電話を通して聞こえたのだろう。

大陽渚が不思議そうな声を上げる。改めて私は自分の立場を思い出す。

「うん……」

私は小さい声で答える。

「どうかしたの？ 何かあった？」

どう、答えるべきか悩むが、ストレートに答える事にする。

「……はい、只今、絶賛家出中です」

「——はあ？」

大陽くんの惚けた感じの音が響く。
恥ずかしさが沸き起こってくる。

「で、今、何処？」

「家の近所」

『つたく……』と呆れた感じの音がスピーカーから聞こえる。
でしょうね、十代なら兎も角、この年でこんな事しているなんて……。

「今からウチくる？」

私は暫く考えて、首を横に振る。電話の先にいる相手に見えてないけど。

「いや、いい。しかもこんな時間だし」

ため息の音が、スピーカーからする。

「今の時間なら、ギリギリ来れるよ、登戸まで来れば南武線は動いているから」

気持ちは、嬉しい。

「いや、明日会社あるし、仕事の休めない。着替えの事考えると無理」

流石にこのままの格好では明日会社にはいけない。こんな時に、会社が気になる自分になんか笑えてくる。こんな所が、私という人間の小さいところなのだろう。

「適当に、怒りが治まったら、家に帰るから、安心して」

どんなにイヤでも、今私が帰る所は家しかない。

「……ならさ、取り敢えず何処かに入って、近くにファミレスか何か二十四時間やって、落ち着ける場所ある？」

「確か、この先に、何かファミレスが」

私は、自分の脳内ご近所地図を探る。

「なら、そこに！ ゆり蔵さんバカだから、一晩中ほつき歩いてそつ。しかも、こんな夜中にゆり蔵さんのようなチッコイ子が歩い

てたら、補導されて、家に強制送還だよ」

エラい言われようだけど、笑えてしまった。私の身長百五十五センチそこまで小さいわけではないが、対する大陽くんは百九十センチの大男。なので彼からみたら私は異様に小さい存在に思えるらしい。この馬鹿な『ゆり蔵』という私の呼び方は、二人で歌舞伎を見に行ってからこのようになっていた。私も彼の事を『なぎ左右衛門』と呼んでいる。よくある恋人同士のお巫山戯けだけど、こんな状況だとさらに間抜けに聞こえる。

「ソコに、行って飲み物とか飲んで落ち着いたら、また電話頂戴！」

電話なんかしてないで、さっさと向かえ！　と言う感じで私が返事したら切れてしまう。

真夜中のマーチ（後書き）

2007年 日本映画

監督：下山天

脚本：大石哲也

キャスト：玉山鉄二

窪塚俊介

香椎由宇

津川雅彦

芦野さゆり

山内圭哉

山下徹大

飯田孝男

諏訪太郎

太陽は夜も輝く

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

真夜中のファミレスは、人もまばらで、やる気もありなさそうな低いテンションの店員に、窓際のソファ―席に案内される。

私はドリンクバーを注文し、そのままドリンクバーに行きカフェオレを作りまたトボトボと席に戻る。

さて、と、携帯を手にしたら、携帯が震える。ディスプレイを見ると、姉の名がソコにある。

「良かった！ 出た！」

第一声は、姉の安堵の声。母が私の携帯が繋がらないから、結婚して家に出ているもう一人の娘に助けを求めたのだらう。

「心配かけてゴメン……」

私は謝るしかない。

「大丈夫？ 今何処？」

説教が始まるかと思ったが、姉の声は思いの外優しい。

「うちに来な！ あの父さんと暮らすのも大変でしょ」

姉は私と異なり、散々父とやり合ってきただけに、誰よりも我が家の現状を知っている。

姉が住む場所は千葉県の半島部分で、尚更に今日中にたどり着ける場所ではない。私は大陽くん言ったのと同じ返事をし、気分が落ち着いたらちゃんと家に戻るから母にも心配しないように伝えて欲しいとお願ひする。姉はそれでも私を気遣ひ、本格的な家出も薦め一緒に戦こうかといった提案をしてきたが、私は『大丈夫』と返事する。姉だつて一人で父と戦つてきたのだ。私も戦う時は戦わねばならない。自分の力で。

電話を切ると、即電話が震える。大陽くんからの電話だ。姉と会話していた事で、いつまでたつてもかかつてこない電話にジレてかけてきたのだらう。大陽くんは百九十というデカい体格に似合わず、意外に気が短い。

「ちゃんと、店入った？」

「うん、ドリンクバーも頼んだ。姉から電話きていて遅くなりまして。ゴメン」

「そうか……しかし何でまた、そんな事に？」

私はどう説明するべきか悩む。付き合い始めたばかりで、親と『結婚』問題で揉めたとは言いつらい。

「いつもの事なんだけどね、ウチの父親、自己中だし横暴だしいつも滅茶苦茶な事言ってくるのよ……。いつもは流すなりして耐えたけど、今日はなんかキレてしまった」

何故か、フツと笑う声が聞こえる。

「ゆり蔵さん、いつも俺が直ぐキレるって、諫めるけど、ゆり蔵さんのようにいつも我慢している方が危ないじゃん。キレたら暴走す

るから」

返す言葉もない。その言葉にさらに凹む。

「コレからは、こまめにガス抜きします」

電話の奥から、フーと息を吐く音が聞こえる。

「あのさ、そんなに家が辛いなら、一緒に住まない？」

大陽くんの言葉に、息を止める。

なんという、甘すぎる誘惑なんだろうか？ あの家を出て、大陽くんと暮らす。

「ダメだよ、根本的解決にならない。第一同棲なんてしたら、余計に五月蠅く言って来て問題複雑になるだけだから」

私は、誘惑に負けそうになったけど。それは一時的な逃げだけにしかない。面倒な事に大陽くんを巻き込んでさらに騒ぎをデカクするだけだ。

「だったら、何も文句いってこられない、チャンとした形で家を出て一緒に暮らせばいいよ！」

スピーカーからサラリ聞こえてくる言葉に私は固まる。怒りでも喜びでも人間どんな感情も、ある飽和量を超えると、頭が真っ白になるらしい。

「ゆり蔵さん？ 大丈夫？ 起きてる？」

私は、意識を取り戻し、慌てて首を振る。

「起きているし、聞いている、あの、それさ……」

「あれ？ 嫌だった？」

この人はどういう顔で、この会話をしているのだろうか？ 口調はいつも週末の予定を立てているときと変わらないように聞こえる。

「ううん、嬉しい。ただ、なぎ左右衛門さんは、私なんかでいいの？ なぎ左右衛門さんがいつもチンチクリンとチンチクリンと言ってる私だよ！」

ブブツと笑う声が聞こえる。

「だから、楽しくていいんじゃない」

そんな理由で、結婚相手を決めていいのか？ この人は……。その言葉に、私も思わず笑いながら泣けてきた。

「そうか、ならいいか……」

電話の向こうから『うんうん』といった明るい声が聞こえる。

「でも、ウチの親、かなりややこしいよ……」

「ややこしのは、ゆり蔵さんもでしょ！」

そう言われてしまうと、何も言い返せない。フフと笑う声が携帯のスピーカーから聞こえる。

「じゃあ、結婚しますか！」

次の週末、新作映画でも観に行きますか！ といった感じで軽いノリのプロポーズ。

「いいね！ 楽しそう」

私も、同じようなノリで返す。

「じゃ、今週末は、ゆり蔵さんの家にご挨拶すること決まり！」

なんか、この人となら、どんな事も軽く楽しく乗り越えていけそうな気がした。

でも、流石に今日は疲れた。感情があらゆる方向にメーターを振り切りすぎた。

気が付くと、もう二時過ぎだ。残業して仕事で疲れているはずの大陽くんは、こんな時間まで電話で付き合わせてしまった事に申し訳なく感じる。

「あ、なぎ左右衛門さんも、明日会社だよな。ゴメン、こんな時間まで付き合わせてしまって。そろそろ寝て」

私はそう言って、強制的に電話を終了させる。

太陽は夜も輝く（後書き）

IL SOLE ANCHE DI NOTTE

1990年 イタリア映画

監督：パオロ・タビアーニ、ビットリオ・タビアーニ

原作：トルストイ

キャスト：ジュリアン・サンズ

ナスターシャ・キンスキー

シャルロット・ゲンズブール

マルガリータ・ロサーノ

パメラ・ビロレージ

リュディガー・フォーグラ

パトリシア・ミラルデ

輝く夜明けに向かって

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

大陽くんと電話が終わると、私の世界は途端に元の味気ない風景になる。閑散としたファミレスで、なんとも空虚な空気が漂っている。

私は、カフェオレを両手の持ちながら、そういった風景をぼんやり眺め、大陽くんと結婚という事を考える。

映画という趣味は同じなものの、それ以外の好みはまったく合わない二人。その合わなさがかえって良かったようで、互いに違う所に物事の面白さを見付けて来ることで楽しさを倍増させている。

趣味嗜好がまったく違うようでいて、二人にはいくつか共通点がある。モノの価値観、金銭感覚といったモノが同じなのも上手いっっている要因だと思う。

その共通点というのは、年齢が同じとだけでなく九州の方にある同じ小学校に通っていて、ほぼ同じ教育を受けた。そして父親の転勤にくっついて関東にやってくるという似た過去を持つ。それだけでなく父親同士が同じ大学の同じ専攻課に通っていたようで、同じ教授から同じ就職先を紹介されたために、同じ企業の同じ職場に配属された。父親の給料もほぼ同じだと、似た金銭感覚になるというものである。

同窓会で再会して、映画という共通の趣味があることで、仲良くなるにはそう時間かからなかった。ジャンルが違っていてもマニア同士また通じるものも多い。

しかし、だからといって、父と大陽くんの関係が上手くいくとは思えない。SEという職業柄、合理主義で心にもない言葉は一切言えない男『大陽渚』と、自分が一番で他人へは自分への敬意ある行

動を常に求める『父』。合うわけがない。しかもドチラも短気ときている。

七年前同じように、父の元に付き合っている男性を連れてきた姉は、三年程父と戦って破れている。相手は大陽くんとはちがって、穏やかで誠実で大人な会話も出来る人だったにも関わらず、その男性の仕事がフリーランスの仕事だというだけで父は一切聞く耳を持たなかった。ドラマのように和解することなく、姉の恋愛は終わった。姉は父がもってきたお見合いの相手と結婚している。その相手を気に入ったとか、父の意志を受けてとかではなく、父とコレ以上に顔を合わせるのも嫌で家を出るための事。今は幸せでないかという、そうでもないが、今度はキツイお姑さんとの同居で色々苦労はしているようだ。あの気の強い姉ですら勝てなかった戦いに、私は勝てるのか？ 不安は募っていく。

そして、何の解決の道も見えないまま時間だけが過ぎていく。時計を見るともう五時を過ぎている。私はため息をつく。

六時前にファミレスを後にして、家に帰る。心配で恐らく同じように眠れなかったであろう母が不安げな顔で出迎える。

「大丈夫、着替えてもう会社行くね」

母は腫れ物に触るように、私にそつと触る。

「ちゃんと、また家に帰ってくるわよね？」

私は取りあえず笑みをつくり頷く。

そして、顔を洗い、歯を磨き、部屋に戻り着替える。

再び玄関に向かう私を母が追いかけてくる。

「あの、百合ちゃん、お父さんも悪気があって言っている訳じゃない

いから、気にしないで」

悪気がなければ、どんなに傷つけても良いというわけではないだろう。私は苦笑するしかない。今まで受けてきた暴言への怒りも募り、許す気にもなれない。

「あのさ、お母さん私、結婚することにした。今週末相手の人挨拶にくるので、お父さんにも言っておいて」

私の言葉にポカンとした母を置いて、私は家に出る。

「という感じなの、今」

私は、そう締めくくり、ランチについてきた珈琲を飲む。

「結婚ってつまり、百合ちゃんと、大陽さんとの間だけでの状態って事？」

夏美ちゃんの言葉に、自分の状況を再認識したため息をついてしまう。

結婚は二人の問題のはずだけど、実際しようとするとなんか行かないのが現実。

「あのさ、今度また家出するような事があれば、ウチにおいで。一人暮らしだし、大陽さんの家に転がりこむよりも、女友達の家の方がややこしい状態にはならないでしょ」

「あ、ありがとう。ゴメン」

私は昨日から人に心配させまくっている。夏美ちゃんにも申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「だからね。今日帰ったら。緊急持ち出しバック作っておくのよ！そして飛び出す事があったら、ソレもってウチにくること！分かった？」

荒れる事確実に思われる状況と、夏美ちゃんも思っているのね。私は複雑な気持ちで夏美ちゃんの顔を見つめ、頷く。

こうして、私の結婚準備生活は波乱の内にスタートした。

輝く夜明けに向かって（後書き）

【輝く夜明けに向かって】

C a t c h a F i r e

2006年 フランス・イギリス・南アフリカ・アメリカ合作映画

監督：フィリップ・ノイス

キャスト：デレク・ルーク

ティム・ロビンス

ボニー・ヘナ

ムンセディシ・シャバング

ウエディング宣言（前書き）

相手の両親へのご挨拶——結婚準備において、プロポーズに並ぶ難関ともいえるイベント。寧ろ、プロポーズよりも難関ともいえるべきもので、内容は結婚を決めた二人が互いの家族に挨拶に行き、結婚の許可をもらうというもの。

ウエディング宣言

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

東和薬品さんの応接室出してもらった珈琲を飲む。美味しい、いい珈琲メーカー使っているようだ。応接室のソファも柔らかくて座り心地良いし、派手さはないけれど青を基調にした落ち着いた内装がなんとも品が良い。やはり一流企業は、こういう所が違うなと思う。私の勤めているモリシマ担当の営業マンである黒沢明彦の付き添いで、私は作業担当として来ている。黒沢明彦と広報部の青山慎司主任との対話に相槌を入れながら補足していけばいいので精神的にかなり楽である。

冊子の大幅変更という話だったか、基本は変わらない為に、そこまで私の方の作業に影響はなさそうで、打ち合わせ事態も平和な形で終わった、

「すみません、今日は月見里さんまで来て頂いて、あつ申し訳ありません、大陽さんになられたのですよね」

「そうなんです、会社でも旧姓のまま呼ばれているので、なんか私自身も新しい名前なれなくて。今日は青山主任にお逢い出来るので張り切って来てしました。あつ、新しい名刺お渡しもしないで、すみません」

電話やメールでは散々会話しているのに、青山主任とこうして会うのも久しぶりである。

私は青山主任に、『大陽百合子』の名の名刺を手渡す。結婚して名前が変わったものの、社内では『月ちゃん』と旧姓の愛称呼ばれていることもあって、一年経つというのにまだ慣れないから困った

ものである。こうして太陽の名を名乗るのはなんか新鮮で楽しい。元々外勤が少ない為にこの名刺を配る機会がないから尚さらである。私は黒沢明彦と一緒に立派なビルを出て、大きくため息をつく。付き添いとはいえ、気をはっていたこともあり、緊張から解き放たれてホッとする。

「お疲れ様」

声のする方を見ると、隣の男性は何故か可笑しそうにコチラを見て笑っている。営業の彼にとってはこんな事は慣れっこなのだろう。未だ緊張している私の様子がそんなに楽しいのだろうか？

「お疲れさま、黒くんこそ」

私は取りあえず、黒くんに笑い返す。でも、まだニヤニヤと笑っている。

「何？ その人の悪い笑顔は？」

黒くんは、慌てて首をふる。

「いやね、初めて月ちゃんと会ったときと、似た状況だなと思って一緒に会社出たところで、月ちゃんが大きいため息つく」

初めて？ ああ、入社試験の時の事かと私は合点する。そう黒沢明彦と私は同期というだけではなく、同じ日に入社試験を受けている。そして確かにこのように、一緒に面接のあと、同じような並びで会社の玄関を出た。なんとも懐かしい話である。

「良かったら、お茶でもしていかない？」

ニヤリと笑いながら、黒くんがビルのお向かいにある喫茶店を指さす。

「サボリですか、いいね、お付き合いしますよ」

「参りますか」

黒くんは、共犯者の笑みを浮かべ手を私の方に差し伸べる。こういう気障っぽい動作が不思議と似合う。いわゆるイケメンではないけれど、そういう空気を持っている不思議な男である。

若い夫婦が二人でやっている喫茶店は、白とブルーを基調としたインテリアがなんとも爽やかである。地中海をイメージしたのだろう、こういう気分転換のサボリに入るには最適なお店に思えた。

「なんか素敵なお店だね」

私のお店を見渡してして、その心地よさに嬉しくなり黒くんに笑いかける。

「だろ？ 来る度に月ちゃん好きそうだなと思っていたんだ」

ということとは、よく此所にサボリに入っているということだろう。私と黒くんと私は、趣味の映画だけでなくこういったお店の趣味を合っていて、よく一緒に出かけては二人で映画みて喫茶店でこうし

て向かい合ってお茶を楽しんできた。こういう好きな喫茶店の趣味とかは、私の旦那様よりも合っていたりする。

「ほうほう、いいですね。営業はこうして優雅にティータイム楽しめて」

黒くんは目を細めて、コチラのチラつと見る。

「月ちゃんだって外勤の途中、色々、立ち寄ったりしてるでしょ」

「いや、私はお客様と一緒に飲めるから、一応真面目に営業だよ」

へラつと笑ってみせる私に黒くんまったくいいながら、笑う。
私はふとある事を思い出す

「そうそう、聞いたよ、オメデトウ！」

一瞬、黒くんは『え？』って顔をしたが、思い当たる節があったのを思いだし珍しく照れたように頬を緩ませる。

「実和のヤツ、もう月ちゃんに言ったんだ」

クシャつとした照れた顔、なんかいいな、男性のこういう照れた顔って。

「プロポーズの話聞いて、感動したよ！ もう黒くんに惚れそうになったもの」

その言葉に黒くんは何故か固まり、そして苦笑する。

「月ちゃんに、そこで惚れられてもね」

確かに、そりゃそうだ。不毛すぎる。

「でも、あんなに素敵なおポーズ、女性としては堪らないよ」

私は思い出してウツトリしながら言うと、黒くんはため息を大袈裟につく。

「あのさ、普通でしょ、『結婚してくれませんか』って言うのは」

まあそうなのでしょうが、そこに繋がるシチュエーションは、出来たら黒沢ちゃんと実和ちゃんのようにロマンチックなモノであってほしかったな。

「私の場合、なんとも間抜けなおポーズシーンだったから、結婚の披露宴で態々やり直したの」

「そうなんだ……どんなだったの？ 何か俺の方だけ内容だ漏れて不公平だから教えてよ」

黒沢くんはニヤニヤしながら聞いてくる。

「ん？ 深夜のファミレスで、携帯電話で『じゃ、結婚でもする？』だったよ」

流石に黒くんは絶句する。

私は、そんな黒くんに簡単な顛末を話すと、笑い出す。まあ父親との喧嘩の内容とかなり端折ったけど。

「月ちゃんってそんな、キャラだった？ プチ家出なんて」

そりゃ笑われても仕方が無いけど、実際笑われるとムカツクものである。

私がちよつとむくれていると、黒くんが、「あ！」という顔をして笑うのを止める。そして真面目くさった表情になる。

「そうだ、月ちゃんに是非是非、教えてもらいたい事があるんだけど！」

「ん？」

切羽詰まった、私に何か訴えるような目をしている。

「あのさ、相手の両親への挨拶って、どうするのが一番いい？ 月ちゃんの時はどんな感じなの？」

挨拶ねーそこを私に聞いてきますか。

「あら？ それに実和ちゃんのご両親と会うの初めて？ 前、実和ちゃんの家でクリスマスしたって聞いたけど」

「そこなんだよ、お母さんとは、よく顔合わせているんだけど、お父さんはタイに赴任していたために、今度合うのが初めてなの」

そうだよ、普通は相手のご両親に会うのって、コレくらい緊張する事だよな？

「でも、黒くんだったら、相手のご両親も大満足だよ！ 心配しなくていいよ」

「注意したほうが良い言葉ってあるかな？」

あら、就職面接の時よりも緊張してませんか？ この人は。就職面接の時は、なんかニヤニヤしながら余裕な感じだったというのに。

「タブーな話題については、実和ちゃんに最初にリサーチしたほうが」

「タブーね」

もっともらしく黒くんは頷く。

「禿げるとか。ツルツルいった表現は避けるとか」

その言葉に、『ん？』という顔になる黒くん。私は姉の恋人が挨拶に來たときの事を思い出す。

「あ、あとね。『お嬢様を私に下さい』って言い方はあまりしないほうが」

ビックリした顔で黒くんはコチラを見る。そりゃそうでしょう、この言葉ドラマでも一般的によく使われている言葉だし。

「え？ そうなの」

「なんかさ、父親としては娘を『ください』と『モノ』のように言われるのってあまりいい気がしないみたい。『実和さんとの結婚を許して頂けないでしょうか』とかいう表現にしておいたほうがいいかも。ウチの父親は以前それで激怒したので」

黒くんが尊敬の目で私を見てくる。

「確かに、それは言えているかも、他にもない？　ちなみに月ちゃんの場合はどうやって、その最悪な状況で結婚のOKをもらったの？　渚さんのノウハウあれば俺、余裕じゃない？」

私は苦笑するしかない。

「イヤイヤ、それは止めたほうがいい！　ウチの調子でやったら悲惨な事になるよ」

「え？　何？　それ」

怪訝な顔で聞いてくる。

私は大きくため息をついて、悪い見本として自分の夫の、とんでもないご両親への挨拶を語ることにする。『間違いだらけ？』というより『何処が結婚のご挨拶？』という大陽渚による私の両親へのご挨拶の顛末を――。

ウエディング宣言（後書き）

ウエディング宣言2005米／コメディ／101分

Monster-in-Law

監督：ロバート・ルケティック

出演：ジェニファー・ロペス

ジェーン・フォンダ

マイケル・ヴァルタン

ワンダ・サイクス

アダム・スコット

モネット・メイザー

アニー・パリッセ

ウィル・アーネット

エレイン・ストリッチ

ミート・ザ・ペアレンツ

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

一般的な相手のご両親への挨拶はというと、結婚の許可をもらうだけでなく、その後の結婚準備や結婚生活を円滑にするのが目的。成功させるには事前に相手の情報をいかに掴んでいるかと、丁寧で誠意ある対応が一番の決め手となる。

両親には、恋人の良い部分の情報を多めに与えておき敷居を下げておく。恋人には両親のクセとか好みとかのデータを与えて、より円滑な会話が出来るようにしておくのが好ましいらしい。服装はスーツが基本で、アイロンがシッカリかったワイシャツにネクタイは奇抜でないものを選び、髭もしっかり剃り清潔感のある格好を心がけるようにする。

そして、手土産は3千円から5千円のもので、相手のご両親の好みの物や、自分の郷土の名物などを用意する。といったものが基本なようだ。

しかし、私の男性側からの両親へのご挨拶という――。

大陽さんと私が結婚を決めた週の、水曜日・木曜日・金曜日・土曜日の午前中の我が家の空気は最悪だった。

当たり前といったら当たり前、私は父と冷戦状態で会話はなく、怒りの冷めない私は殆ど父を無視して生活していた。父も初めて私が見せた反抗と拒絶に、どう対処してよいのかも分からず、実はうるたえていたようだ。しかし謝ることもせずに母を通してなあなあで関係回復を図ろうとしていた、そういう所も私はさらに怒りを募らせる。

そして、嫌な緊張感に包まれたまま、土曜日となった。

「じゃあ、大陽さん、迎えにいつてくるね」

私の言葉に、母は黙って頷き私を見送った。父は難しい顔で朝ずつとリビングに座って新聞を読み続けている。もういい加減全ての記事を読んでいると思うのに、黙ったまま何度も新聞を読み返している。父も母を通して、相手がかつて自分と同じ職場で働いていた人物の息子という話は聞いてはいるものの、だからといって、そこまでも仲良い相手でもなかった為にその家族の情報が殆どない状態しかもあんな状況で決めた結婚だけに相手がどういうテンションでやってくるのか読めない所が、さらに父を不安にさせていたのだと思う。

駅の改札の所で待っていると、階段から大きな男がズンズン登ってくるのが見える。大陽くんが来たようだ。黒のスパイダーマンのTシャツに黒のジャケットにブラックジーンズという、えらくラフな格好である。手には『崎陽軒』と書かれた紙袋を下げている。私に気が付いて、ヘラッとした笑顔を見せる。

「ごめん、待った？」

「うっん、今来たところ、何？ その紙袋」

私は、大陽くんの下げている荷物の中身は想像ついたけど、聞いてみた。

「崎陽軒のシュウマイ！ ゆり蔵さん家への手土産にと買ってきたんだ」

それは分かったけど、『崎陽軒』？ ちなみに我が家は横浜市内

にある。何故、川崎に住む大陽くんが、横浜に住む我が家への手土産に、横浜名物『崎陽軒のシウマイ』を持って来るのだろうか？
まあ、いいか……深く考えるのは止めよう。

私は、大陽くんを初めて我が家に案内するために歩き出す。

「結構大きい駅なんだね、駅ビルもあるし」

大陽くんは楽しそうに、初めての景色を楽しんでいる。

「最近、急に開発が進んでね」

「あ、ホテルまであるんだ。ブライダルフェアしてるよ、後で遊びにいかない？」

楽しそうというか、緊張感なさ過ぎる大陽くんの様子に、私も少し不安になってくる。

「あ、チョット、お店寄って良い？ ここの煎餅お父さん好きなの」

私は、父の好きなお店の煎餅を一箱買い贈答用に包んでもらい、それを大陽くんに渡す。

そして、私だけが緊張しながら、我が家に到着する。

「ただいま戻りました」

玄関に入ると、出たときと変わらず、ドヨンとした嫌な緊張感が漂っている。母は怯えながらも必死で笑みを作り私達を迎える。父は無表情のまま奥から出てくる。

そんな二人を前に、大陽くんはヘラヘラと笑って頭を下げる。

「こんにちは〜！ 大陽渚です。今日はわざわざご招待頂きまして、ありがとうございます」

笑いながら、大陽くんはトンデモない事を言った。母は「え？」という顔になり、父は「あれ？」という顔をした。私も思わず、大陽くんを見上げてしまう。

ツツコンでいいですか？ 貴方は『ご招待』はされてはいません。『挨拶したいから、家に行きます』と半ば強引に家にやってきたというのが正しい状況。まあ、根回しもせず、両親の心の準備も殆ど出来ない最悪な状況でこのイベントを行わせる事にしてしまった、私が悪いのですが……。

そんな微妙な周りの空気を全く気にせず脳天気な笑顔で、呆然としている母と父に崎陽軒のシューマイと煎餅の包みを渡しているのを、私は不安を胸に眺めていた。

ミート・ザ・ペアレンツ（後書き）

ミート・ザ・ペアレンツ 2001 米 / コメディ / 108 分

Meet the Parents

監督：ジェイ・ローチ

製作総指揮：スティーヴン・スピルバーグ

製作：ロバート・デ・ニーロ

ジェイ・ローチ

脚本：ジョン・ハンバーグ

出演：ロバート・デ・ニーロ

ベン・ステイラー

ブライス・ダナー

テリ・ポロ

ジェームズ・レブホーン

ジョン・エイブラハムズ

オウエン・ウィルソン

フィリス・ジョージ

カリ・ロツカ

トーマス・マッカーシー

ニコール・デハフ

おかしなおかしな訪問者

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

大陽くんは、我が家のリビングで『どうも!』と嬉しそうな笑顔で、母から珈琲を受け取る。

「そういえば、お父さんは元気かね? 君のお父さんとは、大学、会社と色々縁あってね」

父としては、大陽くんの態度は想定外だったようだ。娘を激怒させた後に結婚を決めたその相手という事で、流石に喧嘩腰とまではいわなくても、対立姿勢でやってくるのは確実だろうとかなり緊張していたようだ。

しかし、目の前の男は、嬉しそうに出されたケーキを見つめ、上機嫌だ。

「そうみたいですな、父も月見里さんに宜しくと申しております。まあ父は禿げてますが元気ですよ!」

取りあえず、喧嘩しにきたわけではないという事で、父は安心してらしい。

「君のお父さんは、学生時代から薄かったからね。君の頭部はお父さんに似なかったようだね」

「はい! お陰様でふさふさです」

(何の会話しているんですか? この二人は……)

大陽くんは、嬉々とした目でケーキについたセロハンをはがしている。

「それにしても、君背が大きいな。何センチあるのだ？」

「百九十センチですね」

「まあ、そんなに！ 凄いですね」

母も穏やかな様子の室内に安心したのか、楽しそうに会話に加わり始める。

そして、気持ち悪いほど穏やかな時間が流れていく。

私を怒らせていた事で、多少消沈し元気を無くしていた筈の父が、気が付けば「昔、大陽くんの父親に仕事を教えてやった」などといった話や、自慢話が始まる。

自分で大陽くん「SE」とは、どういった事をするのか」と話しを振っておいて、大陽くんが説明しだすと、それを遮って自分の話をし始める。横柄な性格を完全復帰させている。

大陽くんは、それを怒るわけでもなく、「そうなんですか」と言いながら（明かに聞いてない感じで）、今度はお皿の上に置かれた煎餅を次から次へと平らげている。ちなみにそれは、先程、私が買ってきた煎餅である。

私は、それらの会話に加わるわけでもなく、ぼんやりと様子を伺っていた。

グウウウウウ

そして、何の結婚の話題が出ないまま一時間チョットたったときに、大陽くんのお腹があり得ないくらい大きな音をたてる。

時計をみると十二時半過ぎ。お昼の時間なのか……。さつきからケーキとか、お煎餅食べまくっていましたよね？ でもお腹を空かせているらしい。

「そういえば、そんな時間なのか！」

父は時計を見てつぶやく。

「駅前のホテルのレストランでもいくか！ なかなか美味しいフランス料理を食べさせてくれるんだ」

大陽くんの顔が嬉しそうに輝く。

「いいですね！」

なんか、結婚の挨拶をしにきた男というより、遊びにきた親戚の子のような、気安い、お気楽テイストを醸し出している大陽くん。そして私の運転で四人は駅前のホテルへと向かう。

大陽くんは、遠慮というものを知らないらしくて、『コレがいいです！』その時の季節お勧めの高めのコースを注文する。

父も『それ、旨そうだな』と私達の意見も聞かずに四人分注文し、また先程と同じように自分の話ばかりをしだす。

このお店は、焼きたての美味しいパンがお代わり自由なのを良いことに、大陽くんはそんな父の話を聞き流しながら、何度もパンをお代わりし食べていた。

母はそんな大陽くんを、頼もしそうに見つめている。そういえば大陽くんは定食屋のオバちゃんにもモテる。彼が注文すると自動でご飯は大盛りになる。そして美味しそうに食べている大陽くんに嬉しそうに話しかけてくる。中年女性というのは、よく食べる男性が

好きなものだ。

そして、父が満足に思う存分自慢話ができ、大陽くんのお腹が満足した所で会はお開きになる。

結婚についての話が一切行われないうちに……。

「お前達は、コレからどうする？」

父の問いかけに、大陽くんが『うーん』と応える。

「そういえば、ここのホテルで今ブライダルフェアしているみたいなので、ソレ冷やかします、一緒にどうですか」

その言葉に父は『ウーン』と悩む。

「いや、それはお前達二人で楽しんできなさい」

「そうですか、じゃあ！」「ご馳走様でした。失礼します」

そして、私達の所謂、『男性による女性のご両親へのご挨拶』は修了した。

私は、一生懸命この三時間ほどの時間を振り返ってみる。

基本的に、私と母は殆ど喋っていない。大陽くんが仕事の事と学生時代の事を少し話したものの、あと父は自分の話をしていただけ。その間結婚とか、お付き合いしているといった話題は一切なかった。

これは？ 『結婚のご挨拶』だったのか？

「じゃ、フェア見に行こう！」

なんとも釈然としない気持ちのまま、大陽さんと共に、近所のホテルのブライダルフェアを文字通り冷やかすことになった。

そこで結婚ムードを楽しみながら、色々な式の流れや、予算を健闘する。結果、大袈裟にしないで、百人から百五十人くらいのシンブルな式にする事にする。そしてお互いの親戚が関西地方に多い事から、式を行うのは新横浜にする事などを二人だけで決めた。

家に私が帰ったら、父は私と喧嘩していた事も忘れたかのように、上機嫌で慣れ慣れしく私に話しかけてくる。

「ブライダルフェアはどうだった？ 楽しかったか？」

「まあまあですね。でも流石にあのホテルでは式はしなないと思う。二人とも親戚は関西なので新横浜はいいかないという話になります」

私は父の機嫌が良いのを良いことに、どこまで父が私と大陽さんの関係を許しているのかを探ってみる事にする。

「新横浜か、玲子も新横浜だったし、それが良いかもな！」

父はうんうんと、笑顔で頷いている。私はよく分からないけれど、今回のイベントは無事クリアしていたらしい事を確認しホッとす。父の中では、結婚はOKになっているようだ。

黒くんは、私の話を聞いて呆然としている。

「つまり、渚さんがやったことって、ニコニコ笑いながら出されたケーキと、お持たせでもつてきた煎餅すべてを食べ尽くしただけってこと？」

流石黒くん、理解力が高い。一言でうまくこのイベントでの渚くんの行動を纏めた。

「そういう事になるね」

私はため息をついて、珈琲を飲む。

「すげー」

黒くんは感心するようにつぶやく。確かに凄いけれど、これは彼にとっでは何の参考にもならないだろう。

渚くんは、いろんな意味で運も良かった。一つは父親同士が仲良いわけではないけれど、知人同士であったこと。なので、少なくとも会う前から『どの馬の骨』なのかは分かっていた状態。

そして、まあ父が納得できるような企業で働いている事。そして父にとって敵にはなりえない存在だと識別された事が大きいのだろう。あと自己愛の強い父にとって最も怖れている事は、拒絶。直前に娘に拒絶された事が、父にとってかなり堪える事だったようだ。

そんな状況を一気に回復出来る存在として、渚くんは父にとって都合よかったのだ。

私は、黒くんに自分がそういう状況だからコレで上手くいったという事を、分かっているとは思っけと説明を加えておく。

黒くんは、そんな私の話を聞いて、チョット不思議そうな顔をする。

「月ちゃんってさ、意外にシビアな性格？」

もう知り合って何やかんや五年になるのに、何言っているのだろうか？

「え？ 何を今更。黒くん、私を見ていたら分かるでしょう」

『うーん』と黒くんは声を出す。

「いやさ、どんな相手もありのままを、笑顔で受け入れて懐深いな」と思ってたから、父親の事えらく容赦なく表現していたのが意外で」

私は随分と、出来た人間に誤解されていた事に逆に慌てる。

「いやいやいや、受け入れるというか、他人って私の力でそんなに変えられるものではないから、コチラが柔軟に合わせるしかないっていうのは普通でしょ？ 黒くんだってそうじゃない」

黒くんは首をふる。

「俺は、ただその場その場で合わせているだけだよ。適当。気に入ったヤツだけと関わっていつている」

「私だってそうだよ。好きでもない人と友達にはならないし、気に入った人とだけ深く交流していききたい」

「ま、普通そうだよな」

黒くんは、柔らかい優しい笑みを浮かべる。良い表情だなと私はその笑顔を見て思う。

元々、モテる事もあって男性として魅力のある人物ではあったけど、実和ちゃんと交際してから、さらに良い感じになってきたように私は感じる。

それまでは、不安定とまでは言わないけれど、彼の中で何かが噛み合ってなくてそれに苛立っているといった感じがあった。実和ちゃんという、彼だけをシッカリ見てくれる存在が、彼の精神に良い影響を与えたのかもしれない。

五年という付き合いもあって、気が付けば私にとっても何でも話せる相談しやすい良い友人になっていた。

こういう恋愛を抜きで、何でも相談できる異性の友達というのは、同性の友達とは違う意味で貴重である。

黒くんにとっても、自分がそういう良い相手であつたら、嬉しい。なので私は、実和ちゃんの為だけでなく、彼の為にもこの結婚を精一杯応援していきたいと思った。

とはいえ、私のアドバイスは、何処まで黒くんの役に立つのかは謎。

次の週の月曜日、黒くんは給湯室にいた私の所にソツとやってきて、大きくため息をつく。

「月ちゃん、俺の場合質問責めで、何かを食べるどころか、出されたお茶を飲む暇すらなかったよ」

まあ、それが、普通なのでしょね。でも、黒くんと実和ちゃんのこのイベントは無事乗り越えたようだ。

私は慰労の意を込めて、彼に美味しい珈琲を煎れてあげた。黒くんは、子供っぽい嬉しそうな顔でその珈琲を受け取って、デスクに戻っていった。

私はその背中にエールを送る。

そう、黒くんと実和ちゃんにはもう一個、厄介なイベントが残っている。

相手の両親へのご挨拶パート2！ 道のりはまだまだ長く――。

おかしなおかしな訪問者（後書き）

おかしなおかしな訪問者 1992仏

Les Visiteurs

監督：ジャン＝マリー・ポワレ

脚本：ジャン＝マリー・ポワレ

クリスチャン・クラヴィエ

出演：ジャン・レノ

クリスチャン・クラヴィエ

ヴァレリー・ルメルシエ

マリー＝アンヌ・シャゼル

しあわせ家族計画（前書き）

しあわせ家族計画

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

会社から歩いて三十分の距離で、目立たない地下にある隠れ家という喫茶店。私が誰かと密談したい時に利用するお店。

洞窟を思わせる内装で一つ一つのテーブルが、壁で仕切られていて、そんな雰囲気がコソコソ話に向いている。

私の前に、神妙な顔をしたカップルが一组。私もその二人の前でウーンと同じように悩む

そう、結婚をする際、もう一つ厄介なイベントがある。それは女性が男性の両親へのご挨拶。

実家が秋田にあるという黒くんの場合、色んな意味でスケシユールの調整が必要で大変なようだ。

しかも、彼の実家では離れて暮らしていた事で、まったく息子の状況が見えてなかった段階で満を持した状態で結婚するという女性を連れてくるわけだ。

黒くんのご両親の、期待と不安は推して図るべき。なんか家族全員が揃って待ち構えてくる様子を呈しているらしい。

まあ、基本は歓迎ムードなようだけど、イキナリー泊二日で挨拶というのも大変なものだな、と他人事ながらハラハラ見てしまう。

プロポーズ以来、ハッピースマイルが尽きることもなかった実和ちゃんの顔も、流石に今回ばかりは陰っている。

「大丈夫だよ！ 実和ちゃんみたいな子だったら、黒くんのご家族も一目で気に入るよ！ ね？ でしょ？」

キョロつとした目が私の方をチラと疑わしげに見てくる。私は彼

女の隣で、ふった言葉には応えず黒くんは何やら考えて居る様子の。この部分において私はまったく協力もできない、だからこそ黒くんが彼女を支え頑張つて貰わなければならぬのだが、二人とも同じように眉を寄せて『ウーン』と唸っている。

彼が、杞憂しているのは、家族に反対されるという事ではなく、黒くんの家族は女系家族で女性が元氣であること。だからこそ、アクティブな母、姉二人に、実和ちゃんが気後れしないかという心配。そこは、黒くんが間に立つて、上手くやってもらうしかない。

彼らの気持ちは理解できるけど、私はココでも己の経験から有効なアドバイスをして上げることができない自分のため息をつく。

「月さんはいいですよ！ 社交的で、初めて会う人とでもすぐ仲良くなれるから」

実和ちゃんは、そう言つて、また大きいため息をつく。

「いやいや、私も人と馴染むまで凄い時間かかるのよね。引つ込み思案だし、凄い内向的で何とかしたいと思つてるの、この性格」

二人が同じタイミングで目を細めてコチラを見ってくる。流石、結婚を決めた二人である、息のあつた動作をしてくる。しかしなんでだろう？ 二人の視線が痛い。

「月ちゃん、その二つの単語の意味分かってる？」

なんでだろうか？ 私の臆病で繊細な内面つて理解される事が少ない。あの女性心理をまったく理解できない、私の旦那様でさえ、そういった私の性格を分かっているというのに、それより付き合いは長いはずの黒くんがまったく気付いていないのが不思議で堪らな

い。大きくため息をつく。でも、今はそんな事を悩んでいる暇はない。

「あのさ、黒くんの家族ってどんな感じ？ 誰か喋る事を好きな人とかいる？」

「ん？ まあ、母親と上の姉貴は、姦しいけど、なんで？」

なるほど、私は頷く。

「最近読んだ本にね、人との会話を円滑に行うコツとかいうのが書いてあってね」

私は自分なりに、小心者で前に踏み出せない事は気にしてそれに、心理学や自己啓発本を良く読んで勉強している。良い結果をそれが生み出しているかは？ まだ不明だけど。

「なんか話を盛り上げる一番の方法は、喋りたい人に話をさせて、自分はそれに相槌打ちながら促すというのが一番なんだって」

実和ちゃんは、目を大きく開け私の方を、尊敬の眼差しで見つめてくる。単に本の受け売りだけなので、そんな瞳で見られるとこそばゆい。しかも元ホストである男性が人付き合いのノウハウを書いた本の一部の内容だし。

「確かにそれはあるけどね、かえって自分を出そう出そうと、必死になって喋るとボロも出やすいしね」

私は、黒くんの言葉に頷く。

「実和ちゃんの魅力って、穏やかさとニコニコした笑顔でしょ？だから無理してバリバリなキャリアウーマンとか、潑刺とした元気な女性とか違うキャラを作るよりも、実和ちゃんらしい可愛い笑顔で接するのが一番だと思う。兎に角、相手への親愛示す笑顔と挨拶を心がける、それに尽きると思う」

実和ちゃんは、若干緊張した様子の顔で真面目に頷く。

「あと、黒くんのご両親映画好きなんだよね？ だったら、ご両親に映画のお話とか、お話が好きなお姉さんに何か話題を積極的に振って、それを聞くようにするとかでどう？」

言葉の前半は実和ちゃんに、後半は黒くんの方に顔を向けて話す。私は黒くんの家族は、実和ちゃん以上に知らない。こんなので上手くいくかどうかは黒くんしか判断できない。

「確かに、親爺は映画の話をしだしたら、止まらないから、映画の話をしておけば持つかも！ まあ結婚に関して納得しているようだから。仲良くなってもらう為にも、ソレでいいかも」

もう、彼の中では大丈夫な気になってきたのだろう。いつものニヤ顔が戻っている。まあ、黒くんにとっては、勝手知ったる自分の家族だけに、このイベントに関して実和ちゃん程は心配していないのだろう。でも私の旦那様とは違って、女性の気持ちを少しは気を遣って、一緒にこうして悩んでくれるという所からみて黒くんは良い旦那様になりそうだ。

「何？ 月ちゃん、俺の顔シゲシゲ見て」

「いや、可愛い妹を、頼んだぞ、という想いを込めて見つめてまし

た」

黒くんは、ニヤリと笑う

「お姉様、飲み物のお代わりなどお願いしましょうか？ あ、ゴメン、遅くなったら渚さん心配する？」

「いや、今日は、珍しく飲み会なので、私は簡単に済まそうと思っていた所だから大丈夫」

そう、今日は食事の準備がいらないからお気楽なのである。簡単にパスタとかで済まそうと思っている。

「だったら、一緒に何か食べてく？ 奢るよ！ 相談料として」

同期で大体の給料が分かっているのと、コレから何かと入り用になる二人に奢ってもらうのは、申し訳ない。

「（黒くんの方が年上だけど）弟に奢ってもらうのは姉の沽券に関わるからいいよ！ でも一緒にご飯は楽しみたいかな」

「月ちゃんって、凄い割り勘とかファイフティー・ファイフティーに拘るよね。ま、お礼は今度形をかえて纏めてということで、何食べる？」

黒くんは苦笑する。フェミニストな彼にとっては、私のそういう所が可愛くないのだろうな？ とは分かっているものの、親しい友達だからこそ、お金の部分ではキチンとしておきたいと思うってしまうのが、私の意固地な所。

取りあえず三人で隠れ家から抜け出す事にした。

しあわせ家族計画（後書き）

しあわせ家族計画 2000年 日本

小林稔侍監督：阿部勉

脚本：山田耕大

キャスト：三浦友和

渡辺えり子

片岡鶴太郎

名取裕子

野際陽子

いかりや長介

平山綾

佐々木和徳

小栗旬

阿部寛

富士真奈美

吉村明宏

向井亜紀

徳井優

大竹しのぶ

鶴田忍

柳沢慎吾

笹野高史、

見えない恐怖

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

三人で、この近所でも評判のエチオピア風のカレーを食べさせてくれるというお店に行くことにした。お店に入った瞬間にスパイスというか漢方薬のような香りがする。

ネットではそれなりに評判なものの、入るのは初めて。期待半分、不安半分の状況で、二人も物珍しそうに、エチオピアっぽいであろう店内の様子を見回している。

辛さの基準が初めてのお店だけに分からず、私は一辛で、黒沢明彦は標準、実和ちゃんはマイナス一辛を注文することにした。

「そういえばさ、月さんは幼なじみでしたよね、だから相手のご家族との初顔合わせって楽な感じだったんですか？」

実和ちゃんが、料理を待つ間にそんな事を聞いてきた。確かに私の所は同じ年で同じ小学校に通っていた二人であるものの、同じクラスだったのが半年だけという状況な為にブツチャケ、子供時代の旦那様の事殆ど覚えていないというのが現実だったりする。馴染んでもいないのに、幼なじみと呼んでいいのだろうか？

「いや……。挨拶の時に初顔合わせでね、しかも私の場合、それぞれの両親への挨拶の間隔が一週間で、さらにその一週間後に、両家顔合わせというトンデモないハードスケジュールで進行しちゃいました」

実和ちゃんが、目をまん丸にして私を見る。結婚の経緯から私の旦那様のトンデモナイ挨拶を知っている黒沢明彦も首を傾げている。

そろそろ相談する相手を間違えているという事に気が付いてきたのだろうか？

そう、そういうイベントが一気にあったことで、不安と緊張に晒され眠れなかったし、食欲も減退し一ヶ月でかなり痩せたくらい、胃が痛かった時期だった。

「もしかして、その次の週に、結納で、次の週入籍とか言わないよね」

黒沢明彦がニヤニヤと意地の悪い笑顔でそんな事言ってくる。

私は苦笑して首を横にふった。流石にそれはない。

「いや、面倒だから、結納もしなかったの」

実和ちゃんは、首を傾げる。

「そんな事出来るんですか？」

「結局、結婚ってそれぞれの家同士の考えからのすりあわせだから、両家はそれで納得していたらどうとでもなる事なのよ！ 今関東では半分以上の人が仲人立てないけれど、地域によってはそうはいかないし」

実際名古屋とか京都の人だったら、結納は大事な儀式だろうし。

「そういえば、月ちゃんの式、仲人もいなかったね」

『そうそう』と私は頷く。姉が毎年仲人に対して、お歳暮お中元を出しているのを面倒そうだなと見ていただけに、私らは立てなか

った。

「俺達はどうしようか？」

「月さんにやつてもらうとか？」

実和ちゃんはノンビリと、あり得ない事を言ってきた。仲人は、もつと人格者で自分達の結婚の良き見本になってくれる人を選んで下さい……。

そんな事言っていると、カレーが運ばれてくる。これがエチオピア風なのね、普通のカレーとは違って、若干香辛料が違うようでありゆる普通のカレーの香りがしない。

食べてみると、辛いというより香辛料の香りがかなりストレートに感じる味だった。

ふと前を見ると、実和ちゃんの顔が真っ赤になっている。実和ちゃんにとってココのカレーは香辛料多くて、効き過ぎたようだ。

汗を拭きながら、それでも一生懸命カレーを食べる姿を、黒沢明彦はハンカチを渡しながら微笑ましそうに見つめている。なんかこういう雰囲気いいなと私までほのぼのしてしまった。

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

問1 以下の会話文で、父親がどういった心情なのかを書き出さない。

息子 『そうだ、俺、結婚する事にしたから』

父親 『ふうん』

息子 『月見里さんってオトンは知っているよね？ 九州時代に確か職場一緒だった』

父親 『……ああ、おつたな』

息子 『で、今週末ご挨拶行ってくるから』

父親 『そか』

東大入試並に難しすぎる問題である。我が家のイベントから間髪入れずに、大陽渚の両親との対面を告げられた私は、不安と恐怖から大陽渚の家族が私との結婚をどう考えているのかを知りたくて電話で聞き出したところ、こんな感じだったようだ。

「マズイ！ 髪も今、ボサボサだし、恥ずかしくないお洋服も用意しないと……」

私の言葉に、大陽渚はハハハと笑う。

「ウチの親、そんな事気にするタイプじゃないし、気使う必要もないよ」

そりゃ、大陽渚にとって、自分の両親はそうでしょうが……。父親から、大陽渚のお父さんがかなりの偏屈だとかいう話も聞いていただけに、脳天気で会いに行つてよい相手とも思えなかった。

「なぎ左右衛門さんのお父さん、お母さんってどんな感じ？」

恐る恐る聞いてみる。

「オトンは禿げていて、オカンは暢気で脳天気って感じ」

『禿げ』って……人間性聞いたのですが……。思ったほどの情報を聞き出せないまま、日曜日に慌てて母と洋服を買いに行き、そして美容院で恥ずかしくないようにカットしてもらい、次の土曜日に臨む事になる。

見えない恐怖（後書き）

見えない恐怖

原題：BLIND TERROR

製作国：1971年イギリス映画

監督：リチャード・フライシャー

脚本：ブライアン・クレメンス

キャスト：ミア・ファロー

ドロシー・アリソン

ロビン・ベイリー

ダイアン・グレイソン

ノーマン・アシュレイ

ミート・ザ・ペアレンツ 2

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

結局、お家訪問ではなく、それぞれの家の中間である駅で待ち合わせしてお食事という事になった。私は待ち合わせに指定された駅の改札を心臓をバクバクさせながら通り抜ける。私としては、かなり気合いをいれたメイクに、上品な淡いブルーのAラインのワンピースとお嬢様っぽい上品な格好で人生で最も緊張したイベントに挑む。待っていると、Tシャツにチェックのシャツにジーンズという、先週よりもかなりカジュアルになっている太陽渚が緊張感をまったく感じさせないヘラッとした笑顔でやってきた。

「相変わらず、早いね」

「早めに行動しないと落ち着かなくて。どう？ この格好で大丈夫かな？」

のんびりとした、太陽くんの笑顔に、私の緊張もやや緩む。今日ばかりは、この男が頼りなのだ。

「いいんじゃない？ てるてる坊主みたいで可愛いじゃん」

(……………てるてるぼうず……………)

「オトンたちは、暑いから、あっちのベンチで座っているって」

ここは苦情を言うべきが悩んでいると、太陽くんはそういつて促

してくる。それで私は不安に満ちた現実を思い出す。

大陽くんの後について、ファッションビルの一階へと入っていくと、通路のベンチに赤いチェックのシャツのバカデカイ中年男性が見えた。大陽くんはそちらにむかつて手をふる。

それが、大陽くんの父親なようだ。この身長は遺伝なようで、お父さんは五十代の筈なのに身長は百八十近くあった。大陽くんによく似たギョロつとした目と体型をしている。そして、何となくそうだろうなと分かっていたものの、その頭は薄かった。その男性に隠れるように小さい人影が二つ。大陽くんの母親と妹らしい。お母さんは小柄でショートヘアーのニコニコした女性で優しそうだ。妹さんは、ロングヘアーの目の大きく可愛い子だけどチョットキツそうな性格にも見えた。彼女の目の形も父親似なようで、顔のパーツ的には大陽くんと似ているけれど、上手くマイルドに女性的にアレンジを加えられている。大陽くんの顔のパーツでこんなに綺麗な感じになるのも面白いものである。

「始めまして、渚さんとお付き合いさせていただいています、月見里百合子と申します。宜しくお願いします」

私は出来る限り明るくニッコリ笑いながら、頭を下げる。

お父さんは『おう!』とだけ答え、お母さんは『コチラこそ宜しくね』と暖かい笑顔を返してくれて、緊張した様子で『妹の未歩^{みほ}子です、宜しく願います』とペコリと頭を下げてきた。

「こんな所で何だから、どこかに入るか……月見里さんは……寿司好きかね?」

「はい! 大好きです」

私は頷き、良い子の挨拶をする。そんな私をチラリとだけみて、お父さんは視線をファッションビルの出口へと向ける。

「……そか、なら行くか」

ニコニコと親愛のこもった笑顔をくれる母さんや、『百合ちゃんって呼んでいいですか?』と歩みよってくれる未歩子ちゃんとは違い、お父さんの感情が読めない。怒っているようでもないけど、笑顔なわけでもなく、なまじ体格が良いだけに存在そのものが圧迫感がある。

そして、連れていかれたのは、回転寿司屋。

ボックス席に案内され、お向かいの席に、レール側からお父さん、お母さんと並び、そしてコチラの椅子に大陽くん、私、未歩子ちゃんと座る。

大陽くんは、座ると同時にレールに流れるお寿司をホイホイと取り上げている。未歩子ちゃんは『渚、私マグロ、ウニ、サーモンとって!』と兄を使って目当てのものを取り寄せ、お父さんもレールから自分とお母さんの寿司をテーブルにおいていく。私は取りあえず、お醤油皿を配り、茶碗をとり人数分のお茶を作り配ることにする。

「ところで、月見里さん」

お父さんは、三皿くらい食べて、お茶をグビつと一口飲んでから私に話かけてきた。私は慌てて口の中に入っていた寿司を飲み込んでから『はい』と応える。何を言われるのか、分からず緊張する。

「君のお父さんとは、色々縁があってね」

「はい、大学も一緒だったのですよね。父もよろしくお伝えする

ように申して おりました。今度お逢いするのを楽しみにしている
ようです」

やはり、私の父同様まずは切り出しやすい所からくるものよね。
私の言葉に『そか』とだけ素っ気なく応えるお父さん。

「お父さんといえば……」

「はい」

なんか、父の事だから、昔、大陽くん父にとんでもない事をした
のではないかと私は、内心、ヒヤヒヤしながら頷く。

「まだ、髪の毛はフサフサかね」

そこですか？ 十年くらい逢ってない知り合いの気になる所が…
…。どう答えるべき？ まさか父の頭髮の量が原因で『婚約出来ず』
なんて事ないよね？

「ええ、まあ、流石に白髪は増えてきました」

私はあえて、ぼかして表現する。

「月見里さんは、オトンとちがって、フツサフサだったよ！」

なのに、隣で大陽くんはトンデモナイ事を言ってくる。その言葉
にチツと舌打ちする、大陽くんの父。その様子に、私はこの方の前
では絶対『ハゲ』とか『薄い』とか『ヘアースタイル』といった話題
はしないでおこうと、心に誓う。

「ところで、百合ちゃん、どうして渚なんかと結婚しようと思ったの？」

微妙な空気に、未歩子ちゃんがまた難しい質問をしてくる。

「え？」

まさか『愛しているから』とかも家族の前で恥ずかしくて言い辛い。

「渚って、怒りっぽいし、横柄だし、良いとこないでしょ？」

「それに、百合子さん、コイツ、オタクだぞ！　こんなんで良いのか？」

お父さんまで、そんな事いつてくる。結婚に反対はしていないようだ。どちらかというと、私が大陽くんという人物に納得できているかを心配しているようだ。

「オタクなのは私もですし、趣味も同じで楽しくお付き合いさせて頂いております。」

妹は首を傾げている。納得いつてない様子だ。まあ、私の兄が結婚相手連れてきたら、こんな性格歪んだ兄でいいの？　とか聞いてしまいそうだから、こういう感じになるもの仕方がないものなのかしら？

「つま、百合子さんがいいなら良いけどな」

「そうよ、そうよ、こういうのは縁だから。百合子さんがおおらか

そうだから、渚でもいいのでは？」

お母さんは、ニコニコ笑っている。ああ、このイベントで、お母さんの笑顔が何より私の最高の癒し。私も心からの笑みをお母さんに返す。なんかこのお母さんとならうまくやっていけそうだ。でも、このイベントで良くわかったのだが太陽くんの家族って、基本的に気ままで自由人だ。それぞれが好き勝手な事をしていて、それぞれが私に話しかけてくる為に一つの話題で盛り上がるという事はない。なんとも不思議な空気のまま、二時間ほどで『じゃ、そろそろ帰るか、駐車場の時間もそろそろだしな』というお父さんの一言でお開きになる。

「もう一人、下に弟がいるけど、遅くとも結婚式には会えるだろうじゃ」

そういつてお父さんはお母さんと未歩子ちゃん連れて駐車場の方向へと去っていった。

「なぎ左右衛門さんの家族って、かなり自由人？」

私は姿が消えたあとに、隣の大男にそつと訪ねてみる。

「かな？ だから、言ったでしょ？ ウチの家族は気つかう必要はないって」

確かにそこまで気は使わなくてよいかもしれないけど、別の物を使いまくったようで凄く疲れた。でもなんか肩の荷が下りてホッとする。

「凄く喉渴いたから、お茶しない？」

大陽くんは、ニツコリ笑って頷く。

「さっき、向こうで美味そうな、ケーキのお店見つけたよ！」

「いいね！」

さっきお店では緊張であまり食べられなかったけど、挨拶が無事
終わり久しぶりにお腹空いてきたような気もする。二人でニコニコ
と笑いながら甘い香りに満ちた世界へと歩き出すことにした。

ミート・ザ・ペアレンツ 2 (後書き)

ミート・ザ・ペアレンツ 2 2004米

Meet the Fockers

監督：ジェイ・ローチ

製作：ロバート・デ・ニーロ

ジェイ・ローチ

脚本：ジョン・ハンバーグ

出演：ロバート・デ・ニーロ

ベン・ステイラー

ダスティン・ホフマン

家族会議

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

「では、ご注文繰り返させて頂きます。三種のステーキセット2つに、稲庭うどんキノコ御飯セット二つに、天ぷらそばセット一つにドリンクバー6つですね」

ファミリーストランに、バイトのウェイトレスさんの可愛い声が響く。その言葉に満足そうに頷く、大陽くんのお父さんとお母さん。隣を見ると私の母と父が『どうしたものか』という顔をしている。

このメンバーで、ファミレスで何をしているかとういうと、なんと両家顔合わせ。別に私は体裁とか仕来りとかに拘るほうでもないけど、両家の両親の顔合わせって普通は落ち着いたレストランか料亭、もしくはホテルかどちらかのお家で行うものだと思っていた。大陽家が指定した待ち合わせ場所にいき、じゃあ行きますかと連れてこられたのがこの、家族連れで結構なテンションで盛り上がったファミリーストランだったのだ。

私がドリンクバーに行き、みんなの飲み物を用意している間に、それぞれの自己紹介は終わっていたようだった。

父親同士は、知り合いであるので、会話はそれなりにしているようだ。が、久しぶりにあった知り合いのわりにその再会を喜びあっているように見えないのは気のせいではないと思う。

「ところで、コレからどうするんだ？ 結納とか色々あるだろ」

やはり、こういう事は元上司というより、男性側の親が仕切るも

のなのだろう。大陽父が話を切り出してくる。

「まあ、無くてもいいだろ、面倒だし」

それに、なんか偉そうに応える父。

姉の時に、父はそういったイベントに疲れはれていたらしい。でも、こういったイベントを面倒くさいで、すませていいのだろうか？ そういった事を大事にしている家だってある、大陽家はどうか？ 恐る恐る大陽父の顔を見ると、不快そうにもしていないようだ、大陽母も変わらずニコニコしている。

「それもそうか、なら無しでもいいか」

（結納はなしでいいのね……）

そう言って、大陽父は珈琲をすする。

「あと、月見里さんの家も、ウチも親戚関西だから結婚式は新横浜にしようと考えてる」

「それはいいな」

二人の父親は、同じように頷く。仲良くないけれど、こういう気はあうようだ。

「あと、月見里さんの家、クリスチャンなんでチャペルでええよな」

我が家というより、母が敬虔なクリスチャンで、姉の時も、それで揉めて半ば強引に教会式となったのだ。今の太陽くんの言葉に、母が嬉しそうにウンウン頷いている。母にとって、『バージンロー』

ドを娘が颯爽と歩き、神父様の前で結婚の誓いをする』その光景を見て、ああ娘は結婚するのねと、実感出来喜べるという事らしい。その事を前に話していた事を覚えてくれていたようで、大陽くんが切り出したようだ。その言葉に彼の父は眼を剥く。

「うちは神道やで！ 本家が五月蠅くいつてくるぞ！」

（う、彼の京都の本家が出てきた）

「本家のあっちゃんだって、ホテルの教会であげてたやん」

すかさず大陽くんが、そんな反論を試みる。

「そついやそつやな、ならええか」

（いいんだ、それで）

料理が来る前だけど、もの凄い勢いで物事が決まっていく。そして、料理がきたことで、話し合いは一旦お預けになる。とりあえず陽気な母親同士が楽しそうに盛り上がっているから間は持った。しかし、父親同士、なんで互いに目も合わせないし喋らないんだろうか？

食事が終わり、珈琲のお代わりを飲みながら、落ち着いたところで話し合いが再開する。

式は秋ごろを目処にして、仲人も立てないということ。入籍もそれに合わせて、結婚式は教会式で、引っ越しも式のチョット前くらいでという感じになった。

本当はどさくさに紛れて、大陽ちゃんとマンションで先だって一緒

に暮らしちゃおうかなとも若干思っていたけれど、両方の父親に『一緒に暮らすのは、結婚してからやで！ そういうことはチャンとせんとな』と目も見開かれて釘を刺されてしまったので断念することにした。

家をちゃんと出るといふのは意外に大変なものらしい。

そして、私達は無事、結婚式における難関というべきゾーンを突破することができた。

結婚イベントのうち、プロポーズと両家顔合わせの両方を、庶民的にファミリーストランで行ったのは私くらいなのかもしれない。

家族会議（後書き）

家族会議

監督：島津保次郎

原作：横光利一

脚本：池田忠雄

キャスト：佐分利信

鈴木歌子

志賀靖郎

及川道子

高杉早苗

桑野通子

高田浩吉

結婚哲学

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

結婚準備で大変なのは、それぞれの両親への挨拶といった段階の話。この後は結婚式準備と新生活準備と新婚旅行準備、テンションも上がっている事もあり、大変ではあるものの楽しいものである。なんていつても結婚をする二人ということもあり、誰に憚ることなくラブラブに生活できるのもこの時期ならではの面白さ。

黒くんと美和ちゃんは結婚情報誌を広げ仲良くランチタイムを楽しんでいる。

「此处、いいね！ 料理が超豪華で！ 三つ星シェフによる最高の料理に舌鼓」

「そこ、メチャクチャ高いじゃん！ 却下」

その雑誌をのぞき込みながら、同期の松梨改め松木友子となった友ちゃんが、そのやり取りに加わっている。苗字が一字だけしか変わらなかったことで、会社の人に「何？ その地味な変化」とからかわれたものである。

「えー、招待される方の立場からいうと、二人がどんな格好するかなんかよりも、料理は重要よ！」

何故か、実際声をあげて会話しているのは黒くんと友ちゃん。この二人実は昔付き合っていた。普通だったかどうかと思う状況だけど、友ちゃんはサッパリとした性格で過去を振り返るタイプでもないので、別れた後も二人は良い友情関係を続けているようだ。それ

に友ちゃんは現在新婚ホヤホヤで、結構会社でも惚気ている事も多いだけに実和ちゃんからしてみても、心配することもないのだろう。ニコニコと二人の言葉に頷いている様子なので、私も気にせずそのやり取りに加わっている。夏美ちゃんだけは、その様子を口出しすることもなく静かな表情で見守っているというか、興味がなさそうに見える。

『料理はケチるな！ ショボいとずっと恨みかうぞ！ 前のあつちやんの時は、料理少ない、少ない、アレは参ったよ！』

私は、ギョロつとした目を見開いてそんな事を言ってきたお舅さんの顔を思い出す。大陽父は、その結婚式の料理がかなり不満だったようだ。

「たしかに、料理は重要だね。でもブライダルフェアでも試せるから、確認するのもいいかも！」

私の言葉に、実和ちゃんはビックリしたようにコチラを見る。

「え！ 試食とか出来るんですか？」

私は、よくぞ聞いてくれたと、ニコリと笑う。やっと婚式経験者らしいまともなアドバイスが出来る段階にきた事が嬉しい。

「ブライダルフェアには、模擬結婚式とかに参加したら安く、もしくは無料でディナーを楽しめるから！ そうそう、二人に是非勧めの結婚式場があるの！ チネチッタ！（川崎にある映画館を中心とした商業施設） イタリアの映画都市を模した都市で結婚式素敵でしょ？」

「え？ 川崎のチネチッタって映画館だろ？ なんでそこで結婚式」

絶対、映画好きな二人なら食い付いてくると思ったのに、実和ちゃんはおポカンとして、黒くんは、怪訝そうな顔でコチラを見る。

「映画館の上に、なんとチャペルがあつて、しかもそのすぐ前に披露宴挙げられる素敵なレストランあるの！」

実和ちゃんは、『へえ』と少し心を動かされたようだ。

「しかもね、ここでの結婚式での凄い所はね、ココで結婚式あげるとね、一年間映画フリーパス券がついてくるの！ コレはお得だよ」

私は、結婚式挙げたあとにこの事実に気が付いて悔しい思いをしたものである。コレがあれば、我が家の家計がどれほど助かったのか……。

暫くウーンと何か悩む様子の黒くん。

「それって、そのフリーパス券って使えるのってチッタのみ？」

私は大きく頷く。しかしそんな私を見て黒くんはガッカリした顔をする。

「川崎までいかないといけないのは、ちとキツイかな。俺ら、大塚や池袋とか池袋で観ているから」

我が家からは、川崎は一本で行けるからいいけど、そうでない人にとって、川崎は利用しにくい都市なようだ。非情に残念な話である。

「まあ、雑誌だけ見ても何も進まないから、まずはブライダルフェアに行ってその式場の空気を肌で感じて決めるべきだと思うよ」

私の言葉に、友ちゃんも、『そうそう』と頷く。

「それにね、ブライダルフェアって、結構リーズナブルに楽しく遊べるデートイベントだしね」

友ちゃんは、私や夏美ちゃんの方に同意を求めるようにニカツと笑う。私も同じような笑いを友ちゃんに返して頷く。

そう、ブライダルフェアって、模擬結婚式という形でディナーが試せたり、メイク講習とか、ブーケ作り体験とかの講習をしたり、無料もしくはリーズナブルに様々なイベントを用意しているので、結構楽しかったりする。

「だよねー！ 私なんか、二人で千円という感じでディナーコース楽しんだり、お舅さんとお姑さんの四人で式のフルコース頂いたりということしたよ」

友ちゃんも、人の結婚準備を見守りながら、自分の準備期間の楽しかった事が蘇ってきたのだろう、ニコニコと私の言葉に頷いている。

「そうそう、私も人気パティシエによるケーキを食べながら結婚相談とか、衣装の試着とかも楽しかった！」

ほう、そんな素敵なものもあるのだ。今度夫婦でコツソリ冷やかしてみようかしらと、一瞬良からぬ事を考える私。

「そうよね、衣装着てメイクして撮影というのもあって、結婚気分を良い感じで盛り上げてくれるわよね。フェアー冷やかしは、お金とか考えずに単純に楽しめるわよね」

夏美ちゃんも、フッフとのってきた。

「そうだよ、実際式の事詰めていくと、色々細々、コレにいくらかとなってきたてきてシビアになるからね」

既婚女性三人が顔を見合わせ楽しそうにブライダルフェアの話をしているのをみて、結婚準備期間の二人も興味が沸いたようだ。

二人で『じゃあ、今週末行ってみる?』とか言ってる。いる。

その後既婚三人による、見積もりに関する講義が始まる。フェアーを冷やかすにしても、必ず『とりあえず見積もりを』といった状況になる。その事自身は、色んな意味で検討の材料になるので良い事なのだが、その見積もりには結構落とし穴がある。あえて載せて無くて、安く見せて後で色々発生する危険性のある項目について説明をしておく。この事を知っておくだけで、その場でその金額について質問したりと出来るので、先に知って置いて損はないからだ。

私だけでなく、冷静な友ちゃんと夏美ちゃんの的確なアドバイスもあり二人のフェアーへの参加の心の準備は完全に整った。

なんか、当事者だけでなく、同期である私達三人もワクワクしてくる。やはり結婚というイベントって、周りにいる人を幸せにするパワーのあるモノなのかもしれない。ともあれ、さらに強力な助っ人も加わり、二人の結婚準備はより順調なものになったのは間違いない。三人は笑顔でフェアーに二人を送り出した。

結婚哲学（後書き）

結婚哲学（THE MARRIAGE CIRCLE）

1924年アメリカ映画

監督：エルンスト・ルビッチ

原作：ロタール・シュミット

キャスト：アドルフ・マンジュー

マリー・プレボー

フローレンス・ヴィダー

モンテ・ブルー

食客

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

「お天気が良いと、コチラから富士山も見えるんですよ」

ほうほうとブライダル相談員という肩書きの恵比寿顔のオジサマの後について、私と大陽くんは、ニコニコとホテル内を移動する。つい一緒にいるだけで、コチラまでなんか笑顔にすると、この男性の恵比寿顔パワーは凄まじい。この顔だからこの仕事についたのか、この仕事についている間にこの顔になったのかと私はどうでも良い事を考えていた。

この顔で鬼瓦という名前なもの、合わせて面白い人物である。

「コチラの披露宴会場は、大人数用というか、両家親族だけ結婚式というのに向いていまして」

驚いたことに、会議室のように中央に大きなテーブルがデーンと置かれている。

「一つのテーブルをみんなで囲む事で一つの輪を生み出すというコンセプトでご用意しました」

面白い発想だけど、流石にそれぞれの家族、親族、会社の人、友達も一色単に同じテーブル囲むというのは無理がありそうだ。

恵比寿さんのキャラクターは非常に気に入ったのだけど、ホテルが駅からやや分かり辛いところにあることと、ホテル自身がやや古くて垢抜けない感じがちょっと気になった。

恵比寿さんは、『どうでしょうか？ 良かったら、お見積もりなんか作りいたしますよ』と福々しい顔で微笑む。これを断ったら、バチが当たるのではないかというくらい神々しい。

折角だからと、大陽くんは百五十人くらいの人数で披露宴の見積もりを作成してもらった。どの業界でもそうなのだろうが、ブライダル業界も漏れず競争が激しいようで、客を引き留めることで必死なようだ。見積もりだけのつもりが、日にちの仮押さえというものでさせられてしまった。後で断る可能性が高いと思うのに、結構どこのホテルでもそのように、日にちの仮押さえというのを勧められて正直私達は驚いた。

「いいんじゃない、検討もできるし、後で断ればいいだけだから」

大陽くんは暢気なものである。しかしその断るのって、誰がするんだろうか？ 私は恵比寿さんのいるこの式場意外、明らかに使わないなと思った所は、『まだスケジュールが調整できなくて、いつ式挙げるかは悩んでいる』とか言って断るようにした。散々フェアでリーズナブルに楽しんで、逃げるというのも心苦しいけれど、後で断る方がさらに心苦しいものだから。

次に候補にあげたのは、駅からも近く、姉も利用したホテルである。姉が実際に挙式をあげた場所だけに、イメージはかなりしやすかった。今度は、人の良いおば様という感じの人が担当で、良く言えば親身、悪く言えば馴れ馴れしく接してきた。肩書きはブライダルプランナー。

「大陽様は本当に大きいですよ〜なんて素晴らしいのでしょ〜」

何故か大陽くんのデカさが気になるようで、事ある毎、場所がか

わる度にそんな言葉を挟んできた。

そしてそのおば様ブライダルプランナーの勧めで、模擬挙式に参加し二人で千円という価格で、チョッピリお洒落なコースディナーを楽しむ事にした。ここでは、披露宴気分を味わってもらうために、一旦相談員の離れることもあり、私達はそこで気兼ねなく話し合うことにする。

「なぎ左右衛門の所、親戚はどのくらい？」

「うーん、全ての伯父伯母だけで二十人、あと従兄弟がどの程度くるかな」

「うちは伯父伯母だけで十八人で、家族は渚左右衛門さんの所が家族は四人で、ウチは甥っ子姪っ子いるから七人か、確実に参加の親戚だけで五十人弱か」

このホテルは、どちらかというと宿泊よりも挙式がメイン事業という場所なようで、ブライダル関連のサービスが充実しているのは良いけど、関西から来てくださる親戚の方の為に用意できる部屋が少なかったのが気になった。なんせ、二人とも関西から親戚がくるために、その分の部屋の用意が必要なのである。

「まずは、互いの親戚がどのくらい来るかを調べてからか、招待客決めるのって、やはり百五十人とみて正解なのかな？ あっ珈琲で百合ちゃんも珈琲だよな？」

「あ、はい珈琲お願いします」

話し合っているうちに、料理のコースも終盤にかかっていたよう

だ。

食後の珈琲を飲みながら、大陽くんは、何やら『うーん』と考えているようだ。

「あのさ、百合蔵さん、この後ラーメンでも食べに行かない？」

やはり、若干軽めのこのコース、彼には明かに足りなかったようだ。私はお腹いっぱいとは言わないけれど、このあとラーメンを食べるほどまではお腹は空いてない。

「流石に、私は今からラーメンは辛いから、ファミレスでいいかな？」

ファミレスなら、私は飲み物飲んで、大陽くんにはお腹の隙間にあう食べ物を食べて貰うことが出来る。

「じゃ、それで！」

ニツコリ嬉しそうに笑う大陽くん。

披露宴会場から出てくる私達をニコニコと迎える、担当のブライダルプランナー。

「如何でした？ 料理とか雰囲気とか」

まあ、特別素晴らしいわけでもなかったけど、悪くもなくまあ普通に楽しめた。

「素敵でした」

私はニツコリ答えておく。そうすると嬉しそうにブライダルプラ

ンナーさんも笑う。

「ところで、今日頂いた料理って、実際の結婚式の料理と同じと考えていいのかな？」

大陽くんの質問に大きくプランナーが頷く。

「はい、同じように誠意を持ってサービスさせていただきます」

「内容も？」

大陽くんの聞きたがっている点が私には分かったけれど、プランナーさんは理解してなかったみたいでニコニコとしている。

「はい！ 季節の食材に関しては変更になることはありませんが、ほぼ同じ質のメニューを提供させて頂きますのでご安心下さい」

そして誇らしげにニコリと笑う。

大陽くんは『そうですか』と笑いながら頷いているけれど、その目がチョットガツカリしているのが私にはなんか分かった。喜んでいる時とガツカリしている時で、ここまで目の輝きが変わる人も珍しい。営業マンが絶対出来ないタイプである。

大陽くんはサービスとか味というより量に明かに不満を覚えていたようだ。今までのデートでも二人で色々食べにいった時、彼が特に目を輝かせて喜んだ料理というのは、それなりに美味しくて盛り量の素晴らしい料理だった。お洒落でしかも味も素晴らしいお店でも量が少ないと今のような感じの目をする。物足りないので、満足できてないのだ。

私の頭に、大陽父の『料理』についての、言葉が蘇る。このアメリカンサイズ体格と胃袋を持つ一家を満足させる料理って結構大変

かもしれない。

食客（後書き）

食客（Best Chef）

2007年 韓国映画

監督：チョン・ユンス

脚本：チョン・ユンス

シン・ドンイク

キャスト：キム・ガンウ

イム・ウォニ

イ・ハナ

ウェディング・プランナー

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

次に候補にあげたホテルは、駅から見えるところにあり道を渡らねばならないけど、まあ来る人は迷わ事はないだろう。

ここで私達を担当してくれたのはブライダルプランナーという肩書きの百八十センチくらいの三十代くらいの男性だった。平井堅っぽい、かなり濃い顔をしている。

「このような顔していますが田中です。生粋の日本人ですので」

初っぱなから、そんな挨拶で私達を和ませてくれた。

ザ・ホテルマンという感じで物腰や柔らかく慇懃。丁寧だけでなく心のある接し方が印象的だった。

この式場では、たまたま九月にキャンセルが出ていたために、一番早く結婚式を挙げられる。

「この日にちだったら、ゆりぞ…百合子さんの誕生日の丁度一ヶ月前でいい感じだね。覚えやすい」

流石に他の人の前で、いつもの名前で呼び合うのは恥ずかしいので、「百合子さん」「渚さん」と呼び合うのが、なんかくすぐったい。そんな二人の様子を、平井堅さん、ではなく田中さんはニコニコと見守ってくれている。

「しかも九月に結婚出来るのって嬉しいよね」

他の所で上げるよりも、一ヶ月も早く二人で暮らせる。

結局、このホテルで式を挙げることにした。このホテルは丁度改装したてで綺麗だったことと、十年記念イベントで価格的にも結構お得に豪華に挙げられるというのが大きく。いろんな意味で私達にとって条件が良かった。

ブライダルプランナーの田中さんという人物の魅力も大きかったのかもしれない。

質問に真摯に答えてくれることと、田中さんが担当してきた過去の結婚式の経験を元に様々なアドバイスとかもしてくれた。子供用の天使の羽の衣装とか、無料で使えアイテムの存在をコッソリと教えてくれたり、あまり年齢が高すぎなく、感覚の若さからくる提案がフィーリングが合っていたのだと思う。大陽くんも、年齢の近い田中さんは、他のオジチャン、オバチャンの相談員に比べて話しやすく良かったようだ。

でも、彼がココに決めたのは、十周年記念特別イベント炎のケーキがあったからに違いない。新郎が炎を操りアイスケーキ仕上げて振る舞うという出し物が用意されていたのだ。

このイベントの良いところは、新郎の手によってかなり派手なショーを来賓客に楽しんでもらえるということだけでなく、デザートが一品増えるのだ。なんてお得なイベントなんだろう。しかも来賓客もビックリするのも間違いない。こんな面白い隠し球も用意できた結婚式、楽しいものになりそうだ。二人でワクワクしながらホテルを後にした。

二人で手を繋いで、駅まで態と遠回りして帰る。だってここからだとな二人の家は間反対にあるためにホームから違う電車に乗って帰らないと駄目だから。

「じゃあ、仮押さえしていた式場、キャンセルいれないとね」

すっばりと私の手を包む、大陽くんの大きい手の温かさが気持ち良い。

「だね、全部で六件か、じゃあ俺最初に行った三件キャンセルの電話かけておくから、百合蔵さん残りお願い」

三十センチ上から、大陽くんが私の顔を見てニコリと笑う。私も同じような笑顔を返す。

「了解！ 明日でもかけておくね。なんかいいよ走り出したって感じでワクワクするね」

何がおかしイのか、私をみて人の悪い顔で笑う。

「そう？ ま、一生に一度の事だから、楽しまないとね」

「だね！」

私は繋いでた、大陽くんの左手を自分のほうに引っ張り両手で抱しめる。

「重いよ！」

大陽くんは、サツと腕を引きその手を私の左肩におきグツと力をいれて上から押す。

「重い！！！」

「仕返し！」

クスクス笑って、そのまま肩を抱き寄せてくる。

人が少ない暗い道とはいえ、やってることはハッキリいつて馬鹿ツプルである。自分でもある意味、こんな風に人に甘えたり、ジヤレたり出来るのに驚いている。でもなんでだろう、そんなに馬鹿になっっている自分も嫌じゃない。

そのまま他愛ない話をしながら、馬鹿ツプルな私達は夜の道を歩いていった。

次の日、会社の昼休み私は手帳に挟んであった、ホテルの名刺を取り出す。大きく深呼吸して一件目のキャンセルの電話をいれることにする。

「本当に申し訳ありません。担当の方にも本当にお世話になったのですが――」

散々色々相談に乗ってもらいお世話になった事もあり、出来る限り丁寧にして誠意をもってキャンセルの意図を伝えることにした。

「そうですね、分かりました。ちなみに、ドチラの式場に決められたのでしょうか？」

電話の向こうの女性が、あまりにも想定外の事を聞いてきた。

ここまで聞いてくるものなのだろうか？

「あ……………新横浜ロイヤルホテルです……………」

なんか、凄く言いにくい。内心かなりビビりながら私は自分が挙式するホテルの名前を相手に伝えた。

「そうですか」

なんか、良くいえば落ち着いた、悪く言えば抑揚のない言葉が怖い。嫌な汗が流れる。

「では、またの機会のご利用お待ちしております」

そう言って、電話は切れた。

（え？ またの機会って、どういうこと？ また結婚式挙げるときはどうぞって、嫌味？）

残り二件、電話するのが怖くなってきて、私は大きく溜息をついた。

でも、そのホテルのその女性だけが、おかしかったようだ。残りの二件は、穏やかに『ウチとしては残念ですが、無事会場も決まって良かったですね。式の準備頑張ってくださいね』といった暖かい言葉をで応じてくれた。お陰で、ドーンと落ち込んでしまった嫌な気持ちは少し治まった。太陽くんに、メールで聞いてみた所、アチラの三件も何の問題もなくキャンセル出来たらしい。

ということは、一力所だけが怖かったということなのね。良かったあんな式場ばかりでなくて。私は妙な事に安堵していた。

ウェディング・プランナー (後書き)

The Wedding Planner

2001年 アメリカ映画

監督：アダム・シャンクマン

キャスト：ジェニファー・ロペス

マシュー・マコノヒー、

元カノ／カレ

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

六月になった。今年は梅雨の気が早いのか一周目から、もう連日雨の日が続いている。この月に結婚する花嫁は幸せになれるというけれど、それは西洋での話である。日本においての六月って梅雨の季節。こんな気候の悪い時に、態々自分の結婚式に出向いてもらうなんて、なんか申し訳なくなりそうだ。まあ私の結婚式は九月だとはいえ、雨の危険性はゼロとはいえないので、どうなるのかは分からないけれど、多分今年の六月よりかは雨の危険性は低いとは思う。私と太陽くんの日頃の行いにかかっているけれど、どうか晴れて欲しいものである。

雨の所為でイマイチ仕事をする気が盛り上がらない私は、珈琲でも煎れて気分を変える事にする。私にとってカフェインはやる気スイッチを入れる為のスイッチのようなものだから。

なんか楽しそうな声が聞こえるなと近づくと、黒くんと友ちゃんが仲良さそうに話している。かつての恋人同士のはずの二人が、別れた後もこんなふうに仲良く友情を続けている。そんな二人が羨ましくてつい立ち止まってジッと二人を眺めてしまった。

そんな私の存在に気が付いたようで、友ちゃんが私の方に気が付き、二カッと太陽のような笑顔になり手を振ってくる。

「月ちゃん、そろそろお祝いで欲しいモノ決めてくれた？ この際だから、高いモノ言つてよ！ 会社中から予算かき集めておくから、足りない分は、黒くんのポケットマネーでなんとかするし」

「俺のかよ!」

うーん、ツツコミのタイミングまでピッタリ、なんて息の合う二人なのだろうか? 思わず二人のやり取りに笑ってしまう。

「あ 電話みたい、私いくね!」

そう言っ、ブンブン私達に手を振って、友ちゃんは去っていった。それを穏やかな笑顔で送り出す黒くん。

友ちゃんの姿が見えなくなって、改めて黒くんの顔をしみじみ見してしまう。

「どうしたの? なんか変な顔して」

ここ最近ズツと自分の中でひっかっていた事、この人なら聞けるかなと思った。逆にこういう事聞けるのはこの人しかないような気がする。

「……あのさ、非常に聞きにくい事なんだけど、聞いていい?」

黒くんの顔から笑顔が消え警戒した様子で私を見下ろす。

「ソレって、こんな所で会話しても大丈夫な内容?」

「大した事じゃないんだけど………黒くんは元彼女から、結婚のお知らせってどんな形で教えて欲しい?」

私の方をビックリしたような顔で見たまま、黒くんは固まる。

「……………は?」

「……いや……成美ちゃんの時どうだったのかなと」

成美ちゃんとは私の同期で黒くんのこの会社での最初の彼女。去年結婚して、二人で同期として結婚式に出席したばかりである。

「……………あのさ、まさかだと思うけど、招待状を元彼に送ろうとかしてないよね？ ソレ絶対駄目だから！ 頼むから、止めて！」

何故かこっちの知りたかった事は答えてくれず、私を必死になつて説得してくる黒くんに、私は、ソレは大丈夫だから首を縦に振る。まさか、ソコまで私は考えていません。

「招待するとかでなくてね、『コチラは幸せに元気にやっています』というのを伝えたいだけなんだけど。メールで伝えるのもなんか冷たい気もするし、電話も照れるし。黒くんの時はどうだったのかな？ と」

黒くんは頭を抱えてしまった。

「あの……黒沢さん、東和さんから電話来ているのですが」

そんな時、実和ちゃんがやってきて、遠慮がちに声をかけてくる。

黒くんは何故か髪の毛をガシガシ掻きむしってから、『馬鹿な真似は絶対しないように』と私に言い放って離れてしまった。

やはり、元彼女と普通に接しているように見えて、黒くんも色々思う所があったようだ。

元カノ／カレ（後書き）

元カノ／カレ（EX）

2009年 イタリア映画

監督：ファウスト・ブリッツィ

卒業

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

東和薬品さんからの黒くんへの電話は、明日受け渡し予定の原稿が、明日から担当者が出張に出てしまうとかで、今日渡しておきたい。といった内容だったようだ。

手一杯で動けなくなった黒くんのかわりに、私が動くことになった。東和薬品さんに原稿を取り、電車で一息ついたときに鞆の中の携帯が震える。

原稿について、どうだったかという黒くんからのメールかな？
と思っただけ違ったようだ。

『やつほー 今日でも明日でもいいから、デートしよ！』

クールな見た目から考えられない、茶目なメール。文章を読んで笑ってしまった。

こういうタイミングって面白い。コチラが逢いたいなと思っていたら、結構その相手から連絡ってくるものである。今日は、この原稿を手配すればいいだけだから、今日の方がいいか。そう思って返事を出す。

『喜んで！ 久しぶりのデート、ワクワクする。デートと分かっていたら、お洒落して来たのに残念！ 会社出るタイミングでメールするね』

『オツケ』 慌てなくてもいいから！ デートなのだから、お化粧崩れたまんまってことないよう！ いつもの喫茶店で待ってるね』

このメールの相手は、婚約者である大陽くんではない。かといって私が浮気しているわけでもなく、私にとって兄というか姉のような存在で大好きで大切な人。いずれタイミングみて、大陽くんに紹介したいなと思っている相手である。でも、その前にまずこの人に伝えないといけない事がある。

私は会社に急いで帰り、お仕事をバリバリこなし、なんとか残業三十分程度で終わらせることができた。私はトイレで、いつもより念入りに化粧を直す。だって、私の知り合いで一番、手を抜いた化粧に厳しいので。逆に大陽くんは、私が化粧してようかスツピンであるうが、どんな服着てようが、全く気にしてないように見える。そこが楽であり、寂しい所。

喫茶店の前を通ると、窓ガラスの向こうから、切れ長の目の瞳でショートボブの綺麗な女性が手を振っている。コレが待ち合わせの相手の鈴木薫さん。私の高校時代の先輩である。

「ゴメンなさい。お待たせしましたよね？」

薫さんの仕事は比較的定時に帰れる事が多いので、平日デートとなると、待たせてしまう事が多い。でも薫さんはそんな私に怒ることもなく、雑誌や本を優雅に読んで待っていてくれる。顔も整っているし、なまじ身長が百七十センチ超あるので、足を組んで佇む姿はモデルのように決まっっていて格好良い。でも『格好良い』というと拗ねるので、『綺麗』という言葉を私はいつも使っている。薫さんは猫のような目を細めニコニコとコチラを見つめる。

「髪型変えたんだ、フワフワして女の子らしくて可愛い！ 凄く似合っている！ 触っていい？」

嬉しそうに私の髪の毛をサワサワ触って楽しんでいる。こんだけ喜んでくれる人がいるなら、この髪型にして良かったと思う。

「また伸ばしてきてくれたのは嬉しいな、もうちょい伸びてきたら毛先だけクルクルっとした感じにするのも良いかも、絶対可愛いよ。私には無理だけど、百合ちゃんなら絶対似合う」

薫さんの困ったところは。私にやたら可愛い格好をさせようとするところ。私には似合わないと思うのに、薫さんに見てもらった。そういう遊びができるのが私だけなのだろう。ブティックでも、乙女チックな可愛いワンピースとかを私に試着させて楽しんでいる。

満足したのか、椅子にゆったりと座りなおし、私の珈琲と新しい飲み物を注文してから私に向き直る。何故か思いつめたような顔で私をジッとみつめてくる。薫さんって長身だし、宝塚女優っぽい綺麗な人なのでこんな風に見つめられるとドキドキしてしまう。

飲み物がテーブルに置かれ、ウェイトレスさんが去ったタイミングで薫さんは小さくため息をついて覚悟を決めたように口を開く。

「百合ちゃん、あのさ、来週温泉旅行に行くよ！ 奢るから！」

唐突の誘いに、私は唖然とする。しかも『行かない？』じゃなくて『行くよ！』って？

「あのさ、温泉に一緒に入ろうと言っているわけではないから、部屋も別に取るし」

「あ、薫さん？ 嫌とかそういう訳ではなくて最近、ちょっと週末予定が立て込んでいて。なので九月以降だったら、家族の許可とってなんとか行けるようになると思うけど」

そんな私を、キツと叱るような目で見てくる。

「それじゃあ、遅い！　どんな予定があるか分からないけど、キャンセルして一緒行こう」

遅い？　何が？　私は訳が分からず、薫さんを見つめ返す。なんか必死な様子でその瞳は私に何かを訴えかけている。薫さんが私に對してここまで必死になるという事は一つしかない。

「もしかして、ひで……いや、星野先輩の結婚式、来週ですか？」

まさか、結婚式の出席をお願いにいつて、逆『卒業』な花婿強奪を唆されるとは思わなかった。私は頭の中で、映画のシーンさながらに、教会に飛び込み元彼である星野秀明と手を取り合って走る自分の姿を想像してしまった。そして薫さんが用意している車に二人で飛び乗り逃亡。

薫さんはビックリ目を見開いて、私を氣遣うようにテーブルの上にあった私の手にそつと手をのせてくる。

「知っていたの？　アイツが結婚すること」

私は、ゆっくり頷く。

「去年の秋にね、電話があつてその時に」

ついつい薫さんには言いづらくて、黙っていた事を白状することにする。前に付き合っていた星野秀明から電話があつた事と、それで恋愛が完全に終わった事を。

私の言葉は想定外だったようで、薫さんの表情に明かに怒氣が帯びる。

「ヒデのヤツ、何考えているんだ！ 百合ちゃんもソレ、何で言ってくれなかったの？ 去年の秋ということは、そのあと逢ってるじゃん僕ら。相談してくれたら、アイツを説得してもっと平和なうちに破談できたのに」

薫さん、今サラリと『破談』って怖い事いいましたね。薫さんは高校時代に私と星野秀明の恋愛をずっと見守ってきてくれた人なのだ。それだけに私達二人への想いも強い。ずっと、私達がまたやり直せると信じていた。だから言えなかった。薫さんは動揺しているのか、『僕』と一人称が昔の言い方になっている。

「薫さんの想いは嬉しい。でも私達はもう大丈夫だから、その時の電話でね、私分かったの、ひでくんの事大好きだけど、それはもう恋愛感情ではないって。昔から私達って考える事同じだったでしょ？ ひでくん……いや星野先輩もそうだったから電話かけてきてくれたんだと思う」

薫さんは、酷く傷ついたままの顔で、私の方をチラリとみる。申し訳ない気持ちになってくる。薫さんの望む未来も五年前考えなかった訳ではない。それはそれで、違った幸せのある人生だったのだろう。選ばなかった未来は考える事は意味のない事だけど、正直頭によぎったりもする。別れた後かなり引きずってしまうほど好きだった人だった。でも今は自分の選択に納得している。今だから言える事かもしれないけれど。結婚ってお互い好きだけでは駄目なんだ。相手への真剣な気持ち、愛情それは勿論必要だけど、それに加え勢いが必要なのだ。内的要因であれ外的要因であれ、馬鹿でも無茶でも二人を動かそうとする力がないと結婚は出来ない。それがあの時の二人になくて、今の太陽さんと私にあったという事だろう。どちらが素敵な男性か、どちらをより愛していたというわけではな

くて、結婚へ向かう勢いの違いだけなのだ。

「……でね、薫さんをお願いしたい事があるんだけど、いいですか？」

怒っているのだろう、何も言葉を返してこない。仕方がなく私は言葉を続ける。

「薫さんは、星野先輩の結婚式出席されるんですよね？」

大きく溜息をついて、薫さんはアヒル口を不満そうに突き出す。

「私からのお祝いしたいので。一緒に渡して頂けると嬉しいです。

……あとね、もう一つお願いが……」

キチンとアイラインの引かれた瞳が私をジトつと見つめている。

「……………伝言なんて、しないよ」

ギロリと睨んでくる。私は首をブルブル横にふる。薫さんに頼んだら、絶対そのまま伝わらない気がする。

「あのね……………」

この話の流れでとても言いにくい！ でもコレはどうしても薫さん伝えたかった事だから。覚悟を決めて続ける事にする。

「私の……………結婚式にも出席してもらいたいの！」

あまりにも想定外の言葉だったようで、薫さんは口を開けてポカ

ンと私を暫く見てくる。

「はあ？」

私は、へうつとした笑いをそんな薫さんに、返す。

卒業（後書き）

ここで出てくる鈴木薫は、私の『みんな欠けている』シリーズの二作品で主役をやっている人物です。そちらの『アダプティッドチャイルドは荒野を目指す』において、星野秀明、月ちゃん、薫さんの三人の高校時代の物語が語られています。もしご興味があればどうぞ。

卒業（The Graduate）

1967年 アメリカ映画

監督：マイク・ニコルズ

原作：チャールズ・ウェッブ

キャスト：ダスティン・ホフマン

キャサリン・ロス

アン・バンクロフト

いつかの君へ

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

『さようなら』より優しい別れの言葉がある。『またね』という三文字だけど、その意味する内容は広い。また、再会する事を前提に使われるこの言葉だが、この言葉を最後に会わなくなった人は意外に多い。

小学校、中学校、高校、大学の卒業式で等様々な人生の節目に私はこの言葉を使い、人と別れて来た。別にその人生のページを過ごした人々が、嫌いになったからとかいうのでなく、新しい環境での生活や人間関係、それらにかかりつきりになっているうちに時間だけが過ぎ、フェードアウトしていったのだ。

私の初恋の相手で恋人だった星野秀明との別れの言葉もこの『またね』だった。東京駅のホームで、まるでチョット里帰りをする相手を送り出すような会話で、私は星野秀明に『さよなら』をした。

この薫さんとも『百合ちゃんが大学合格したらお祝いに三人で飲もうよ、じゃまたね』という言葉で別れた。その後、薫さんは私の前から姿を消した。揶揄でもなく文字通り行方不明になってしまったのだ。半年に一度くらい出したメールに返事をくれたけど、会うことは拒絶され続けた。もう会える事できないのではないかと諦めていた時に、突然『良かったら、デートしない？』という電話がきた。そして今では親友となっている。

婚約者である、大陽くんとはどうだったのだろうか？ 小学校六年の教室で、引っ越しの為転校する彼にどんな言葉をかけたのだろうか？ 記憶にも残ってない事からも分かるけど、さほど親しくも

なかった男子に対して『またね』という言葉を使わなかったと思う。大して別れも悲しむこともなく『元気でね、頑張つて、さようなら』とかいった言葉を言ったと思う。でも関東で再会して結婚するまでの関係になった。

こう考えてみると人間の縁つて本当に不思議だと思う。こっちの想いとか感情とか関係ないところで人との繋がりが決まっているようにも感じる。

簡単に婚約者とのなれそめと、結婚の経緯の説明を聞きながら、薫さんは複雑な顔をしている。そして大きく溜息をつく。

「そっか……。ゴメンネ、おめでとうつて言うべきなのに、言葉は上手く出てこない……」。

私にとってヒデと百合ちゃんって理想のカップルだったんだ。高校の時にはさ、自分がまともな恋愛は出来ないってなんか分かっていただけに、男だったらこういう感じで女の子を愛したいな、女の子だったらこういう風に愛されたいって」

薫さんはずっと、私が片想いしているときから星野秀明との関係を見守ってくれていた。

「ごめんなさい、薫さんには本当に応援してもらったのに」

「コチラこそ、ゴメン二人が大変な時に自分の事でいっぱいになつていて側にいてあげれなかった」

私はその言葉に首を横に振る。

「薫さんには、逆にあの時優しくされてたら、私甘えん坊のダメ人

間になつてたよ」

薫さんが高校時代からズツと苦しんでいたのを、私は気付く事も出来ず、ただ薫さんの優しさに甘えていた。

「なに、それ？」

薫さんが笑った顔をみせてくれるようになった薫さんにホツとする。

でもその笑顔を引つ込め真面目な顔でコチラをジツとみてくる。

「相手、ヒデよりも良い人？ オカシなヤツだったら承知しないよ。まあ、ヒデも最高に良い男というわけではないか」

どちらが素敵な人かというと、難しい質問である。好みのタイプとかいうのでは星野秀明の方なのかもしれない。

「良い人というか、とにかくユニークな人なの。私って、昔から小さいことでウジウジ悩んでしまう所あったじゃないですか？ コンプレックスの固まりで。自分が大嫌いで、そんな自分を必死で隠して。私じゃない人になろうと一生懸命で。でもね、その人と出会って、自分はコレで良いんだ！ って開き直ることができたの。残念な子だけどなかなか可愛いヤツじゃんって、今は思えるんだ。自分でいることが楽しい」

薫さんは、クスリと笑う。

「私から見たら、今も昔も変わらず、面白い可愛い子だけだね。でも、良い女になったと思うよ」

「薫さんには敵いませんが」

薫さんはンっという顔をして、クククと笑う

「まあね、そんだけ悩んだし苦労したからね」

そう言って華やかに笑う。元々綺麗だったけど、確かに凄く綺麗になったと思う。でも薫さんが格好いいのは昔からだ。真っ直ぐな性格とか変わらない。

「でも、薫さん昔も今も変わらず素敵ですよね」

イヤイヤと首をふる。

「なんで、君らって、こんだけ頑張っただけで私に、『昔のままで嬉しい』といった事いうんだろね。時々、どっちとした会話だったのか分からなくなる。

でもさっきの月ちゃんの言葉でなんかなるほどなって思った。私だけでなく、みんな自分受け入れて本当の自分になるために色々悩んで頑張っただけで成長するものなんだって。

今の月ちゃんの顔見て安心した。

結婚おめでとう！喜んで出席するから！相手もスツゴク気になるし」

いつもの優しい笑顔で、出席を承諾してくれた事が嬉しくて、私は両手で薫さんの手を握る。

「ありがとうございます！嬉しい！」

ニコニコと笑っていた薫さんが、ハッとあることに気が付いたよ

うに聞いてくる。

「そついえば、日程聞いてなかった。百合ちゃんの結婚式っていつ？」

「九月の二周目の土曜日です！ スケジュールの調整お願いします！」

私のニコニコとした返事に、薫さんは何故か困った顔をして大きく溜息をつく。

「もしかして、何か予定が？」

薫さんは苦笑しなら、首を横にふる。

「いや、土曜日は開いているから大丈夫、ただね。ったく」

どうしたのだろうか？ この微妙な反応は。

「二人には心配を散々かけたのに、式に招待してもらって文句言える立場ではないのは分かるけど。なんで同じ週にやるかな。どこまで仲良いんだよ。そんななら二人が結婚してくれたら良かった、そしたら一日で済んだし、お祝いも一つで済んだ」

「あの、もしかして アチラも二周目が結婚式でした？」

ちょっとマズイ事教えたかなという顔を、薫さんはする。でも、何か、シヨックというより嬉しい。上手く説明できないけど、恋人とかではなくなってしまうけど、星野秀明とは、何処かでまだ繋がっているという感じに、ホッとする。

「ん、まあ、そう、あつちは家が旅館つて事もあつて、流石に週末には出来ないから、水曜日なんだけどね」

「すみません、なんか私達の為に九月、散財させてしまつて」

私は申し訳なくなつて頭を下げる。薫さんは、イヤイヤと慌てて首をふる。

「たださ、もう一度三人でお酒飲みたかつたかな」

私はその言葉に頷きながら、『今の状況では、ソレは難しいだろうな』と考えていた。

会つたから、愛が再び再燃するとは思えない。でも星野秀明と再び友人に戻るにはまだ時間が足りてない。それだけ密な時間を過ごしてきたから。どのくらいの時間があれば、元恋人が友人とか親友というよい関係となれるのだろうか？

「といつても、三人で飲んだ事はなかつたか、お茶や御飯食べたりは散々したけど」

薫さんが悪戯っぽく笑う。

「そつえば！ まっ、取りあえず今日は二人で飲みに行きますか！」

私も戯けて言葉を返す。視線を窓の外にやった。それぞれの目的に向かつて歩く人々が行き交っている。沢山の人生が窓の外で交差していた。

食事をするために、お店をでて二人で仲良く並んで歩く。薫さんは身長が百七十センチ以上あるから、大陽くん程でもないにしても一緒に歩くと凸凹コンビになる。

「なんかさ、娘が結婚する時って、こういう気分なのかな」

薫さんがふと、そんな事言ってくる。ふと隣をみると、唇をチョット突き出してコチラをみている。そして私をチラリと見てから、おもむろに抱きしめてくる。

「あのさ、結婚しても、こうやってデートしてほしいな。旦那様、それは許してくれるよね？」

私は薫さんの暖かい胸に包まれながら頷く。

「大丈夫！嫉妬したり、細かい事気にしたりする事ない、大物だから」

薫さんは腕の力をゆるめ私から離れてニヤリと笑う。

「ノロケ？」

私は、チョット恥ずかしくなつて笑って誤魔化す。
そして私達は、二人で楽しくデートを続けた。

いつかの君へ（後書き）

いつかの君へ

2007年 日本映画

監督：堀江慶

キャスト：斎藤工

河合龍之介

加藤裕月

坂本真

岡優美子

豪起

徳井優

津田寛治

幸福への招待

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

結婚準備期間、色々悩む事は多い。どういう結婚式にするか、新生活についてとか未来についての悩みになるのだが、一つだけ過去を振り返らざる得ない悩みが発生する。それは招待客の選別。

自分が今まで出会ってきた人間の顔を一人一人振り返り、どの人に結婚を報告し、そして実際に誰に来て貰うべきかコレがなかなか悩ましい。

「どうしたの、難しい顔して、もしかしてマリッジ・ブルー？」

営業車の助手席で、まじめな顔して運転している黒くんについからかいの言葉をかけてしまう。コレは結婚前に彼が私をそうからかってきたのでそのお返しである。

信号で止まった事もあり、黒くんはニヤリと笑いコチラを見る。

「ん？ いや、ブルーではないかな。ピンクというかイエローとか？」

私が答えた言葉を、今度は黒くんが返してくる。二人で思わず笑い合ってしまう。

「そつえばさ、月ちゃんが前、招待客悩んでいたのが何か分かったよ」

なるほど、こないだ式場決めたようなので、ソレを今悩んでいる

所なのねと理解する。

「でしょー！　どこまで来てもらつか線引きが難しいのよね。でも、黒くん達は社内結婚だからその点、悩みは少ないよね」

そう、黒くんと実和ちゃんと同じ課の人同士での結婚なので、ほぼ同じ同僚と上司を持つ。メインともいうべきメンバーが共通ですむ。

私の場合は共通の知り合いは普通あまり呼ぶ事はいはずの小学校時代の先生と友人、他は皆別、なのでかなり悩んだ。

「まあねー、今まで招待してもらった人を、お返しで呼ぶべきなのかとか悩むよね」

確かにそれはあるかもしれない。それで人間関係が壊れるとはいわないけれど、選ぶ方は悩むものである。

「まあ、会社ではまず課の人、上司と直接仕事に関係している人、そして同期という感じで絞るしかないのかな？」

私の場合は、お得なプランが『百五十人以内の披露宴でこの価格！』という感じだったので、なんとしても百五十人に絞らなきゃならないという状況でその選択が大変だった。結局姉の子供、従兄弟の子供は、子供メニュー別だからという事で 大人の頭数で百五十人ピッタリという調整をした。

「でもさ、同期もさ、七年目になると同期の仲間意識というのも流石に薄れてくるよね。だからその辺りもどうしようかと」

流石に同期に二人も元彼女がいると、黒くんは招待もしにくいと

いうのもあるかもしれない。

「まあさ、月ちゃん、松ちゃんは、今でも仲良よくしているからいいけど、他のメンバーって招待状もらっても困るよね」

私はそういう人間心理って不思議で面白いなと黒くんの横顔をしみじみ見てしまう。

私の視線に気が付き、黒くんはチラリと見て苦笑する。

「あのさ、前々から、月ちゃんが誤解している訂正しようかと思っ
ていたんだけど」

「誤解って？」

「俺と松ちゃんって、付き合ったことないから。妙にその事で月ちゃんに気を遣われているのがくすぐったいから言うけど」

え、私はその意外過ぎる言葉にビックリする。それだけ二人は良いコンビで仲良かったから。でも考えてみたら入社当時から別れたと社内で噂された後もずっと同じように良いコンビな二人である。

「そうだったのだ〜チョットビックリ！」

「社内ですという噂で、分からないうちにそういう認識になっていたんだよね。第一彼女、学生時代から今の旦那様一筋だったから、男としてそういう女性って逆に友達として付き合いやすいというのもあつて」

なんか分かる気がした。黒くんと私もそんな関係だから。私が彼のタイプの女性ではなかったらしく、恋愛抜きでつきあえる事で黒

くんとの友情関係は楽しい。

「なるほどね」ならもつと早く教えてくれても、スツと妙な気を遣いしていて、私、馬鹿みたいだよな」

でも、ずっと誤解して、オカシナ目で見ていたことが恥ずかしい。

「いやいや、それが月ちゃんのやさしさだしね」

単なる大ボケを、そう言ってくれる黒くんの方が優しいよね。そんな会話をしているうちに、会社に戻ってきた。私は黒くんにお礼を言いながら車から降りようとして、改めて運転席に黒くんの方を見る。

「話戻るけどさ、結婚式はね、やっぱり義理とかじゃなくて、素直に来て貰いたい人を招待するべきだと思うよ。その方が互いに楽しいイベントになるから」

考えてみると、義理で招待されてもそれはそれで面倒だし、義理で呼ぶほど結婚式の席に余裕があるわけでもない。芸能人な訳でもないからソレで十分だと思う。

「確かにね。シンプルに考えてみるよ」

黒くんは、フワリといい顔で笑った。互いの生活が充実しているという事もあるのだろうか？　なんか最近黒くんと、前に増して良い人間関係を築けているような気がする。女の友情もいいけど、男女の友情というのも良いなと思ってしまった。

幸福への招待（後書き）

幸福への招待（PARIS PALACE HOTEL）

1956年 フランス

監督・脚本：アンリ・ベルヌイユ

キャスト：フランソワーズ・アルヌール

シャルル・ボワイエ

ロベルト・リッソ

春の惑い

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

結婚前に、手元に一番増え收拾がつかなくなるのがカタログだと思う。

まず式場のカタログ、ウェディングドレスのカタログ、指輪のカタログ、賃貸情報、旅行のカタログ、会社の昼休みに私の横で毎日違うカタログを前にしている二人がいる。

実和ちゃんは、そのカタログに埋もれあっぱあっぱになってきているようにも感じる。

けっこうプレッシャーに弱いところもあり、仕事もミスしがちになっっているようだ。

フェミニストである黒くんの「実和ちゃんの好きなようにすればいいよ」という言葉は、こういう場合かえって女性を追い詰めるものである。渚くんも、結婚準備中のスタンスは似たようなものだった。『家電は百合蔵さんが使うものだから、百合蔵さんが使いやすいと思うものを選ぶといいよ』『デザインとかよく分からないから、まかせるよ』といった感じ。大抵のカップルは、ここで喧嘩になる事が多いようだ。

「カタログをみる前にね、まず何が必要なのかとシンプルに考えたほうがいいよ」

「シンプルにですか？」

実和ちゃんは縋るような目で私を見つめてくる。対して黒くんは、楽しそうにニコニコと離しを聞いている。なんかその黒くんの態度に違和感を覚える。もっと自分自身の事なのに、何その見守るとい

ったのんびりした態度。もつと積極的にこういった事を、一緒にや
っていく人だと思ったのに意外である。

「家具・家電は、今二人がもっているものをリストアップするの」

何かと結婚式というのは入り用なのである。何が必要で、何は後
々揃えるのがよいのか現状を把握することから考える。

私の場合と同じで、一人暮らしの男性と、親元の女性の結婚。な
ので女性が持つておいるのは基本的に洋服ダンスとか音楽コンポと
かくらいである。でも男性が持つているものも、家電が二人での生
活に使えるものかも知れない所がある。我が家の場合、渚くんの使っ
ていた冷蔵庫はホテルの部屋にあるものっぽくて、新生活にとても
じゃないけれど使えるものではなかった。洗濯機は実家に持つて帰
って洗ってもらっていたこともあり、そもそも持つていない。家電
に関しては新たに買うしかなかった。

「そして、結婚生活で使えるものなのかどうを判断する。被ったも
のは、どちらを使うのか、二つあっていいものなのか？ どちらも
使えるものなのかを判断して、使えないものはここで切り捨てる。
ということすると、必要な物、いらぬ物が見えてくるよね？」

実和ちゃんは素直に頷き、頭を必死で整理しているようだ。

「生活の基盤でもあるから、二人で確認しあえば間違いもないから。
二人で相談しながらするといいよ」

私は二人という言葉をあえて協調して、黒くんをチラリとみる。
黒くんは、『ん？』という顔を私に返してくる。チョットは通じて
くれたかな？ と私は目に力を入れて、さらに黒くんに念をおした。

午後、黒くんの代わりに、東和薬品へと出向き原稿を受けとることになった。会社を出たところで、黒くんからメールがくる。

「東和さんへ行ってくれてありがとう。コチラも解決しました。良かったら帰りに車で拾っていくけど今どこ？」

こういう気遣いができるのに、なんで実和ちゃんには暢気なのかな？ と私は首を傾げる。とりあえず東和さんを出たところだとメールをして。合流することにした。

「ありがとう、助かった」

黒くんにまずお礼を言って、心地良い室温の営業車の助手席に乗った。

「いやいや、コチラこそ、動いてくれて助かったよ」

紳士的に見える爽やかな笑顔を返す黒くんは、その笑顔をふと真顔に戻し、車を発進させる。

「ところでさ、月ちゃん何か怒ってる？」

やはり、以心伝心というのは難しいものである。怒っていたのだから、強いお願いの想いを込めたただけだけど怒っているところだ。れていたようだ。

「怒っているというよりね、実和ちゃんが少しいっぱいいっぱいに

なっているからそれが気になって」

黒くんは『え?』という感じで、首をかしげる。

「テンションあげて頑張っているみたいだけど、何か月ちゃんに相談をしてきたの?」

そうか、実和ちゃんって黒くんが好きすぎて、彼の前ではけっこいつも緊張状態が解けないところあるから、かえって実和ちゃんが見え辛くなっているのか。そんな状態で結婚生活って逆に大丈夫なのかな? と私は別の心配をしてしまった。私は首をふる、そうやって私に愚痴ってばかりいると思われるのも、実和ちゃんが可哀想だから。

「いや、何もいつてないけれど、一生懸命になりすぎて余裕がなくなっているように見えるの」

「そうなのか」

「あのさ、結婚って、二人でするものだからさ、もう少し黒くんも一緒に色々考えたほうがいいよ」

黒くんは、『大丈夫、大丈夫』と笑う。

「姉貴にも言われたんだけど、結婚は女性が主役で楽しいイベントなんだから、男が余計な口挟むなって、だから実和の好きなようにさせてあげようと思って」

「でもさ、意見を受け入れるというのと、放任するのって違うと想うよ。『好きなのでいいよ』『何でもいいよ』って言葉、本気で相

談した側からしてみると寂しい言葉だよ」

丁度信号にかかったこともあり、黒くんは私の顔をしばらく見つめてくる。

「もしかして、月ちゃんの経験からも言ってる言葉？」

「まあ、んゝ多少は思ったかな。でもテンション上げてたこともあって、寂しいとまでは思わなかったけど、女性からすると、『何で？』と思うことはあるよ。そういうの」

黒くんは、顔をしかめ運転に戻る。なんだ自分の時の不満をぶつけているだけ、と思われたのだろうか。

「渚さんは、どうだったの？ 結婚前」

黒くんは、結婚準備段階の渚くんの行動を何故か気にしてくる。全然タイプが違うから参考にはならないと思うのだが。

「結構一緒に色々考えてくれたほうなのかな？ 初期の段階でどつかれた事もあるのかもしれないけど」

一瞬黒くんの言動に気をとられていたこともあり、余計な事までをぼろりといってしまった。そういう言葉を聞き逃さないのが黒くんという男。

「え！ 月ちゃんがどついたの？」

「いやいやいや、私じゃない！ 友達が」

私は必死で否定する。そんなDV夫婦に思われたくないし、私は
そんな事していない。

春の惑い（後書き）

春の惑い（小城之春）

2002年 中国 116分

監督：テイエン・チュアンチュアン

キャスト：フリー・ジンファン

シン・バイチン

ウー・ジュン

ルウ・スー

イエ・シャオカン

それでも恋するバルセロナ

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

私と大陽くんは、悩みながらもなんとか期限内に出席者の絞り込むことができた。お互い三人兄弟で、親も兄弟が多く家族親戚だけで半分以上をつかってしまい。その残りをそれぞれの職場の人、友人と割り当てなければならなくて、結構それが大変だった。出席すると名乗りあげてくれた方と、予め出席を依頼した方と、もうメンバーは固まった上で、結婚式の招待状を出すというのは、なんか無駄にも感じるかもしれない。しかしあの真っ白で大きい封筒に入ったカードを送るところから、ある意味初めて、本格的な結婚式の準備がスタートするような気がする。

「確かにリストを承りました。宛名の方はコチラを参考に用意させていただきます」

ウェディングプランナーの田中氏に出席者リスト、ニッコリとホテルマンらしい恭しい態度でリストを受け取った。

私も大陽くんも毛筆どころか、普通のペン字にも自信がない。かといってプリンターでの文字も味気ないのでプロの方をお願いすることにした。

「お願いします」

「席次表と名札の方が、大陽様が手作りされるのですよね？」

何度もこのように確認する。くどいようだけどこういう打ち合わせにおいては重要な事なのだ。一応見積もり等で書面に行っているも

の、言った言わないという問題が結構出やすい。

しかも、私達はまだ短期間だけど、人によっては式場を抑えてから一年ほどの長い付き合いになる事から、繰り返しすることで互いの意思を疎通させておく必要があるのだろう。

「はい！」

私は笑顔でキツチリ応え、コチラの意味を示した。

まだまだ式まで日数もあることで、ホテルとの打ち合わせというのは実はまだそんなにない。二ヶ月ほど前から、詰めていくことになる。お茶を飲みながら簡単な雑談を、三人で楽しむ事になった。後になって思えば、この頃が結婚準備期間の中で一番穏やかで平和な時代なのかもしれない。

「今から色々、忙しくなりますよね。新婚旅行先とか、もうお決まりですか？」

田中さんの言葉に二人で顔を見合わせる。

「何処行くか悩んでいるんですね。私はスペインがいいかなと思っっているのですが」

そして太陽くんは、ラスベガス・ハリウッド方面に行きたいようだ。

「まあ、ご夫婦になればコレからもういくらでも行けるので、先ずはロマンチックな所とかもいいかもしれませんね」

ロマンチックといったら、情熱のスペインと魅惑のラスベガス・夢のハリウッド……若干スペインの方が勝ち？ どう？ と 太陽

君に視線で聞いてみる。「ん〜」といった顔で見返してくる。

「あと、会社はハネムーン休暇だと長期で唯一堂々と休暇を取れるものなので、この際ノンビリ楽しみたい場所か、行くのがチョット大変な遠い場所とかいった場所を選ぶのもいいとか言いますね」

「なるほど、確かにそれは言えていますね。逆にグアムとかサイパンとかいつでも行けそうだしね」

大陽くんも納得したように頷く。

「ハネムーン特割も、この機会に使うのもいいですよ！ あつ。国やツアーによって、入籍してないとダメな事もあるので、そのあたり注意したほうが良いですよ」

流石、ウェディングプランナー、式の事だけでなく結婚関連の事まで色々なノウハウをもっているようで、私は思わず尊敬の眼差しで田中さんを見つめてしまった。

思わず感動でお礼を言って褒めまくってしまつと、田中さんは酷く照れたように笑い首を横にふる。

「といつても、私は結婚まだなので、ハネムーンについては憧れな気持ちで言っているだけなのですがね。この職業は結婚に関してだけは耳年増になって、これだけいろいろ楽しそうな結婚式とか見守り続けていると自分の結婚式の時、感動できるのか不安になってきます」

「でも、田中さんのノウハウあれば、それこそ結婚式最高のモノに出来そうですね！」

「だいいいですね」

田中さんは嬉しそうに笑った。

楽しい打ち合わせも終わり、ホテルを後にした私達、話の流れでそのまま旅行代理店へと向かう。

なるほど、ハネムーン割引というのは結構色々あるようだ。とりあえず場所は限定せずに、ヨーロッパ、アメリカ、南米、カナダ等のハネムーン関係のツアーのパンフレットを集め喫茶店に入る。

旅行のパンフレットって、なんで見ているだけでこんなに面白いのだろうか？

大陽さんと、はしゃぎながら、『コチラもいいね』とかいいながら絵本を楽しむかのようにパンフレットを見る。

「ところで、百合蔵さんはなんでスペインに行きたいの？」

大陽くんは、スペインのパンフレットを見ながら聞いてくる。

「バルセロナに行きたいのよね。あの国の風景・空気を味わってみたいというか。まあ美術館の作品は日本にくることあるけど、ガウディの建築とか行かないとみられないでしょ？ 大学時代の友達もね、ガウディの建築を観に行って人生一八〇度変わったと言っていたのよ！ あとね、姉もスペインに新婚旅行行ったのだけど、モンセラート修道院が感動ものなんだって！ あとそこで食べたチーズがまた、最高に美味しくて人生が三百六十度程変わったと言っていたかな」

チーズの下りでは、大陽くんはブツと笑う。どのくらい人生が変

化したかは、当社比レベルで分かり辛いものはあるものの、スペインは様々な人の人生に影響を与える国なようだ。

「さっきの話からもさ、新婚旅行はスペインにしない？ せっかく12日も長期で休めるなら、スペインのほうがいいと思って。」

憧れのスペインに行けるのは凄く嬉しい。

「いいの？」

「ラスベガスとかハリウッドって結構もう少し短くて安く楽しめるツアーってあるからまた今度いけばいいかなと。それに、スペインって料理すっげー美味そうじゃない？」

大陽君は、そういつてパンフレットの色鮮やかな料理を嬉しそうに指さす。

「だね、美味しいものいっぱい食べよ！」

二人でニツカリと笑いあう。

なんか色んな事が、溜まらなく楽しそうに思えてきた。二人でこれから結婚式だけでなく、思い出を積み上げていけるんだ。その事が溜まらなく嬉しい。

縁 enishi

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

今日も会社帰りに、夏美ちゃんと『隠れ家』という喫茶店にいる。ゴツゴツした洞窟っぽい内装で、文字通り隠れ家っぽい雰囲気だ。二人でムフフと楽しむ空間にピッタリなのだ。コソコソとムフフな会話を楽しまなくても、堂々と楽しい話を外でもいいと思うのだが、こうしてコソコソすると楽しさが倍増するという事もある。

白いエンボスの浮き彫りのついた大きめの封筒。以前私は、喜びながら複雑な想いでうけとったモノ。コレは、他の人には堂々と笑顔で、手渡しているのだが、何故か夏美ちゃんへは、ソツと手渡すというシチュエーションにして、その感じを楽しんでいる。「確かに、受け取りました」

夏美ちゃんは畏まった大袈裟な所作で封筒を受け取り、ニッコリと笑う。そして幸せそうに溜息をつく。

「結婚かゝいいよねゝ、なんか月ちゃんの結婚準備を見ていると待ちきれなくなっちゃった」

「何をおっしゃる、夏美ちゃんも、今楽しんでいるのではないのゝ」

夏美ちゃんは、「んゝ」と首を傾げる。

「そうなんだけどねゝ逆に今私は、結納とか面倒な部分で、やや憂鬱ゾーンだからねゝ」

そう、夏美ちゃんもまだ会社でも公表はされていないけど来年結婚する。結婚って意外と感染するものなのだ。

というのは、夏美ちゃんカップルと、私と大陽さんの四人が、一緒によく出かけることもあり四人で仲良い。

夏美ちゃんの彼のＡＶマニアな所と、大陽君のマニアな部分に意外に通じるものがあつたようで、彼氏同士が意外と馬が合うことも大きく友人公認の恋人であり、恋人公認の友人ということで色んな意味で四人の関係を良いものにしていた。恋人が出来たら疎遠になる女の友情なんて事は私達にはあてはならなかった。

その近さが、結婚ドミノ現象をひき起こす。私達の結婚の話を聞いて、夏美ちゃん達の間でもそういう話題がされるようになり、盛り上がり結婚する流れになったようだ。こういう幸せ感染は素敵だと思う。

「そうそう、見てみて、ブーケ」

「でも可愛い〜！ 百合ちゃんのブーケには、やっぱり百合は入れてほしいわよね」

「でも、まあ、まずはドレスを決めてからだよね。バランスもあるから」

招待状授与イベントを終えたあとは、二人でブーケについて盛り上がる。

後にして思えば、私が相談しても『いいんじゃない？ それで』という事ばかり言う、大陽さんに不満を感じずにいたのは、一つは夏美ちゃんのお陰なのかもしれない。

ここで楽しく盛り上がって相談できる人がいたから、私達は楽しく過ごせた。

私もそんな状態だから太陽くんも、ソレでいいのかと思っていたのだろう。

お嬢様っぽい楚々とした美人の夏美ちゃんと、元気キャラだと思われている私。本当に真逆なタイプなので、二人でよく旅行に行ったりとつるんでいるのを不思議がられることが多い。実際考え方、恋愛感、人生観といったものもまったく違う。夏美ちゃんは非常にクールでシビアな思考の持ち主なのである。敵を作らず曖昧なグレ―なゾーンを泳ぐように生きてきた私とは異なり、彼女は白か黒とキツチリ世界を塗り分けて生きてきている。

そんな二人だけど、同じ時期に恋愛を共に悩み、そして同じようなタイミングで新しい恋をスタートして、似たような時期に結婚を決意する。この不思議よシンクロしたこの縁に何という名前をつけるべきか私には分からない。でも『友情』という簡単な言葉だけで済ませられるものではない特別なモノを感じる。

また彼女に対してだけでなく、結婚することになって私は縁というものを様々な場面で感じるようになった。それは夫婦となる太陽くんに対してというより他の人へのもの。今自分の周りにいる人達だけでなく、離れてしまった人たちとも、私はまだまだ繋がりがあえているんだと感じる。

結婚前で頭が脳天気で馬鹿になっているだけとも言われそうだけど、今は世界の全てが素敵に思えて以前よりもずっと愛おしいモノに思えた。

その事を夏美ちゃんに話すと、彼女は顔をしかめる。

「人との繋がりがって、そんな無節操に広げてても仕方が無いよ！私は最低限必要な分だけでいい。私は多くの繋がりはいらぬし、隼雄^{ひんげう}さんにはそんな他人との縁もつといらぬい！」

笑顔での言葉だけど、眼が笑っていない。

「そうかな、でもそういう繋がりでもって、成長できたというのもあるよね」

「でも、所詮過去の事。今と未来に生きないと！ 特に不必要な異性の縁は切るべきだよ。人って簡単に馬鹿で愚かな行動してしまうものだから」

でしょ？ と、コチラをジッと見つめてくる夏美ちゃん。クールで、人との付き合いもサッパリしていると思えた夏美ちゃんだけど、実は凄い情が深い。そして嫉妬深い。彼氏である宮崎さんが同僚を送るという理由でも車の助手席に女性を乗せた事も怒るし、旅行のお土産を会社の女性からうけとったというのも良しとしない所がある。

黒くんに対してもそう、私と黒くんがいつものように話をしても、『黒沢くんも、婚約者のいる女性に慣れ慣れしくそんな感じにいるって、どうかと思うよ』と注意する。

『黒くんとは、夏美ちゃんが懸念するような関係になるような事ありえないよ』

私がそう言っても、夏美ちゃんは溜息をつき首を横に振る。『百合ちゃんに信頼してるよ！ でもあの人無節操だから！』と返ってきた言葉に私は苦笑するしかない。

「こないだね、TVでお坊さんが『結ばれるのも縁、離れるのも縁、どちらも同じように縁で貴方と結ばれているんです』って言葉を言っていたのよね」

夏美ちゃんは、ブーケのパンフレットパラパラめくっていた手を止めてコチラを見る。

「別にそれらの縁すべてを、不自然に色つけようとは思ってないの。でもそれぞれを大事に思ってもいいのかなと、最近思うんだ。自分の居場所が出来たというのも大きいのかもしれないけど、親とのチョット拗れてしまった関係も、何が変わってしまったわけでもないけど、コレはコレで私達らしくていいのかな？ 受け入れられてきた感じなの」

夏美ちゃんは、何かを考えるような静かな目でジッと私を見つめる。

「私は、今更親との縁なんて愛おしいなんて思わないけど、月ちゃんはそのれでいいと思う。縁を感じそれを楽しむのはいいかもね！ だったら、私との縁、今まで以上に愛しく大事に思ってね」

ニッコリ笑う夏美ちゃんに、私は『勿論！』と力強く答える。『なら、いいよ』夏美ちゃんは彼女らしい上品で綺麗な笑みを浮かべた。

縁 e n i s h i (後書き)

2011年 日本 83分

監督・脚本：松村清秀

キャスト：谷山紀章

浪川大輔

宮地真緒

夢人

最強 彼女

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

マレッジブルーって、みんなのタイミングでなるものなんだろうか？

少なくとも、今の段階では私はまったく陥る様子はない。新しい生活に不安よりも期待の方が大きい。それに今の段階では、目が回るほど忙しいなんてこともなかった。

私はいつもの喫茶店で、白い封筒を薫さんにそつと差し出す。薫さんは、それを神妙な表情で受け取り、そして溜息をつく。

「で、結婚準備はトラブルなしで進んでる？ 相手の変態な趣味が分かってきたとか、浮気相手が出てきたとか事ないよね？」

私は『トラブルなしで進んでいるの？』のという言葉を発した段階に笑顔で頷いたものの、その後の言葉に思わず引き攣る。トラブルってそつち方面ですか……。冗談で言っているのではなく見えるのは気のせいだと思いたい。彼氏と別れたという後に、『ほんとド変態で最低野郎だったから』とかサリ凄じ事言ってくることもあるけれど、その辺りについて突っ込んで聞けない怖いところが薫さんにはある。

「それは、ない！ 大丈夫！」

薫さんは『ふーん』と小さく言いながら珈琲を飲む。

「私が言うのも何だけど、男って結構色々ややこしい生物だから、

気をつけなよ」

結婚を報告してから、薫さんのメールは、心配する内容のものが増えた。私の家族、友人の中で一番私の事を案じてくれているようだ。

「ややこしいといったら、私の方がややこしいからね」

そうややこしいのは、男性だけでない、人間そのものがややこしいものなのだ。私もそうだし、薫さんもそうだ。私の知っている人間の中で、デジタルの世界で生きている大陽くんが一番ややこしくないように私も思う。というか感情も言動も直球で分かり易い。また、その理由も非常に明確で分かり易い。そこが私には心地よい。大陽くんからしてみたら、私ってかなり理解不明な所も多いのではないかと思うけれど、『それが百合蔵さんだから』といって笑って受け入れてくれる。

「結婚準備ってどういう、スケジュールで進んでいるの？」

私はゼクシィのおまけにあった、結婚用スケジュール帳を広げる。薫さんはそれを興味津々といった様子でのぞき込む。

「来月から具体的結婚式の打ち合わせになるので、まだ暇な今月のうちに、衣装あわせとか、家具・家電選びとかしておこうかなと思っっているの」

爛々と薫さんの目が輝く。

「衣装！ ってウェディングドレスだよな？」

「はい、その通りですが……」

薫さんは両手を合わせて、可愛くおねだりポーズをする。クールビューティーな彼女だけれど、こういうポーズすると意外と可愛い。やはり性格の可愛さがあるからなのかもしれない。

「一緒連れてって！ 可愛いドレス選ぶのを手伝うよ！」

確かに薫さんはセンス良いので、ファッションに興味ない大陽くんよりもその点は頼りになるのは確か……。しかし……。

「でも……招待している薫さんには、晴れ舞台で初めて見てもらって感動してもらいたいような」

舞台裏のバタバタは見せないで、華麗な姿だけを招待した人に見て貰いたいという女心がある。薫さんは、笑顔で首をふる。

「大丈夫！ 当日は当日でバッチリ感動して見せるから！ それに私はウェディングドレス多分着られないから、行ってみたいの。そういう普通の結婚準備の楽しさを味わいたい」

『そんな事ないよ、薫さんならすぐ結婚できるから』そう言いたいけれど、そういう彼女自身ではない私が無責任な言葉をかけられない。そんな言葉、彼女も望んでいない。

彼女がどれほど苦しんできたのかは、察することは出来るけれど、それは察しているだけに過ぎない。私に出来ることは彼女の人生を見つめ応援することだけである。

「私の結婚準備、どちらかというとコメディータッチでガツカリしないかな」

「それは、それで楽しいから。それに勿論衣装合わせ、大陽とかもくるんだよね？ ソイツも見てみたいし」

薫さんはニツコリ笑いながら、iphoneのスケジュールを立ち上げ、予定を書き入れている。まあ近いうちに紹介もしたかったので、良い機会かなと思った。

「ブライズメイドとかいるようだったら、喜んでやるよ」

海外のウェディング映画では、必ず出てくるブライズメイドとグroomsマン（アッシャーともいう）。かなり欧米化したウェディングだけど、この文化は日本ではまったく根付いていない。悪魔が幸絶頂の花婿花嫁を妬んでチョツカイ出しに来て、誰が花嫁か花婿が分からなくするために目くらましをするために複数人花嫁と花婿と同じ格好をした人を側に置くというのが起源らしい。しかしそれくらいで混乱する悪魔も大したことないと思うものの、この風習はなかなか面白そうだ。映画においても、ドレス選びは婚約者というより、友人とキャピキュピ選んでいる事が多いように感じる。

「たしかに、あの文化って楽しそうだね。親友と一緒にもりあがって結婚式を作って行く感じが」

「だよね。ブライズメイドはないにしても、何でも出来ること手伝うから！ 力仕事もいけるし。」

やはり今どきの日本の結婚式って二人だけで色々決めていくものなの？」

薫さんは、ブライダルスケジュール帳のオマケページについた、結婚準備の心得やノウハウを書いたページに興味深げに目を通して

いる。

「まあ、今の所そつなのかな。人によっては、親がお金も出すついでに口も出すって事あるみたいだけど、私らは自分のお金でやるし、ウチは両親ももう娘の結婚式二度目なので飽きたのかあまり興味なさげだし、向こうの両親も『好きにやったらええがな』って状態」

ほうほう、と薫さんは頷き、真剣にスケジュール帳を見入っている。

「衣装選びだけでなく、家電選びも付き合うよ！ 私スペックとかカタログを読める女だし、値切るのも得意！」

ウェディングスケジュールから目を離しニヤリと笑う。

ある意味、最強のブライダルメイドになれる方なのかもしれない。

そして夏美ちゃんに続き、心強い相談相手がもう一人出来たことを私は喜んでいた。

最強 彼女（後書き）

ここに出てくる鈴木薫は、私の『みんな欠けている』シリーズのメインで主役をやっている人物です。何故美人で性格も良い彼女が結婚というものに消極的なのかは、あえてココで語っていません。もしご興味があれば『欠けている』という物語をご覧ください、

最強 彼女（武林女大生）

2008年 韓国映画

監督：クァク・ジェヨン

脚本：クァク・ジェヨン

イ・シンホ

キャスト：シン・ミナ

オン・ジュワン

ユゴン

イム・イエジン

ロード・オブ・ザ・リング（前書き）

ロード・オブ・ザ・リング

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

普通婚約指輪は男性が選んだ物を、通常プロポーズの時か、結納のときに贈るのが一般的らしい。半ば勢いで結婚する事になり結納もしなかった私達は、それぞれの両親への挨拶を終えた段階で、ようやくその存在を思い出す。

「指輪なんだけどね、実は、石だけはあるんだ」

大陽くんは頭を掻きながら恥ずかしそうにそんな事を言う。

聞いてみると、一カラットのダイヤモンドの石を婚約指輪用に所持しているという。コチラは大陽くんが用意したものではなく、彼の亡き祖母が、孫達に結婚する時の為にとそれぞれに用意していたものらしい。孫は九人もいるのに男性女性関係なく用意した、祖母が愛する孫の幸せを願って用意した愛情のこもった石である。そしてその祖母は一昨年に他界して今となっては形見ともいえる品。

「そ、そんな大事な石を使ってもいいの？」

「ココで使わずいつ使うの?! 結婚するんだし百合蔵さんのモノといったら、俺のモノであるのも同じでしょ?」

一見ジャイアンな台詞だけど、意味している事は逆で、彼の大事なものを共に持つ事ができるという事に私は感動する。

そして、映画ブログ仲間であり、飲み友達でもあったジュエリーデザイナーのマツコさんに、指輪の作成をお願いすることにした。

一応デザインの勉強をしてきて、しかも一年の時に金工の授業もとっていた私は、マツコさんに頼む前、二人で色々意見出し合いながら、ノートに色々な指輪のデザインを作っていたりもした。

「百合蔵さんの名前から、百合の花をイメージしたのもいいんじゃない？」

私は百合の花と葉に包み込まれるようにダイヤがついたデザインを描いてみせる。

「それ、いいじゃん」

「でも、コレだと私だけになるから、太陽と月をデザインに入れて二人の苗字が融合というのもよくない？」

ダイヤモンドを中心に右に三日月に左半分が太陽といったデザインを思いつきノートにそれを示す。

「コレは面白いけど、少しファンシーかな」

という感じで、二人で十数種類のデザイン案を出し、その中で五つのデザインを持ってマツコさんとの打ち合わせに向かう。

私達としては、二人で一緒にデザインを考えたい指輪を作る事ができるということでもいい感じに盛り上がっていた。それにそのデザインも結構自信もあつた事で意気揚々とマツコさんに合つて、デザインをドヤ顔で披露した。

しかし帰って来たのは、マツコさんの大きな溜息と苦笑だった。

「二人とも、マリッジリングとエンゲージリングを単なるペアリングと混同してない？」

アイラインが引かれた瞳でキッとコチラを見つめるマツコさんをポカンと見返してしまった。

「単なるアクセサリーではないの！ 契約の証なの！ 一生互いを想い合うという」

テーブルをポンと叩いて語り出す彼女のパワーに推され、二人は黙って頷く。

「相手と一生共にいるという覚悟を示すものなの！ 分かる？ それだけ特別なもののなの」

マツコさんは私達のデザインに視線をチラリとみる。

「このデザイン、遊び心あって面白いけれど、エンゲージリングはこういう遊びを入れてつくっていいものではないの。百合子さんが五十代になっても、六十代になってもこの指輪を大切に使用して使えるデザインであるべきなの」

たしかに私達のデザインしたものは、使えて三十代くらいまでの、若いものだったかもしれない。

「なるほどね」

大陽くんも、マツコさんの言葉に納得したように頷く。

「よくさ、エンゲージリングというと、表面的にはつくろって、後ろみると割ってあってプラチナをケチっているものとかあるけど、私はああいったもの許せないのよね。そんなごまかしをエンゲージ

リングにしてくるなんてって感じで！」

彼女の熱い、エンゲージリングとマリッジリングへというものに対しての講義は楽しかった。その彼女の熱い言葉に、私はマツコさんに指輪の制作をお願いして良かったと素直に想えた。

「私の考えるエンゲージリングとマリッジリングはね、プラチナのシッカリした厚みと重さを感じるもので、手に自然に馴染みつつ常にその指輪を心の隅でも意識できるものがいいと思っているの。なんなら手に水を受けたときに指輪の所から水がこぼれるくらいゴツくてもよいくらい！」

私は三日月のようにシンプルなカーブを描いた真ん中に、お祖母様の一カラットのダイヤを中央に埋め込みでつけたデザインのものをお願いした。マリッジリングにも小さなダイヤを三つ付けてもらいエンゲージリングとセットで使うと一カラットのダイヤを囲むように配されるようになりより華やかさを増す。

大陽くんは契約書を交わし、ダイヤモンドを渡し、そして私達の指輪のマツコさんに委ねられることになった。

待つこと一月、その間、「職人と会って、原型のチェックしてきました」とか、「途中チェックにいったのですが、形状に不満があったので治してもらっています」など細かくメール報告がくる。少しずつ、指輪が作られていくのを楽しめるというのも、オーダーならではの楽しさなのかもしれない。

大陽くんの所に指輪が完成したという連絡が入る。金曜日に三人で新宿の喫茶店で待ち合わせて受け渡しをすることにした。

二人で約束の喫茶店で待っていると、マツコさんが颯爽とはいって来る。そして彼女が私達の前に差し出した指輪は、想像していた

以上に素晴らしいものだった。

プラチナという金属がもつ独自の重厚感に、緩やかな優美な曲線をもった指輪は何も言えず美しかった。

シンプルな分、ダイヤモンドが引き立っていて神々しい輝きを放っていた。そして二本のマリッジリングと三つ並べてみると、同じ曲線で形成されており、三つで一つの作品であることがよく分かる。

「つけて見ますか？」

感動で声を失っている私に、マツコさんはニコリと笑う。そうして大陽くんにエンゲージリングの指輪ケースをそっと渡す。大陽くんがその指輪をケースから取り出す。

「あ、結構重量あるんだね、指輪って」

大陽くんはそう感想を言いながら私の左手の薬指に嵌めてくれた。その指輪は見た目だけでなく思った以上に重さがあった。でも柔らかいフォルムのせいか、付けている実感はあるものの異物感はない。私は指輪を嵌めた手を挙げて、大陽くんに付けてみた感じを見てもらう。指に感じるプラチナとダイヤモンドの存在感に私は、大陽くんと結婚するだという事を改めて実感することができた。この重さが、大陽くんの、そして大陽君のお祖母様の想いなのだ。

「ありがとうございます。最高の指輪です」

大陽くんも、私の手をもって満足げに指輪を見つめている。

「本当に良かったね、いい指輪が出来た。マツコさんをお願いして本当に良かった」

私達の満足しきった顔にマツコさんも嬉しそうに見つめている。デザイナーとしてお客様に喜んでもらえるのが最高の幸せなのだろう。自信をもって仕事をしている女性の良い顔をしていた。

「じゃあ、ケースに戻します？」

私は少し考えて、首を横にふる。

「このまま付けていたいです」

マツコさんは私の返事にフフッと笑う。そしてケースだけを紙袋にいれて私に渡してくれた。

そして二本のマリッジリングの入ったケースを別の紙袋に入れて、大陽さんに手渡した。

こういう指輪で私の真横でお金の支払いをされるのってどうかとも思ったけれど、この場合は仕方が無いことなのかもしれない。私はあえて見ないふりをした。

喫茶店を出て、二人で手を繋ぎながら高層ビル群の下を歩く。大陽さんの指が、私の指と指輪を撫でている。

「指輪、ありがとう。私の最高の宝物はこの日からこの指輪だよ」

上から大陽さんのフツという笑う気配がする。

「百合ちゃんが、それだけ喜んでくれたなら、贈った甲斐もあるよ」

いつもの『百合蔵さん』ではなく、『百合ちゃん』という呼び方に私は思わず立ち止まり顔を見上げてしまう。大陽くんは、付き合うようになってから私を時々このように呼んでくれる。彼なりに本音で語りたいときとか、いわゆる恋人同士な時間の時そう呼んでくる。

大陽くんは、ニコニコと優しい笑みをうかべ私を見下ろしている。なんだろうか、『百合ちゃん』と呼ばれたことが嬉しい反面、凄く照れ臭くなってくる。数秒の間、薄暗い歩道の真ん中に二人で立ち止まって見つめ合ってしまう。薄暗いとはいっても、大陽君の表情が見えないほどではない。でもこの薄暗さと、左手に輝く指輪が私を素直にした。

「本当にありがとう。言葉にならないほど嬉しい。……なんかさ、この指輪をつけてやっと、私渚くんと結婚するのだ、渚くんと一生共にするんだと思えたんだ。そのことが凄く嬉しくて堪らない」

大陽くんは大きい目をさらに見開きそして何故か目をチラっと反らす。手で口元を隠し視線を私に戻した。大陽君、照れているようだ。

「俺も、嬉しいよ……スゴク」

私は大陽くんの大きな身体に抱きつく。その大きさと暖かさを身体に感じ、すぐく落ち着いた気分になる。上から大陽くんの腕抱えこむように私を抱きしめてくる。身長差が有りすぎて、いつも抱き合うというより私が抱きつきそれに大陽くんが手を添えるという感じになってしまう。

仕事返りのサラリーマンが帰路につくなか、何をやっているのだろうかとも思うけど、暫く私達はそこで抱き合っていた。

「あ、あのさ、ゆりちゃん」

私が上を向くと、照れ臭そうな太陽くんの顔があった。

「なに？」

「あのさ、今日はまだ、時間あるよね？ あのさ…… ホテル行かない？ すごく、したい」

同じ気分だったので頷く。そしてギュっと太陽くんのお腹を抱きしめる。私もすごく太陽くんが欲しい。

そして二人で手をつなぎ、ホテルのある方向へと歩き出す。

ロード・オブ・ザ・リング（後書き）

ロード・オブ・ザ・リング

The Lord of the Rings: The Fellowship of the Ring

2001年 アメリカ映画

監督：ピーター・ジャクソン

原作：J・R・R・トールキン

キャスト：イライジャ・ウッド

イアン・マッケラン

リブ・タイラー

ビゴ・モテンセン

ショーン・アステイン

ケイト・ブランシェット

オーランド・ブルーム

幸せになるための27のドレス

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

黒くんと実和ちゃんの結婚式も、いよいよ具体的な式の打ち合わせ段階にはいったようだ。

昼休みに、ゼクシィでドレスのページを見る眼も、以前と夢見るような優しさが薄れ真剣なものになっている。黒くんも、男性なのに、意外な事に楽しそうにその写真を見ている。

「こういうのも素敵だよね」

「友ちゃんだったら、着こなせそう！」

「こういう光沢とハリのあるものも素敵よね」

逆に私と夏美ちゃんと友ちゃんの既婚三人組は、脳天気ドレスの写真を見て楽しんでた。寧ろコレから結婚する二人よりも盛り上がっている。黒くんは流石に、奥様三人のパワーに押されているというのもあるのかもしれないけど。

「あの、皆さんはどういう感じでドレス選ばれたのですか」

実和ちゃんは、首を傾け、そんな三人におずおずと聞いてきた。

「なんとなく、フィーリング」

簡潔に答える友ちゃんに、夏美ちゃんも『そんな感じかしらね』と頷く。二人とも意外とイメージしっかり持って真っ直ぐのタイプ

だから悩んでいないんだ！ と感心してしまった。

「なんかね、ドレスってまず自分の長所を引き立てるタイプがどれかをまず考えるといいらしいよ」

二人の返事に、惑いを増していた実和ちゃんにフォローするように私は言葉をかける。受け売りの言葉だけど。

「長所ですか？」

「可愛らしさを引き立てるなら、柔らかいデザインの方がいいし、逆にクールな人はシンプルなラインの方が似合うし」

実和ちゃんは、眉をますます寄せ『ウーン』と悩む。

「西河さんは、柔らかいタイプのほうが似合うのかもしれないね」

友ちゃんは、フワツとしたドレスの写真を指さす。でもスタイルが良い外人さんが着ている写真だと、イマイチ自分でのイメージが湧かないのか、実和ちゃんはジッと雑誌を見つめ悩んでいる。そんな時に、私の頭にある事が閃く。

「あのね、ドレス、コレのポイントだけを抑えていたら、後悔すくないかも！」

夏美ちゃんが私の顔を見て、目で「アレね！」と言ってきたので私は頷く。

「コレ夏美ちゃんと導き出した定義なの！ 結婚式の時、招待客から花嫁がどう見えるかを考えてみたの！ するとね、教会の時は後

る姿しか見られない。となるとバックスタイルが綺麗なドレスのほう
が断然見栄えがいいの」

「なるほどね」

黒くんが納得したように頷く。

「また、披露宴会場の事を考えると、椅子にずっと座っている状態
が長いので、トップがシンプル過ぎるドレスだと、写真なんか見て
いてもチョット寂しくなるから、バストアップにもポイントがある
ものを選ぶと間違いないと！」

ドレスは選ぶ時、スカート部分の華やかさに目が行きがち。でも、
教会での印象はバックスタイルの方が残りやすいし、披露宴会場で
は写真に残るのは、バストショットの方が多い物である。

「月ちゃんさ、ソレ私の時に先に教えてくれれば！」

友ちゃんが、チョット恨みがましい目で見つめてくるので、私は
笑って誤魔化した。友ちゃんは実和ちゃんと違って、悩む事も相談
されることもなかったの言いそびれた。

でも、どちらかというとクールな雰囲気のドレスを選んだ友ちゃん
は、それが抜群に決まっていた記憶がある。

「あれ？友ちゃんのドレス、凄く素敵だったよね？ 友ちゃんらし
いというか。あと色ドレスの帽子も格好よかった」

友ちゃんは、ウーンと唸る。

「でも、今の話聞いちゃうと、確かにそこは意識してなくてしまっ

たな〜と思うのよね」

散々悩んでコレがベストと考えてやったとしても、後で後悔するポイントが出てくるのが結婚式の困ったところである。だからこそ、それを後生の人に伝えていくのも大事な事なのだろう。

「あとさ、折角だから。白ドレスとカラードレスは全くタイプの違うものを選びたいよね〜」

ブツブツと言い出した友ちゃんの気を紛らすために、私は話題を変えることにした。

「私の場合、白はエンバイアラインで、カラードレスはプリンセスラインにしたの。夏美ちゃんはスレンダーライン？かAラインとプリンセスだったよね、友ちゃんはレンダーラインとマーメイドだったよね」

「私はAラインだったような。スレンダーだとなんかガリガリに見えるから」

夏美ちゃんが補足してくれた。

「エンバイアラインってどんなのですか？ 月さんのドレス、Aラインだと思っていました」

確かに、エンバイアラインはサイトやお店によっては、そういった分類で紹介されていない場合がある。よく妊婦さんが選ぶタイプのウェディングドレスなのだが、私のように背の低い人とかにもよくスタイルをチョットよくみせることができる。

「基本Aラインなんだけどハイウエストのデザインなの」

ハイウエストな事で重心が上に来ることで、足が長く見えることと、私のような胸なし、ガリガリな体型もカバー出来るという優れたもの。

「月ちゃんのドレスがエバイアラインだったのね。そのライン、デブ隠しデザインだと思っていただけ、細い子が着たら綺麗なラインになるのね」

友ちゃんがサラリと、身もふたもない事をいう。ポツチャリとした実和ちゃんが、『デブ』という言葉に反応して顔を引き攣らせる。その様子にハツとした顔をする友ちゃんが、珍しく慌てたように言葉を続ける。

「西河さんは、どうかしら？ エバイアラインはウエストがなくも見えるから、かえってスタイル悪く見えるかもしれないわよね。無難にAラインとかにしたほうがいいのかも」

「プリンセスラインで、西河さんのまろやかさ協調するのも可愛いかも」

フオローになっているのか、なっていないのか分からない事を夏美ちゃんは言った。

幸せになるための27のドレス（後書き）

幸せになるための27のドレス（27 Dresses）

2007年 アメリカ 111分

監督：アン・フレッツチャー

脚本：アライン・ブロッシュ・マッケンナ

キャスト：キャサリン・ハイグル

ジェームズ・マースデン

エドワード・バーンズ

マリン・アッカーマン

母の微笑

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

教会式の結婚式を挙げる際に、必ず通るバージンロード。ホテル内にあるセツトみたいな教会に神様が本当にいるのかも怪しいものの、日本においてカトリック式の挙式をする殆どのカップルが、こんな教会で式を挙げる。

バージンロードという言葉は和製英語ならしく、海外ではウェディングアイルライナーと呼ばれている。往路はそれまでの人生を表していて、家族と歩いてきた道を父親と歩き、復路は伴侶となるべく相手と手を取り合い未来へと歩き出すといった意味がし結婚というものがなんたるかを示しているらしい。

とはいえ、この名前を最初につけた人はなんて恥ずかしい名前をつけたのだろうと思う。今のこの時代、この日本でどれほどの人がその名に相応しい清らかな身体で通るというのだろうか？ 私は真面目に生きてきて遊んでいたわけではないけれど、流石にバージンではないし、相手は夫となる大陽くんだけというわけでもない。それだけにバージンロードという言葉は別の意味で恥ずかしいものを感じてしまうのは私だけなのだろうか？

母とは付き合っている人の事の話とか、恋愛の話とかしたことが一切ないのでよく分からないけれど、多分私がそれなりの経験をしている事は分かっていると思う。しかし父は、恐ろしい事に私がまだバージンだと信じ切っているくらいがある。父には、それだけ娘は見えてないし、自分が見たいようにしか世界を見ていない。また私もそういう面しか見せてこなかった。仮面夫婦というのがあったけれど、仮面親子ともいうべき関係で過ごしてきた。私が父に自

分をさらけ出してこなかったただけかもしれないけれど。父は自分を家族にさらけ出し自由気ままに生きてきているから。

結婚することが決まって、私達親子の会話は、殆ど結婚準備の進行報告となる。今日も指輪をもらった事の報告と、結婚準備の進行状況についての報告をしていた。

「ということは、もう俺達の仕事は、もう当日式に出席するだけだよな？」

ニコニコと指輪やホテルのパンフレットを見ている母とは異なり、父はつまらなそうに話を聞き、自分が関わる部分だけを確認している。

「はい。でも当日は色々ご面倒おかけすることになります。親族顔合わせの際の新親族紹介とか教会での付き添いとかもありますので」

我ながら、なんと他人行儀な父への言葉だと思っけれど、イマイチ世間一般のような打ち解けた会話というものが出来ない。

今日の父は何故か不機嫌で、ムツとしているだけに、よけいに話しかけにくい。

「その、教会つて俺一緒に歩かないとダメなのか？ もし歩かなくてといなら、そこパスさせてくれ！」

父はそんな事を言うてきた。母は眉をしかめたが何も言わなかった。

そして話が終わったとばかりに、私室に引きこもってしまった。そんな様子を見て母は小さく溜息をつく。

「お父さんね、寂しいのよ。百合ちゃんが可愛いから結婚してしま
うのが辛いよね。最近子供みたい拗ねてしまつて仕方がない人よね」
母はフォローするように言うが、それはチョット違うと想う。寂
しいのは本当だと思う。ただ自分のモノが取られるようで嫌なのだ
ろう。

私は母に曖昧な笑みを返す。

「そうそう、互助会の資料渡さないかね」

母はそう言つて、棚から書類を取り出す。母が子供の為にずっと
積み立ててくれていたものだ。

「コレで、ドレス二着と、太陽くんのタキシードも借りられる契約
になっているから」

私はその契約書とパンフレットを見ながら頷く。

「ホテルの方でも、ここの互助会の名前を言つて話はすぐに通じた
ので問題はないみたい」

「そう、良かった。そうそうドレス。貴方は大丈夫だと思うけれど、
短いとか露出の多いのは止めなさいよ」

母は嬉しそうに、ゼクシイをめくりドレスを見つめる。その瞳は
少女のようにキラキラと輝いている。父親からみる娘の結婚と、母
親からみる娘の結婚というのと、感じ方はまったく違うようだ。結
婚準備がどう進んでいるかを気にして、積極的に話しかけてくる。
私が結婚することになり、逆に親子である会話の話題が増えて嬉し
そうである。

そして私の頭を撫でる。

「あと、髪の毛はもう切っちゃダメよ。少なくとも結婚式までは」

私が末っ子という事もあるのだろうか？ 母はずっと小さい子のように私に接し扱う。私もそんな母に素直に甘える事を出来たらいのだが、私はどうも冷めた態度しか返せない。

「コレ以上短くなったら結えないからね」

母は『そうそう』となんども頷く。そして暫く黙り、私の顔をジツとみつめてくる。

「何か、困っていることとかない？ お金は大丈夫？ 大陽さんと仲良くやっているの？」

「うん、何も問題ないし。大陽くんとも結婚準備を楽しんでいるから！ 心配するようなこともないよ」

母に私はいつものようにニツコリと母へ笑いかける。嘘を言っている訳ではないものの、母は私をみて寂しそうに笑った。

「そう、良かった。でも何かあったら何でも相談するのよ」

私はその言葉にニツコリと頷く。いつからだろうか？ 母と話しているといつも申し訳ない気持ちになる。理由は分かっているけれど、そういう親子関係を続けていたからどうしようもなくなってしまう。

私は母との会話を終わらせ、私室に戻り溜息をつく。

結婚してこの家を出ることは嬉しくてたまらない。でもその前に、ちゃんと向き合わないとダメだと焦る自分もいる。

親子であっても一度オカシクなってしまうと、何もなかった状態に戻すことは難しい。我が家の場合、見た目は普通に平和な家庭に見えているだけに、戻すといってもどう戻せばいいのかも分からない。

母の微笑（後書き）

母の微笑（L'ora di religione）

2002年 イタリア

監督：マルコ・ベロッキオ

キャスト：セルジオ・カステリット

駅 STATION

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

思った程の雨が振らなかった六月も終わり、よく分らないままに夏が来た。七月の一週目の日曜日、私は初めて降りる事になる、躑躅が丘の駅の改札口を出て辺りを見渡した。改札口の正面に立ち食いそば屋と、チェーンのコヒーショップがあり、左右それぞれが南口北口となっている、ごくごく平凡な小さな駅だった。予め調べておいた地図では南口にバスロータリーがあるらしい。何故、今日この駅で降りたかと言うと、互助会の事務局が此方にあるからだ。改札を出る前に、外の風景を確認する。まだ待ち合わせ時間まで二十分以上あるので、誰も来ていないようだ。

トイレに行き、シートで汗とテカリを抑える。そして鏡でどこかオカシクなっている所がないか最終確認をして出たら、ホームの階段を大きい人物が降りてくるのが見えた。太陽くんだ。サイズが大きいだけに、遠くからでもその存在を認識することができる所が本当に便利である。

昨日帰るコールも帰るメールもこなかったという事は、徹夜だったのだろうか？　なんか髪の毛もボサボサだしなんか疲れているように見えた。

「大丈夫？　もしかして徹夜だった？」

私に気が付き近づいてきた太陽くんは、挨拶よりもそんな言葉をかけてしまう。

「お待たせ、いや、五時には家について、そのあと少し眠ったから大丈夫」

明るく笑うけれど、いつもより元気がなく見える。一緒に改札をでて、キオスクで大陽くんが好きそうな炭酸飲料を買い渡す。

「ありがとう、アレ？ 友達はまだ？」

嬉しそうにペットボトルを受け取る大陽くんは、周りを見渡す。私も周りを見渡し頷く。

「今日くる友達ね、高校時代の先輩だった人で、スゴク素敵な人なんだ」私にとっては姉同然の人で」

やはり会う前に、薫さんの事情情報を入れて置いた方が良かったかなと思ひ、説明をすることにした。

「先輩って部活の？ 百合蔵さんも飲む？」

嬉しそうにペットボトルを開け美味しそうに飲んでから、それを差し出してくる。私はそれを受け取り、一口飲んでその冷たさを楽しみまた返す。

「いや、高校の先輩。部活の先輩の友達だった人で」

大陽くんは嫉妬深いタイプではないにしても、元彼の存在をあえて言わないでいたほうがいいかなと思ひ、表現をぼかしておいた。

「その先輩はこないの？」

不思議そうに聞いてくる大陽くんは、言葉に困る。

「今先輩は東北の方に住んでいるので。それにその先輩も今結婚準備中で」

大陽くんは納得したように頷く。別に隠すことでも疚しいことでもないのに、元彼の話はしにくい。そういえば、元彼である星野先輩が薫さんの事『人の好き嫌いが激しく、意外と人見知りをする』といった事を言っていたのを思い出す。

大陽くんと薫さん、二人とも大人なので逢わせても大丈夫だよな？ ふと不安になってくる。

そんな事を考えていると、紺色に地に大胆に白い大きいリボンの模様のついたＴシャツに白タイトスカートという出で立ちの薫さんが改札の向こうから颯爽と歩いてくるのが見えた。私に気が付き、真っ直ぐ早足でコチラにやってくる。

「ごめん、各駅への乗り換えに失敗して、遅くなっちゃった」

近づいてきた薫さんは綺麗な笑顔でニッコリ笑う。芸能人並にバツチリとメイクが今日も決まっている。いつもよりもさらに背が高いと思ったら、珍しくかなり高いヒールを履いている。身長を私と別の意味で気にしているのに、何故かな？ と私は首を傾げる。

「いやいや、今日はお付き合い頂きありがとうございます」

「いやいや、私が無理矢理来たようなものだし。ところでその格好イイね！ 可愛いー！ 月ちゃんそういう、お嬢様っぽいワンピースって珍しくない？」

そう、今日私はチョットおすまшинаスタイルにしてきた。白くてクラシカルデザインのワンピースを着ている。結婚前後は色々可愛く、かつ畏まった格好をしなければならぬ場合も多いだろうと買

った一枚だ。

「やはり今日は、そういうドレス着る気分盛り上げようと思って」

薫さんは、満足げにウンウンと頷いている。それに、ワンピースの方が一発で脱げるので試着しやすくて良かったりする。

「いつも、そういう感じの洋服着ればいいのに、ところで……婚約者はまだ来てないんだ」

周りをキョロキョロ見渡す。薫さんの言葉に、私は思わず絶句する。

え？　ずっと私の後ろにいた、バカデカイ存在、見えていませんでした？

「あ、初めまして、大陽渚です。百合ちゃんがいつもお世話になっています」

ずっと挨拶のタイミングを伺っていた大陽くんは苦笑しながら、薫さんに頭を下げる。

「え、コレが!？」

薫さんは、心底ビックリしたように大陽くんを見上げた。

『コレ』って……薫さん……。

薫さんも、言ってしまったと思ったようで、慌てて笑顔を作る。

「どうも、鈴木薫と申します。映画オタクのSEとお聞きしていたので、てっきりヒョロっとした小柄の人かと。まさかこんな体格の良い方だとは思わずにビックリしてしまって」

確かに、なれそめとか性格とかは説明していたけれど、体格は言
ってなかったことを思い出す。

「たしかに、SEといういつも驚かれるのですよ」

ニコニコ笑う大陽くんの言葉に私も笑ってしまう。大陽くんがよ
く人から言われる言葉、『その体型でSE？　なんかパソコンに向
かっている印象がないですね』『バスケットかされていました？』で
も、実際そうであるし、その身長を生かした何かをしたこともなく、
彼は無駄にデカイだけである。

薫さんは何故か、チョット面白くなさそうに、大陽くんを上から下
まで見てから、私の方をチラッと見てくる。

「ですね〜ヒール履いた私がこんなに見上げる男性右つてあまりい
ませんか。――で、どこ？　その事務所！　早速ドレス選びに行
こう！」

猫かぶった笑顔を大陽くんにむけてから、私の肩に手を回して促
す。その時チツと小さい舌打ちが聞こえた。

「あ、うん、南口の方」

薫さんは、大陽くんが気に入らなかったのだろうか？

「威圧感与えるために慣れないヒール履いてきたのに、意味なかつ
た」

ボソっとつぶやく薫さんの声が聞こえた。

「薫さん……」

「いやさ、邪魔する気はないけれど、百合ちゃんを泣かせるような事しそうな奴だったら、脅しかけといたほうがいいかなと思ってね」

私に聞こえてきたことに気が付いたのかへらつとごまかし笑いをする。そしてこそつと私に囁く。それでいつも以上の目力を感じるメイクにこのヒールだったのね。

大陽くんにも聞こえているようで、後ろで苦笑している。薫さんも態と聞こえるように言っているんだろう。もし私を泣かせたらぶん殴ると、暗に言っているのだ。

「百合ちゃん、地図かして。方向音痴な君に任せるのも危険だから」

大陽くんは薫さんに嫌悪感を感じるなんて事はなかったようで吹き出す。そして薫さんのジツという視線に気が付き顔を引き締め、私に話しかけてくる。私はバックからパンフレットを出して渡す。

そして、私達三人は、若干打ち解けた感じ？ で互助会の事務所に向かうことになった。

駅 STATION (後書き)

駅 STATION

1981年 日本

監督：降旗康男

脚本：倉本聰

キャスト：高倉健

いしだあゆみ

根津甚八

白いドレスの女

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

惚れた弱みといいのだろうか？ それとも正装した恋人を今までみた事がなかったからだろうか？

タキシード姿の大陽くんは、いつも5倍は格好よくなっていた。頭はボサボサのままであつたとしても。

身長があるだけでなく、体型が欧米タイプな事もあつて手足が長いのでこういうスーツ姿がなかなか決まっている。

「すごく、いいよ！ 格好いい！」

私は上機嫌でその姿を何枚もデジカメに、納めながら声をかける。薫さんは小さく「ふーん」とだけ声を出したけれど、格好いいとも素敵ともコメントはしなかった。そしてはしゃいでいる私を、チラッと冷たい目で見つめてくる。

その隣で、紺のスーツを着た担当の女性がホツとした顔をする。

「入って良かったです。太陽様のサイズだと、関東の支部でこの四着しかなくて」

そう、彼の衣装選びは、その四択しかなかったのだ。しかも一着はウエストにやや難があり入らずに脱落、三着の内から一着を選ぶしかないというシンプルなものとなった。ほとんど間違い探しゲームのように、デザインに変化のない三着から、フロックコートタイプを選択する。それが一番肩幅ウエストがシックリするという理由で一つが決定し男性の衣装選びはあつと言う間に終わった。シャツを選び、タイは私のドレスが決まってから選ぶことにした。

「規格外だと、大変なんだね〜！ 貸衣装も」

薫さんのつぶやきに、係の方は慌てたように首をふる。

「男性はそうですが、女性の方は大丈夫ですから、数多くドレスを取りそろえていますから。お姉様は大丈夫ですよ！ 女性のドレスは種類もサイズも豊富ですので！ むしろその身長あるとドレスが映えて素敵になりますから」

アドバイザーは薫さんを大陽君の姉だと勘違いしている。百九十センチの兄と、百七十センチチョットある妹と、大柄な一族のだと勝手に解釈しているようだ。

この時のアドバイザーの言葉はこの時イマイチ、ピンときていなかったけれど、何故ドレスの方が多くの体型に対応しているのかが良く分かることになる。

逆に若干標準より小さめの私だけど、確かに衣装の種類は豊富にあった。逆にその量に私は呆然とする。しかもドレスって人間が着て初めてその魅力を発揮するモノ。ハンガーに大量に下がっているとかーテンとなんら違いがない。しかもどのドレスも白い為、目を凝らして布の光沢の違い、レースのあしらいの違いを見て判断するしかない。

男性でドレスに興味のなく、かつ疲れもあり大陽くんは、早々にドレスコーナーを離れソファへと行ってしまった。その様子を見て、薫さんはちつと舌打ちをするけど、『こういう場合、男性は役に立たないし、』と宥める。でも、一つ一つドレスを見ていくうちに女二人のテンションは上がっていく。

「ドレス選びのポイントは、まずラインをどうするかということに

なります。そして気に入ったタイプを見つけたら、同じ系統のバリエーションの違いで試していくとスムーズにいけますよ」

アドバイザーの言葉に「なるほど」と頷く。

「マーメイドとスレンダーはまず私の体型じゃ無理だね」

「となると、プリンセスラインとかいいじゃない！　可愛いし！」

可愛いというか、少女趣味な洋服をいつも私に着せたがる薫さんは、やはりそのラインを勧めてくる。

「いやいや、私がこのタイプを着るとますます子供っぽくなってしまっ！」

首をブルブル横にふる私に、アドバイザーがニコニコと見守るように笑う。

「いや、寧ろそのラインは月見里様のような体型の方こそ似合うラインなのですよ！　ドレスはその人の魅力を引き立てる物を選ぶべきものなのですから」

短所を誤魔化す事ばかり考えていた私は、その言い方に目から鱗が落ちた気がした。でも私の魅力ってそもそも何なのだろうか？

それがイマイチ自分では分からないので、とりあえず三つのラインのドレスを着て様子を見ることにした。

生まれて初めてドレスというものを着てみたのだがコレがなかなか大変。まず床にドーナツ状に置かれたドレスの真ん中に足を踏み入れる。そうするとアドバイザーがヨイショといった感じでドレス

を持ち上げ装着といった感じで着せつけていく。絶対一人では着られないこの不便さに、昔の人は大変だったのねと関心する。映画コ・シャネルで女性の社会進出を阻んでいたのは、このコルセットがないと着られない洋服にあると言っていたのも分かる気がした。

それだけ苦労して着こんだドレスだけあって、自分で言うのも何だけど、なかなか悪くはなかった。鏡に映る私が、ヘラッとした締まりのない笑みを浮かべた。

さつき、私が大陽くんに感動したように、大陽くんもウエディングドレス姿の私に感激してくれるのだろうか？ 私は試着室のカーテンをそつと開け、今か今かと待っているであろう婚約者と友人の姿を探した。

ソファアでカタログをめくっていたらしい薫さんはすぐに立ち上がり、目を輝かせて此方に向かってくる。しかし大陽くんはソファに座ったまま、ポカンと此方を見上げている。アドバイザーに促されてやっと立ち上がりゆつくりと近づいてくる。

「やはり、ウエディングドレスって、女性を最高に素敵にするね、可愛いよ！」

期待した反応をしてくれる薫さんにちよつとホッとしながら、なれないドレスを引きずりながら大陽くんの元に行く。

「なんか？ 変？」

慌てたように首をふる。

「いや、いいよ！ すごく、綺麗だよ」

言った後に、大陽くんは、アツいう口をして顔をそらす。
生まれて初めて言われた「綺麗」というほめ言葉に私は固まる。
しかもそれを言ってくれたのが、他でもない大陽くんだから。自分の顔が熱くなるのを感じる。

「惚れ直した？」

照れ隠しにそんな事言ってしまうので、私のムードのないところなのかもしれない。ここは恥じらって可愛い事をいうべきなのだと思うけれどソレが出来ない。

「はいはい、惚れ直した、惚れ直した」

大陽くんは、いつもよりかは若干やさしい笑みを浮かべデジカメを構える。友達から始まっただけに、馬鹿な話だけをしていて、あまり甘い感じにならない私たちには珍しいこういうすぐったい感じ。なんかドキドキする。

隣で、薫さんは面白くなさそうにため息をつく。

「あつ、ちょっとお待ちください。此方を履かれてください」

アドバイザーが、私の前に謎の物体を置く。

一応ヒールなのだろうけど、靴底が普通じゃない。花魁道中に使われているようなあんな感じの、ヒールだけでなくすべての部分が分厚い、つまりすごい上げ底。

「此方で十五センチになります。本当は、もう少し高い方がいいのですが、コレが最長です。」

ドレスがかなり広い体型をカバーしている理由がココでわかった。つまり上半身があれば、ドレスの長さはヒールで調整すればいいのだ。

ブツと大陽さんと薫さんが吹き出す。

足下が見えないために、大陽さんと担当員に助けられて、そのヒールを履く。いつもよりも高い視界は気持ちよかったけれど、大陽さんと薫さんのニヤニヤ笑いがチョッピリ悲しい。

「成長したね」

そんな、憎たらしい事まで言ってくる。

さっきの甘かった雰囲気も台無しである。私はため息を大きくつく。

白いドレスの女（後書き）

白いドレスの女（BODY HEAT）

1981年 アメリカ

監督・脚本：ローレンス・カスタン

キャスト：ウィリアム・ハート

キャスリーン・ターナー

ミッキー・ローク

夕映えの道

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

三種類のドレスを着てみて、一番スタイルが良く見えるハイウエストであるエンバイラインの方向で決めることにした。薫さんはプリンセスラインの方が良かったようだけど、姉の結婚式の時、教会でロングレーンのドレスを着て厳粛な感じで歩いていく雰囲気への憧れがあつたからだ。プリンセスラインのドレスは華やかさが増す分、肅とした雰囲気やや低くなるように私には思えた。

結局、流れるようなシンプルなデザインであるものの、レースを贅沢に使用した壮美な感じのドレスにすることにした。前面とタツプリドレープととっていることで見た目にリズムがあり、しかも腰の所に花をあしらってあり、そこから流れるロングレーンがとても綺麗なのだ。またレースふんだんに使ったオフショルダーの柔らかなトップのデザインもまた可愛らしいので、披露宴で座って上半身しか見えなくなっても、寂しいと感じないデザインが良かった。薫さんも、清楚な感じでいて華やかなドレスを気に入ってくれたようで、満足気に頷いていた。太陽くんは、同じスタイルのドレスの違いが正直よく分からなくなってきたようで、目が虚ろになつてきているのは気のせいだろうか？

「ん〜かな〜」「いいんじゃないかな〜」と言って言葉しか出なくなってきた。

引き続き色ドレスを選ぶことにする。結婚前は忙しいだけに、ドレス選びに二日もかけてられない。ハッキリした言葉でアドバイスをくれる薫さんに来てもらって本当に良かったと私は今更のように

思う。こういう時に男性の太陽くんはあまり役に立たない。仕事の疲れもあるのだろうソファで休んでいる。

「月ちゃんは、やはり優しい色のほうがいいのかな」

色ドレスは、形だけでなく色と雰囲気とバリエーションが広がりさらに悩みも増える。

そう言いながら、薫さんはいっぱいハンガーに垂れ下がった色ドレスを、ヨイショと力をいれて隙間をつくり、デザインをチェックしていく。

淡いほうがいいのだろうか？ そのほうが私の無難でいいのかな
〜と思っていると

「こういう時だから、華やかな物を選ぶのもいいですよ」

担当員がニッコリとそんなアドバイスをしてきて、私をさらに迷わせる。

「月見里様はクールな顔立ちをされているので結構お似合いかと」

クールというより、サッパリしているだけなのですが……。

薫さんは、その言葉を聞きウーンとなにやら考え込んでいるようだ。そしてニヤリと笑う。

「じゃあ〜コレあたりからいこうか」

そういつて、真っ赤なドレスを引っ張り出してくる。しかもプリンセスラインで、ヒラヒラしていて、とにかく華やか！

「え……それ！」

躊躇したけど、薫さんの目は『着ろ！』と訴えかける。まあ、着てみるだけだと、私は再び更衣室へと引っ込むことにする。

でも、意外や意外、着てみると悪くないような気がするのは私の気のせいだろうか？　そういえば、大学の色学の授業で、赤色って実は派手だけど一番どの民族の肌色でも綺麗に引き立てるという話をしていたのを思い出す。確かに色が濃いけれど赤い反射で肌が白く健康的にも見える。意気揚々と更衣室のカーテンをあけ私は飛び出す。だんだん長いドレスの裾にも慣れてきた。

「あ！　けっこういいじゃん！　その色」

薫さんも、半分冗談で決めた所があるようで、意外な相性に驚くものの、その結果に満足そうに笑う。アドバイザーもニコニコ見ている。でもコチラの方は常にこの顔なので、イマイチ参考にならない所もあったりする。

で、もう一人の反応はと、視線を巡らすと、大陽くんはソファーに座って眠りこけていた。

薫さんは、その様子に露骨に顔をしかめ、そのままズカズカと近づき、思いつきり頭を殴った。しっかりグーで……。

大陽くんは、びっくりしたように飛び起き、キョロキョロとあたりを伺い、自分を怒りの形相で見下ろしている薫さんを呆然と見上げる。

「あんたさ、なんでそんな無関心なの！　自分のお嫁さんになる人の、ドレス選びだよ！　あんたが選ばなくてどうするの！」

流石に殴ったことでアドバイザーさんは慌てて、まあまあと諫めるけれど、薫さんはそのまま仁王立ち状態。私も慌ててドレスを引

きずりながら近寄り、薫さんをなだめる。

「渚くんは、徹夜明けなの、だから今日は許してあげて」

「でもさ、愛する女性の晴れ姿、普通テンションもあがるし、目も覚めるでしょうに」

薫さんは、ブツブツと文句言う。

「二人が楽しそうだから、任せていいのかなと。不快にさせたなら悪かった。百合ちゃんもゴメンね」

一応謝りの言葉を言う太陽くんは、薫さんはまだ不満そうだった。薫さんはヘソを曲げるとややこしい。

どうしようかなと思っていると、後ろでシャツとカーテンが開く音がして、『まあ、お似合いです』『素敵だよ！ そのドレス』といった会話が聞こえてくる。先程から隣で同じようにドレス選びをしているカップルが盛り上がっているようだ。

私の中から入ってきた二人だけど、そちらは二人でなんか盛り上がってドレスを選んでいるのが気配では伝わってきていた。しかし私は自分の事でいっぱいになっていて、その二人の姿は見ていなかった。

何故か、やや寝ぼけてどんよりしていた太陽くんの目がクワツと見開き、その私の背後へと向けられる。こういう時に私よりも他の女性のドレス姿に反応されるのは、流石の私も面白くない。

私がそつと後ろを向くと、そこには大柄でかなりふくよかな女性が私以上にフリッフリの赤いドレスを着て、試着室にミッシリはまっているという感じで立っていた。その女性が動くとそのドレスが

ヒラヒラと揺れ、インパクト強すぎる場面を作り出す。

「金魚……」

私の横でボソッと薫さんの声がした。

「赤だるま……」

後から、大様くんのつぶやきが聞こえた。

（二人とも、凄く失礼な事を言っていますよ）

幸いな事に、そのつぶやきは近くのアドバイザーさんくらいにしか聞こえてなかったようで、一人彼女は困った笑みを浮かべていた。その真紅ドレスの女性の存在感が、険悪なムードを吹き飛ばしてくれたようだ。

「赤も悪くないけど、隣の女性ほど、月ちゃん着こなせてないかもね」

薫さんはニヤリと私に笑いかける。確かに、隣の女性はドレスの赤のパワーに全然人間自身が負けてなくさらに彼女をパワーアップさせている。

大陽くんも、同じように人の悪い笑みをこちらに向けてくる。

殴られてから、大陽くんも積極的にドレス選びに参加してくれたことで、色ドレス選びはより盛り上がった。

私は Aラインのドレスと思っていたのだが、薫さんと大陽くんが妙な気の合い方をして、それだと白ドレスと形状が近くて、見た目の変化ないから面白くなると言うことで却下になった。

瑠璃紺のフレンチスリーブでプリンセスラインのドレスを選びことにした。胸のところにドレス同じ布で作った薔薇の飾りがあしらっていてとしてはかなり可愛いデザインだけど、光沢のある布と色がクールなためブリブリにならない所が、私も気に入った部分である。

私が試着している間に、大陽さんと薫さんの間に何か会話がなされたようで、衣装選びが終わった頃には二人は意外にも仲良く打ち解けていた。

「まあまあ 悪いヤツじゃないね？ とりあえず月ちゃんと私とのデートは許可してもらえたから、コレからも堂々と浮気できるね」

互助会からの帰り薫さんは私に抱きつきながら、そんな事を上機嫌でかけてきた。

大陽くんに、どんな話をしたのか聞いてみたけど、『別にふつうの会話だけど』と首をかしげて、そんな言葉を返してくる。でも、家族と同じくらい親友に婚約者を認めてもらうというのは嬉しいものだ。

「どうしたの？ 月ちゃんニヤニヤして」

薫さんが私を不思議そうに見つめ。話しかけてくる。

「ん？ なんか高校時代に戻った感じで。こうやってじゃれあって夕方の住宅街道を歩くのって」

薫さんは、ニツコリ笑う。

「だったら、ソレっぽくこのまま、三人でファミレスとかしけこむ？」

懐かしい、テスト前とか、よく三人でファミレスにいつて勉強を教えてもらったものだ。

「いいですね、なら今日お世話になった事ですし、おこりますよ」

クスクス笑いながら太陽くんが薫さんに話しかける。

「失敗した、ならもう少し高い店を言えばよかった」

「じゃ、今日は、気持ちは十代で楽しもうか！」

私は二人に振り返って、たしか駅前にあつたファミレスを誘導することにする。

後ろに長く伸びた三つの影がみえた。黒く塗りつぶされたそれは高校時代のモノとはかなり形をかえているものの、その雰囲気はかつてのあの時のように無邪気で楽しげに見えた。

夕映えの道（後書き）

夕映えの道（RUE DU RETRAIT）

2001年 フランス 90分

監督・脚本：ルネ・フェレ

原作：ドリス・レスリング

キャスト：ルネ・フェレ

ドミニク・マルカス

マリオン・エルド

監督・ばんざい！

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

結婚式のイベントというと、プロジェクターで二人の生い立ちや紹介するというのも最近では定番になっている。

大抵の結婚式場に常備してあるし、主役のいないお色直し中の場つなぎとかにも使えるし、人によっては二人の再登場を盛り上げるアイテムとしても利用でき便利なのだ。

「え！ あれって月ちゃん手作りなの？」

黒くんの言葉に私は苦笑するしかない。だって逆にあんな内容のモノを人に注文して作るほうが恥ずかしい。私達夫婦の父親同士の出会いから結婚までの簡単なエピソードをコメディータッチで紙芝居風に纏めただけのもの。

私達はただいま外勤中。違う企業に向かっていているのだが、方向が同じなのでついでに車で送ってもらっている。

「よくあんな凄いの、作ったね」

大学時代にWEBデザインの授業で簡単フラッシュアニメ作成を習った事もあり、そういった事は得意だったりする。

学生時代に学割で買った古いFLASHソフトで作ったのだ。

「でもさ、今時、パワーポイントとかフリーソフトでも見栄えの良いもの簡単に作れるよ。黒くんトークとか文章とか面白いから、上手く言葉と組み合わせただけでもかなり素敵な物できると思う」

業者に頼むと決められたパターンに写真を入れていくだけなので、無難なものしかできない。

それに、我が家の場合写真のバランスがあまりにも悪いから、二人のエピソードだけを纏めるものになった苦肉の策なのだ。

別にのろけていた訳でもない。

「二人で写真をとかの素材を集めて、あとプロット作って組み立てるって、楽しいよ。」

チョットした監督気分を味わえるというか」

映画好きだけに、黒くんの頭の中にアイデアが浮かんできているようだ。なんか嬉しそうにニヤニヤしだしている。文学少女と映画マニアのカップルならきつと面白いものが出来そうで、私も楽しみになってくる。

「なるほどね〜予告編っぽいのかにしても楽しそうだ」

そんな話をしているうちに、私のお客様の企業の近く車は走っていく。私は、快適な車から暑い世間へと降り立つときがきたようだ。

「私の方も、フリーで使えるようなソフト探しておくよ。ありがとう
今日助かった。」

あウィツシュリストの作成もお願いね！ わがまま言うチャンスだから」

黒くんは笑う。

「分かった、今週中に二人で考えて作るよ。帰り、どのくらい？
一時間くらいならまた拾うよ！」

流石にそこまで甘えられない。私は『大丈夫だから』と首をふりドアを閉めて車を見送った。

大変と言いながら、結婚準備を楽しんでいる二人の様子はいいものだ。私も一年前のバタバタを思い出しなんともしみじみしてしまう。

しかし、そんなしみじみしている場合ではない！ モードを仕事に戻さねば！

空を見上げると、吸い込まれそうなほど真っ青な空が広がっていた。私は深呼吸して封筒を抱え歩き出す。

監督・ばんざい！ （後書き）

監督・ばんざい！

2007年 日本 104分

監督・脚本：北野武

キャスト： ビートたけし

江守徹

岸本加世子

鈴木杏

吉行和子

内田有紀

木村佳乃

ねじれた家族

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

残業もあり、その日に帰り着いたのは夜の九時半頃だった。家に入ってみると、母は電話中だった。母の楽しげ笑顔と会話の感じから姉と話しているのだろう。

私は母にジェスチャーで着替えてくるからと伝えて、三階にある自分の部屋へと上がる。荷物をおき、ラフな格好に着替えて降りても、母娘の会話はまだ盛り上がっているようだ。

姉は昔から喜びも悲しみも隠すことはしないで、感情を開けっぴろげで両親に接してきている。それで母と打ち解けた関係を気付きたい意味で甘えて支えて、父と本気でぶつかって喧嘩してきていた。今日も何か嬉しい事が悔しい事があった事で、母に電話をしてきているのだろう。でもこんな時間にかけてきたということは、母にすぐにも愚痴りたい事があったに違いない。

「あ、百合ちゃん 玲子から電話だけとお話する?」

母は私に声をかける。私は頷き受話器を受けとる。

「百合ちゃん、結婚式準備すすんでる? 今からスゴイ楽しみにしているの」

母に散々愚痴って、スツキリしたらしい姉の上機嫌な声がする。

「うん、ドレスも無事選んだし、そろそろ打ち合わせも始まって、結婚前のバタバタを楽しんでいるの」

「そうなんだ、ドレスは何色？」

「それは秘密！ 当日のお楽しみということで」

姉と会話している間、母がコンロに火をつけ晩ご飯の準備を始める。

私はふと、ある事を思い出す。

「そうそう、お姉ちゃん、あのさ、悠くん結婚式に貸して頂きたいのですが」

悠くんとは、私のカワイイ甥っ子で、姉の三歳になる悠斗くんのこと。

「え？ 何々？」

「式場でね、天使の羽を借りられるのよ、だから悠斗くんにつけてもらって、エスコートキットと、披露宴でもキューピット役としてチヨットー演技してもらいたいの」

姉が爆笑する声がする。

「え！ いいよ！ でも悠斗、滅茶苦茶日本人顔で天使って顔じゃないよ」

「何をおっしゃる、私にとっては、まさに天使の存在ですよ！」

フフフと姉が笑い、本人の意志もなく快諾してくれた。姉にとってはまだ見ぬ太陽くんをネタに、ドラマのように平和な姉妹らし

い会話を楽しむ。

電話が終わったときには、食卓には私の夕飯が並んでいた。私は『頂きます』の挨拶をして、結婚前の母娘がいかにもしそうな、穏やかな会話を交わす。

実は私は極度の外弁慶なのだ。別に外で暴れん坊というより、家の中でのおとなし過ぎる子だという意味で。

私はずっと、こうして家族と当たり障りのない会話を、穏やかに楽しむという生活を続けてきている。感情を弾けさせ、自由に会話する姉や、斜にかまえた捻くれた事を態と言って家族とぶつかる兄のように、普通に家族らしく過ごしたいとは思うものの、そうやってズツと過ごしてきたために、どうすれば素直に接する事ができるのか分からない。

「結婚式で流す、メモリアルムービー用の写真をこの後決めるつもりなの」

そう話す私に、母はニコニコとした笑みを返す。

「なら手伝わよ、私の手元にアルバムに入りきれなかった写真いっぱいあるから、持って行くわよ」

「ありがとう」

私はニッコリと良い子の笑みを返す

食事を終え、食器を片付けた私は、とりあえず自分の部屋に帰る。そして本箱にあるアルバムを取り出しめくる。

最初に手にするのは人生最初のアルバム。一見普通の子供の成長を記録したアルバムのようで、私の人生最初をまとめたアルバムには実は不自然な所が一つある。それは、ある三年間の写真がバツサリ抜けているのだ。三歳から小学校に上がるまでの三年間の時代がそこにはない。

ついでに言うと、私の過去を彩るアルバムには中学校時代の写真も一枚もない。コチラ理由は簡単である。私にとって思い出したくもない時代だったので、自分で全て捨てたから。

三歳から六歳の写真は多分、探せばどこかにあるのだと思う。けれど私の手元には一枚もない。

もしかして伯母の家にあるのかもしれない。私はその時代、叔母の子として家を離れ生活していたからだ。

我が家には三人子供がいて、叔母の家には一人も子供が出来ないそれを不憫に思った祖母が、我が家の一人を伯母に養子を出してはどうかと提案してきたのが全ての発端。

流石に最初に生まれた長女、そして長男である兄は嫌だろう。そこで私に白羽の矢が当たったわけだ。当時人見知りを一切しない脳気な性格であった事も、選ばれた理由らしい。

私は幼く馬鹿だったこともあり、最初の一ヶ月はそういった事情で伯母夫婦の子にされていた事に気がつかず、チャホヤとされた生活を楽しんでいた。ただ遊びに行っているだけだと思っていたし。でもそんな生活にも飽きて、家に帰りたと思った時に自分を巡る環境が変わっている事に気がつく。私は事情が飲み込めないままに、何故帰れないのかも分からず、混乱する。

この後の事、私自身は実は殆ど覚えていない。

姉から後で聞いた話によると、パニックでになって私は大騒ぎしたようだ。しかし兄が『お前はわがままでうるさいから、いらないから捨てられたんだよ』と言われ私の様子は一変する。兄も五歳で

小さかったし、決して悪意があつていった言葉ではなかったけれど、その時の私には冗談でも言つてはならない言葉だった。今までニコニコと笑つていておしゃべりを続けていた子供が、一切笑わなくなり何も喋らなくなつたらしい。一時的なモノだろうと大人達は思ひ、しばらく伯母の家で様子を見ることにしたらしいが、いつまでたつても笑わないし言葉も発しない。アレだけ懐いていた伯母夫婦にも一切感情を見せることもせず子供らしさを一切なくした状態に流石に大人たちは困り果てる。そして小学校入学を前に再び月見里家に私は戻る事になったようだ。

物心ついた時にはヘラヘラ笑いで全ての感情をごまかす子供になつていた。

私は人から嫌われる事、不要だと思われる事が絶えられないほど怖い。だからこんなにも人の顔色を伺う性格になつたのだと思う。得に家族に対して本音でなく建て前だけで接するようになり、今に至っている。

「百合ちゃん、ドアあけて！ 手がふさがつていて開けられないの」

ドアの外で母の声がする。ドアを開けると母が箱を何個か重ねて重そうに持つていた。私は慌ててその半分をうけとる。

「カワイイの選はないとね。晴れ舞台を飾る写真だし」

ベッドに腰掛け母は嬉しそうに、箱の中から私の写真だけを選びだし、広げていく。

私も別の箱の写真を出して中身を見ていく。小学校の時の写真、家族旅行の写真懐かしいものばかりだ。

「あっお祖母ちゃんだ」

私は祖母の写真を取り出す。姉と私と祖母が、ペンギンの檻の前で笑っている。私と姉の様子からいって小学校くらいの頃の写真だろう。

祖母は二年前に癌でなくなり、もういない。母はその写真を懐かしそうに眼を細めて見つめる。

祖母は愛情深い人だった。あの事も自分の娘そして孫全員の幸せを願って提案したのは今だと良く分かる。でも私が全てを台無しにして、関係者みなを傷つけてしまった。あれだけ傍若無人に家族に振る舞う兄ですら私だけにはその穂先を向けてこないというのも、そういうことなのだろう。

あの時代の事は、我が家においても語ってはならないタブーな話題となっている。父のみが時々その事を話題にしてきて、家庭内の空気を微妙な物にしてきている。

そして祖母は、会う度に私に謝りつづけていた。祖母の病床で聞いた最後の言葉も『ゆりちゃん、あの時は本当にゴメンね』だった。

「私の花嫁姿も、見てもらいたかったね」

母は私の言葉にふわりと笑う。

「大丈夫、いつだって貴方を見守っているわよ」

敬虔なクリスチャンの母らしい言葉だ。母は、静かに祖母の写真を見つめ続ける。

「そうだね……。お母さんも楽しみにしていて私の花嫁姿」

母が私の方を見てニッコリ笑う。

「世界で一番力ワイイ花嫁さんになるのでしょうかね」

母の言葉に私は首をふる。

「親馬鹿にも程があるよ、しかもお姉さんの立場は」

「どっちも私にとって世界で一番力ワイイ娘よ。それに知らなかった？ 親って馬鹿なものよ」

母はニツコリと笑って私の頭を撫でた。小さい子供にするかのよう
うに。

母の中では私はいつまでたっても小さい子供のようだ。そのように母は私をいつも扱う。私もそんな母に無邪気に見える子供っぽい笑みを返す。母の手は優しく暖かく、私はその快さを感じながら、心の奥でチクリという痛みを感じていた。

ねじれた家族（後書き）

ねじれた家族（CROOKED HEARTS）

1991年アメリカ映画

監督・脚本：マイケル・ボートマン

キャスト：ビンセント・ドノフリオ

ジェニファー・ジェイソン・リー

イン・ザ・ベッドルーム

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

付き合うようになって訪れることも多くなった、大陽くんのマンション。

最初入ったとき驚いたものだ。3LDと一人暮らしのわらいに大きい部屋で、家具というものがビクリするくらい少ない。リビングにTVとTV台とテーブルとソファーしかなく。キッチンにはよくホテルにあるかのような小さな冷蔵庫と電子レンジと電気ポットあるくらい。

彼はリビングと和室でのみ生活していたようで、残りの部屋は倉庫と化していて家具すらない。本とゲームソフトが積んである。

その冷蔵庫からも分かるようにキッチンをまったく使っていないようでコンロはホコリをカブっているものの綺麗なままで、驚くことに鍋や包丁といったものが一切なかった。

コンビニという便利な存在が、コレでも人を不自由なく生きていけるようにしていたようだ。

去年のクリスマス、二人でこの部屋でパーティーをすることになった時、流石にコレだと何もできないと、百均で簡単な調理器具を買って、付き合うようになり、チョットした調味料や道具を持ち込むことで、台所に関しては簡単な料理はできる場所にはなった。

呆然としていた私に『結婚する時に、そろえればいいと思って』と、大陽くんはヘラッと笑ってそんな事を言った。

『だって女性って結婚の際、新しい家具でスタートしたいものなんでしょ？ その時一緒に買えばいいと思って』

それはそうだろうけれど、こんな空間で生活していて不自由ではないの？　と思ったものだ。

ペアの食器とか私の物が少しずつ増えてくることで、この部屋も大陽くん同様、どんどん愛しいものになってくる。押し入れで眠っていた義母さんのキルトをソファーにかけたり、デートの時にUFOキャッチャーでとったぬいぐるみが飾られたりと、一緒に見た映画のポスターを壁に貼られたりと、二人の想いや思い出がこの部屋に満ちていく。コレが一緒になるって事なのだと実感する。

今日二人で選んだ家具が到着するということで、私も一緒に部屋で待機していた。掃除機をかけて私が部屋を片付けている間に、大陽くんはパソコンで私が作ったメモリアルムービーを見て確認している。ソレをみながら吹き出している声がある。

「まあ、嘘ではないけど、こう表現すると俺達ってドラマチックに見えるところが可笑的い」

良かった、大陽くんにはウケたようだ。

互いの親が大学で知り合った所から始まるそのムービーはかなりふざけたモノで、その後同じ小学校で五年半過ごすものの五年間はクラス分けで引き裂かれ、同じクラスになったら今度は転校で引き裂かれ、同窓会ですれ違いまくり、といった感じで大げさに二人の過去を表現している。下手に家族の愛に包まれて、健やかに育ちましたといった内容の作るのも躊躇うものがあつたのでそういったものにした。

「結婚式だと、それくらい大げさの方がいいでしょ？」

「ただ、同窓会の後の部分で、誤字あったから直しておいたほうがいいよ！」

「え、嘘！」

そんな事言っていたら、ドアフォンの音がする。家具が来たようだ。私はインターホンへと走る。

配送会社の人は馴れたもので、手際よく家具を組み立てながら、設置していき、殺風景だった空間が部屋らしくなる。色のトーンも明るめのナチュラルなものに明るくそろえたのが良かったように思う。配送者の方にお茶をお勧めしたものの急ぐのか断われたので、その手にペットボトルのお茶を渡し送り出す。

あらためて部屋を見渡すと、食器棚、ダイニングテーブルなどが並んで、新婚の部屋っぽい。なんか嬉しくて、大陽くんの方を見上げニヤニヤしてしまった。同じようなニヤニヤ顔を返される

「本箱も届いたし、本を収納しよう！」

まずは床に置かれている本をなんとかしなければ。高い部分は大陽くん担当で、本を詰めていく。

一時間ほどで、床に積まれていた本が見事に本箱に収まり、部屋がスッキリした。やはり収まるべき所に物が収まっているって気持ちがいい。

一旦一休みするためにリビングへ戻ることにするけれど、大陽くんは悪戯っぽい笑みを浮かべ私をその手前の部屋へと誘う。そこは先程ベッドが設置されたばかりの、いわゆる寝室。まだカバーも外されてなく、シーツも掛け布団も枕もおかれていない状態だけど部屋の真ん中にあるその家具は凄まじい存在感を放っている。その家具はつまりWベッドなのだけど。私ななんか恥ずかしくなり俯いて

しまう。大陽くんはその部屋を満足そうに眺めそのベッドに腰掛スプリングの堅さを確かめるような仕草をする。そしてモジモジしている私にもおいでと手で誘う。

私とその隣に腰掛けると大陽くんは少しかがんでキスを落としてきた。私達の身長差の場合立っているよりも、座っている方がキスしやすい。そのままベッドに押し倒され、さらに深いキスを交わす。大陽くんの手が私のＴシャツの中に入ってきて直接肌を撫でていくのを感じたけど、私はそれを拒むこともせず、そのまま身をまかせた。

まだマットのビニールカバーも外していない状態なのでピタピタ肌に張り付いて、ハッキリいつてソコがチョット気持ち悪い。でも二人でそのまま寝転びまったりとしていた。私はチョット起き上がり、大陽くんの胸にあごをのせる。そうするとくすぐったいらしく、腕枕状態に移動させられてしまう。

「カバーもとつてないのに、何やっているんだか」

大陽くんにひつつくように寝ている私の言葉に、フフと笑う。

「なら、外してもう一回する？」

私は首をふる。今日は他に色々すべきことがある。と思いながら、すぐに立ち上がって何かをする気にもなれないのも困ったところ。

「今日から、このベッドで安眠ですね」

結局寝転んだまま、からかうようにそんな言葉を続ける。けれど

その言葉に『ウーン』と大陽くんは悩んで様子。

「まだ、布団でいいかな。ココを使うのは、結婚してからにする。二人のベッドだから一人だと寂しいし」

なんか、その言葉が嬉しい。

「ここが、二人で眠る場所になるんだね」

一緒に住むという事。一緒に起きて、一緒に食べて笑って、同じ場所に返って、一緒に眠る。当たり前だけど、それが特別な事に思えた。

「なんかさ、今日、分かったんだ。この部屋に足りなかったもの」

私は顔をあげ、大陽くんの方を見てしまう。

「やっと、俺の場所になったって。いや俺達の場所か」

言って照れたのか、チョット目をそらす。そんな大陽くんの顔がボワッとゆがむ。涙が出てきたからだ。

そういえば映画見たあと意外で初めて見せてしまった涙だったのかもしれない。だからなのだろう大陽くんは慌てる。

私はそのまま、大陽くんにしがみつくように抱きつく。

心の奥から言葉にならない安堵感と喜びが込み上げてくる。そんな私を静かに大陽くんは撫で続けてくれた。

「心も空間も混じりあって、家族になっていくんだね」

少し落ち着いてきた私は、そんな意味不明な事をつぶやいていた。

「だね」

でも大陽くんは馬鹿にするでもなく、短くそう答える。

やるべき事は山の程あるけれど、私達はしばらくそうやって抱き合っていた。世界中で唯一心も体も裸になれる心地の良い場所、ココが私の家。私は暫くその暖かを体中で味わっていた。

イン・ザ・ベッドルーム(後書き)

In the Bedroom

2001年アメリカ映画

監督：トッド・フィールド

原作：アンドレ・デュバス

脚本：ロブ・フェスティンガー、トッド・フィールド

キャスト：トム・ウィルキンソン

シシー・スペイセク

その名にちなんで

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

午前中私が席を立つと、前に座っている深沢主任がニヤッと笑う。

「サンちゃん、俺も珈琲な！」

「はい、はい！」

私は笑って頷く。この主任はチャッカリしていて、私が何か飲み物を作りに行くと、こうして便乗する。他の二人の上司を見ると、井筒課長は俺はいらないと首を横にふり、係長は小さく『お茶』とつぶやく。

結婚というのは、プライベートな意味ではその違いは大きいけれど、会社的にはさほどの変化はない。家が若干近くなり、交通費支給額が下がった事。後は書類上での名前が変わっただけで、仕事もそれまでと同じだし、呼ばれ方も旧姓のまま。背が伸びたわけでも女つ振りが上がったわけでもなく社内の人からみての変化は殆どないのかもしれない。結婚して一年チョット経つけど、会社の殆どの人が『月ちゃん』と私を呼ぶ。

ただ、この上司だけは結婚というより、入籍を境に私の呼び方をハッキリ変えてきてくれた一人。でも『月見里』で『月ちゃん』のような感じのニックネームが『太陽』という名前はイマイチ良い感じで略するのが難しいようだ。『おおちゃん』『およちゃん』とも言いきつい事もあったのかもしれない。そして太陽＝SUNという事で、この上司は私を『サンちゃん』と呼ぶ。そして隣の係長は『太陽』と呼び、主任はちゃんと『大陽』と呼んでくれる。課長は生真

面目な性格から私を正しく呼び、残り二人は面白がつて態とそう呼ぶ事を楽しんでいる感じた。

給湯室に行くと、実和ちゃんが珈琲を楽しそうに入れていた。彼女の前にあるのは同じデザインで色の違うマグカップ二つ。以前は別々のデザインのカップを使っていたはずなのに、付き合いだしてからペアカップになっている所が、微笑ましいやら、見ていて恥ずかしいやら。

おっさんのお茶を入れにきた私と違って、愛する男性の為に飲み物を作っている姿はなんともいじらしくて可愛い。

私が入ってきたのに気が付き、彼女は顔を輝かせ私に笑いかける。

「月さん、あの……私昨日の日曜日に無事入籍いたしました」

色々、時期とかどうするか相談されていたから、その報告を彼女は嬉しそうに言う。二人もやはりハネムーンを同じ名前で行きたいということとで早めに入籍することに決めたようだ。

「おめでとう！」

「月さんが、色々教えて下さったので、何も問題もなくスムーズに終わりました！」

まあ、元々そこまで複雑な手続きではないので誰でも簡単にできるものなのである。私のように、一カ所渚くんのサインがなくて、偽造しなければならなかった失敗、二人揃って提出にいけないようだ。まさか入籍の時に、公文書偽装なんて罪を犯すことになるとは思いもしなかった。

「良かった！　で、どう？　黒沢さんになった気分は？」

彼女は『黒沢さん』と呼ばれ激しく照れたものの、嬉しそうだ。

「いえ……嬉しいのですが、実感がまったくなくて。それにまだ私実家ですし」

そうでしょうね、私もそうですし、会社においては未だに私の苗字は何？　と思うところがある。彼女の場合今後、流石に夫婦同じ課で同じ仕事というのは問題があるということで、別の課へ配属移動になる。とはいえ同じフロアで黒沢夫妻が共に同じフロアで過ごすことになる。となると同じフロアに『黒沢さん』が二人になるそういう状況で、『黒沢』の名で定着するのか、『西川』の名が残るのか見所である。今の所、私の同期では、夏美ちゃん以外は旧姓が以前強く残っている状況だ。それだけ頭で分かっているても長年染みついた名前の認識を変えるのって難しい事のようなのだ。

でも不思議だ。昔は家をとにかく出たくて、結婚して別の名前になつて月見里でなくなる事を望んでいたのに、実際結婚してみると太陽という苗字と同じくらい、月見里という苗字も愛しい。寧ろ社内、旧姓での呼び方が残っている事がチョット嬉しかったりする。

もう流石に旧姓の郵送物の転送もないし、年賀状にも『（旧姓）月見里』の文字を入れる必要もないだろう。でもこの会社で『月ちゃん』『月見』『太陽さん』『太陽』と両方の名前で呼びかけられても、それが全て私の名前なのだ、そのように今は思える。

「ねえ、実和ちゃん。実和ちゃんは会社でコレから、どちらの名前で呼ばれたい？」

「え！」

実和ちゃんは、キョトンとした顔で見返してくる。でも真面目な子なので、すぐに私の質問をジックリ考えているようだ。

「今はまだ、西川で挙式後は、やはり『黒沢さん』って呼ばれたいかな」

『黒沢さん』って言葉に照れながら、彼女は夢みる乙女の顔で答えた。

「オッケー、ならそのつもりで、呼ばせていただきます。名前が変わっても、結婚しても、これまで通り仲良くおつきあいさせてね」

「当たり前じゃないですか！」

実和ちゃんの可愛い返事に、私はフフッと笑ってしまった。ここにも一人可愛い妹が私にはいたようだ。

その名にちなんで（後書き）

その名にちなんで

The Namesake

2006年 アメリカ・インド合作

監督：ミラー・ナイル

脚本：スーニー・ターラープルワラー

キャスト： カル・ペン

タブー

イルファン・カーン

ジャシнда・バレット

家族の絆

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

流石に式の三ヶ月前となると、一緒に映画という暇もあまりなくなってきた。打ち合わせ、相談、買い物といった事をしていると、あっという間に時間がなくなり、日にちもたっていた。そういった忙しさが余計な事に悩む暇も与えず、私と大陽くんは文化祭前の学生のようにハイテンションで盛り上がり準備をすすめている状況だった。

今は映画 RENT の DVD を BGV にして、二人で旅行のパンフレット広げている。

どうも、新婚旅行の計画は、なんやかんやズルズルと遅れ気味になりこんな時期に色々考える事になった。

スペインまでの直行便がないことで、いくだけでも時間が結構かかりそうだ。いくからには満喫したいので、たっぷり十二日間のコースを選ぶことにした。

その頃の大陽くんの仕事の関係で、結婚式の後、少ししてからという事になったのでついノンビリしてしまったというもある。

そこで悩むのは、私はどの名前で新婚旅行に行くかということ。それはいつ入籍をするかという問題にも繋がってくる。航空会社によつては名前で席を決められるので、夫婦でも離れてしまう事があるとかいう文章も見つけ悩む。

方法としては、入籍を新婚旅行の後にして別別の名前で行く。入籍するけれどパスポートの名前は前のままで行く。早めに入籍して新しい名前のパスポートで行く。パスポートの戸籍が違う場合、何かあったとき色々手続きが面倒なのでコレは止めるとして、残り二つどうするべきか。

折角の新婚旅行、別々の名前をフロントで書くのもなんか寂しく感じるのは私だけなのだろうか？ しかも旧姓でハネムーンにいくとなると、入籍は旅行から帰ってきてからになる。となると挙式から一ヶ月もおいての入籍というのも寂しすぎる。

「百合ちゃん、パスポート今あるの？」

私は首をふる。あることはあるけれど、それが丁度切れてしまった状態。期限の切れたパスポートを大陽くんに示す。

「作り直すなら、いつそ新しい名前にしてしまった方がよくない？
今度また海外旅行いくときに二度手間にならないから」

それは言えている。結婚で戸籍が変わるということは、色々変更届けをしなければならなくて面倒なものなのだ。その手間を一つでも減らしておくのはいいのかもしれない。

となると最低でも旅行の二ヶ月前には入籍しておいたほうが良い。
つまり今の時期ということになる。

「大陽百合子か」

大陽くんはブブツと笑う。

「何？ いきなり」

「いや、響きとしてどうなのかな？ と思って」

何が可笑しいのが、ずっと笑っている。

「悪くないんじゃない？」

なんだろうか、実感がわかないけれど、なんかこそばゆいような嬉しい響きがその『大陽百合子』という言葉にはあった。

「そうだね、とりあえず親に相談してみる」

「とりあえず。もらってくる？ 婚姻届け」

そのまま、二人で近所にある区役所へと出かける。休日でも受け付けをしているだけに、用紙自体はすぐにもらえた。

「ところで、お二人の本籍地は川崎ですか？」

そう聞かれ私は首をふるしかない。父の実家である京都に本籍がある。

大陽くんも本籍が京都にあるようで、二人とも戸籍抄本か謄本をもらう必要がある。この本籍という考え方は何なのだろうかと思ってしまう。

一度も住んだ事も行った事もないような場所がそうなっていたり、誰も住んでいないような川とかになっっていたりもするし、好きな場所を設定してもいいらしい、何の意味があるのだろうか？

その事を素直に窓口の人に告げると、「まあ名残の制度みたいなものですので、本籍の場所が意味を感じないのでしたら、結婚の際現住所に変更することもできますよ、その方が今後書類手続きとかは簡単になりますから」

なるほど、折角ここで二人の戸籍をつくるなら、利便性を考え本籍変更するのもしれない。しかも婚姻届けで本籍の変更が簡単に行ける。

大陽くんはすぐに実家に電話したら、『いいのじゃない、ソレで』と簡単な答えが返ってきた。私の本籍は結婚で変わってしまうから何も言わなかったけれど、早めの入籍に関してはかなりゴネねきた。しかし『入籍だけで、一緒に住むのは式あげてからだぞ！』とひつくく念を押し、渋々といった感じで納得してくれた。

その足で、旅行代理店に行き、そこでも相談にのってもらう事にした。予定日まで三ヶ月弱しかないという事に驚かれたものの、親切に色々アドバイスをくれた。私達が予定していたツアーはホテルのサービスが若干変わり、ディナーが豪華というだけの内容なので今からの予約でも大丈夫だろうという話だった。パスポート出来次第もってくるという事で、予約だけをして旅行代理店を後にする。

その後喫茶店で一休みをすることにした。濃い焦げ茶色の木で統一された落ち着いた内装のお店は、私の心をチョット落ち着かせてくれた。私は珈琲をのみ、大陽くんはアフオガードを嬉しそうに突いている。

「戸籍謄本、本籍から取り寄せるので一週間くらいかかるとして、入籍いつにする？」

「うーん、なら十二日とか？ ほら！ 二人とも誕生日は十二日だから覚えやすい？」

大陽くんは名案だと言わんばなりにドヤ顔をしている。彼のいう通り、私の誕生日に九月十二日に挙式で、大陽くんの誕生日は一月の十二日。そこで八月の十二日を入籍記念日。我が家の夏から冬は、記念日だらけで目出度いものとなりそうだ。

「記念日を自分で設定できるなら、意味ある数字がいいよ」

という大陽くんの言葉で決まった。

届けるのは、まだ先だけど二人で、婚姻届けを書くことにする。大陽くんが、夫となる人物の項目を上から埋めていく。そして婚姻後の本籍を書き入れ、大陽くんはそのままの流れで、婚姻後の氏の欄の『夫の氏』にチェックを入れる。私はその様子をジッとみつめていた。

自分が書き入れる部分が終わり、その書類を私に大陽くんは私に書類をコチラに向けてくる。

たかだか自分の名前と住所をいくつか書き入れるだけなのに、緊張する。

「どうしたの？　もしかして躊躇っているの？」

ペンを持ったまま動かない私を心配そうに大陽くんが眉をよせて私を見つめてくる。私は慌てて首を横にふる。

「思った以上に、私が月見里じゃなくなると簡単なのだなと思って。あんだけすがりついていたこの苗字を、私は簡単に捨てようとしているのだなと」

「捨てるって、そういう事じゃないだろ？　それに苗字気に入っていたの？」

大陽くんが笑う。確かに捨てるのではない、正確には逃げるといふべきなのだろうか？

「気に入っていたというのではないかな、ただ昔ね——」

私は今まで誰にも話したことなかった、私の三歳の時の話をして
いた。大陽くんはビックリした顔して『うーん』と声をだし考えて
いる。いきなりディーブな話題をだされて戸惑っているのだろう。

「百合ちゃんはさ、親子関係ゆがんでいるっていうけど、親子関係
って何処も変っちゃ変なんじゃない？　ウチはぶつかり合って、心
を通わせわかり合っているかという違うし」

確かに、ポンポンと言い合う大陽くんの親子関係は、それはソレ
でビックリしてしまう所があるけれど。

「でも、理解しあってはいるでしょ？」

私の言葉に、大陽くんは首をかしげる。

「どうなのかな？　それに百合ちゃんの家だって、理解はしあっ
ているのでは？　百合ちゃんってお義父さんの事、文句いいつも
冷静に分析しているし、お義母さんの事好きだし分かっているじゃ
ん」

まさか、そういう言葉が帰ってくるとは思わなかった。あんなよ
そよそしい親子関係を理解しあっているとは。

「え？」

「それに、向こうだって、二十年以上も一緒に暮らしているんだよ。
どんな子かだって分かっているでしょ！」

「そうかな……」

明るく二カつと笑う大陽くん私はぼんやり見つめ返す。

「俺だって、百合ちゃんと知り合って一年くらいしかたってないけど、それなりに百合ちゃんという人間、見えるし、なんか分かってきたもの」

『そういうものでは』と続ける大陽くんの笑顔をみていると、なんだかそんな気持ちになってくる。私もつられて笑ってしまう。

「まあ、そうなのかな」

頷いて何でもない事のように笑う。

「それにさ、結局名前変わったくらいで、百合ちゃんのややこしい性格までも変わるわけでもないし、親子の関係は以前続くわけだから！俺も相変わらず親子喧嘩するだろうし、兄妹喧嘩するし、互いに煩わしい繋がりはそのまんまって感じだろうね」

思わずフフと笑ってしまう。

「逆に渚くんは、ややこしい妻と、厄介な義理の父が増えるんだけど」

大陽くんは、態とらしく嫌そうに顔をしかめる。

「まあ、それはゆり蔵さんも同じでしょ？ いろんな意味で禿げた義の父親と、我が儘な妹が増えるんだから」

確かに、義父さんは私の父とは違った意味でややこしそうだ。で

も未歩子ちゃんは可愛かったけれどな？

「私は嬉しいけれどね可愛い妹できて」

大陽くんは、露骨に顔を歪める。

「甘い！ アイツはまだ猫かぶっているから！ 本性見えてないからそんな事言えるんだ」

まあ、長い事暮らしてきたら色々あるし、コレからも色々ある。家族なのだから。そしてこれから家族となる大陽くんともそうなるのだろう。でもこの人となら、どんな事もこうやって笑って乗り越えれそうだ。

私は妹の不満を次々朽ちにする大陽くんをなだめながら、改めてペンも持ち上げ書類に向き合う。

深呼吸をして、妻の欄に私の名前を綴る。恐れることは何もない、大陽くんと一緒なら。

私は全てを書き終わり、大陽くんに向き直る。大陽くんの嬉しそうな笑みが見えた。私も照れくさい気持ちと嬉しい気持ちがわき起こり多分馬鹿みたいに脳天気な笑顔を大陽くんに向けたと思う。

気が付くともうすっかり夕方になっていたようだ。傾いてオレンジ色になった太陽が、表の窓から入ってきて私と大陽くんを同じ暖色系に染めあげていた。

家族の絆（後書き）

家族の絆（FIRSTBORN）

1984年 アメリカ映画

監督：マイケル・アプテッド

キャスト：テリー・ガー

ピーター・ウエラー

クリストファー・コレット

コリー・ハイム

サラ・ジェシカ・パーカー

ロバート・ダウニー・Jr.

幸福の選択

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

挙式まで一ヶ月という忙しいタイミングで、黒くんと実和ちゃんのカップルは我が家にやってきた。

エレベーターを降りてキョロキョロしている二人に、私は玄関のところで手をふり部屋の位置を教える。

「暑かったでしょう！入って！入って！」

「お久しぶりです。お休みの所、急に押しかけてしまった申し訳ありません」

黒くんが花束とケーキの手土産渡し、玄関まで出迎えに出ていた渚くんに申し訳なさそうに頭をさげる。

「聞きましたよ。こんなタイミングでプリンターが壊れるなんて災難でしたね」

渚くんはニツコリと二人を迎える。

そう、黒くんのもっているプリンターが、席次表とかネームプレートといった創作物が多いこの時期に壊れてしまった。去年の年末に買ったばかりなので、無料修理期間なのでよいのだが、二週間程修理にかかるという状態。しかも来週までには、ペーパーアイテムをホテルに届けないといけない時期だけに困り果てていた。そういう事情で我が家のプリンターを使ってもらうことにしたのだ。

そういえば、この二人は私の結婚式の時あったままで、一年以上

ぶりなのかもしれない。流石に黒くんは結婚式の主役の一人だった渚くんは覚えているだろうけど、渚くんは出席客の一人でしかなかった黒くんを覚えているのだろうか？ と不安だったけど、ニコニコ話しているので大丈夫かと思う。

「本当に参りました。こんな時にプリンターが壊れるなんて」

恐縮しまくる黒くんに首を横にふり、部屋の中へと促す。でも実和ちゃんは、ウチに遊びにくることを楽しみにしていたようで嬉しそうに部屋を見渡している。私が結婚したあと、実和ちゃんは黒くんと付き合い始めたこともあり、忙しくなり、我が家に遊びにくる事がなかなか出来なかったからだ。

「うわゝ素敵な部屋ですね」

お世辞ではない感じの実和ちゃんの言葉に内心ホツとする。共働きである為に、そこまで掃除が行き届いているというわけではない。昨晚必死で掃除した。二人は興味ありげに、本箱や、棚の上並べられた映画グッズを眺めたりしている。私はソコって埃はたいいたかな？ と不安になってくる。

「まあ。のど渴いたでしょ？ まずはお茶でも飲んで落ち着いて」

私はトレイにアイステイーの入ったグラスをもって、二人をソファーに促した。

そして、今日ここで作るべきペーパーアイテムを確認する。席次表とネームプレート付き冊子の二点を二百人分。

席次表は、B5ペラ刷りなので、すぐに出来るとして、二人のプロフィール紹介等をのせた冊子はB5サイズを二つ折り六ページで金

の紐で軽く纏めたもの。そして表紙には名刺サイズのネームプレートが付く。

その説明を受け、渚くんはアレっという顔をしたので、黒くんが照れくさそうに頭をかく。

「冊子のデザインは、お二人の結婚式のアイデアをパクりました。ネームプレートの後ろに新居の案内を載せるって良いアイデアだったので」

「いや、百合ちゃんがドヤ顔で威張っていたアイデアって、実は誰もがやっている事なんだと思ったならそういう事だったのか」

納得したように、渚くんは頷く。私、そこまでドヤ顔した覚えはないのですが……。

そう、この冊子タイプのネームプレートは私達の結婚式に時に作ったものと同じなのだ。それを山形に伏せた状態でよくとネームプレートになり、冊子は冊子で楽しんでもらえる。しかもそのネームプレートの後ろは新居の地図と住所と電話番号が入っていて、今後新居に遊びに来る場合は、ソレを頼りにして来てもらえたら良いというもの。

私達の場合は、付き合っている時の二人のエピソードを四コマ漫画したもの、小学校の時の集合写真を使い『小学生の二人を探せ！ゲーム』といった感じのモノで構成した。

そして、先にA4サイズの名刺用用紙を使いネームプレートを印刷して、冊子を作る事にした。二人が印刷している間に、私は金のゴムをA6サイズに二百本切りそれを、渚くんに結び目をつくっていつてもらう。その様子を黒くんが申し訳なさそうに見つめてくる。

「すみません、そんな事をさせてしまって」

「いいの！ いいの、この人、自分の結婚式の準備の時、寝ていて何もなかったから」

ニツコリと笑う私の横で、渚くんは苦笑いをする。まあ例によって、徹夜続きの後だった事もあるけれど、結局冊子は渚くんの家で作ったものの、冊子作りは私と母が二人で内職のように制作した。

「こういう事って、後々、ネチネチ言われるから黒くんも気をつけてね」

渚くんの言葉に黒くんは引き攣った笑いを返す。渚くんにとって黒くんは殆ど初対面に近く、しかも年上は筈なのに、私につられて『黒くん』という所に違和感を覚えた。

四人でやると、印刷する人、紙を折る人、ページに纏める人といった作業分担も出来、しかも話しながらできるので楽しい。

まだ読んではならない内容だとは分かっているけど、見えてしまう冊子の中身。二人がそれぞれ好きな言葉、相手を何と呼んでいるが、何処が好きとか、付き合うキツカケとか、なかなか読んで照れる内容になっている。

「なんか、すっごく恥ずかしい！ そんなに笑うなら月ちゃんたちの付き合うキツカケとかも教えてよ」

私があまりにもニヤニヤしてしまったのが、黒くんも流石に照れてきたのか、拗ねたようにそんな事聞いてくる。

「いいいえ、私らはそんなにお二人のような素敵にラブな始まりではないので」

私はへらつと笑って誤魔化する。

「確かにね」

渚くんもニツコリ笑いながら『僕らの場合は』と続ける。私は思わず、隣を観てしまう。

「花火大会を二人で観に行ったときに、凄い土砂降りにあってね、二人ともビショヌレになって最悪の状態だったんだ。でもなんかそれでも楽しくて」

アレ？ いつの話をされています？ そのイベントの思い出はあるけれど、そこで告白されたという記憶が私にはない。

「で、『これからずっと一緒に、いろんなイベント楽しんでいこう』って言ったのが始まりだったからな」

ソレ、告白だったの？ 前を見ると『素敵な告白ですね』と実和ちゃんが感動した様子で答えているから、一般的にみても告白だったのだと気付く。でも、黒くんは、アレ？ という顔をしている事からやはりわかり辛いという事だよね？

ということは、私達は、あの夏から恋人同士だったということ？ ならば、私が秋から冬にかけて片思いでヤキモキしていたという時間は何だったのだろうか？ 私は思わず手を止め、何とも言えないモヤモヤしたものを心の中で感じる。

「花火大会で告白なんて、凄いロマンチックじゃないですか！ そういえば月さんのプロポーズってどういう感じだったのですか？ 教えてくれなくて」

実和ちゃんは、すっかり乙女モードにはいつていて、眼をキラキラとさせてさらに踏み込んだ話を聞いてくる。実和ちゃんは大人しく、あまり自分から話をふったり広げたりという事をしないで聞き役出来ることが多いけれど、こういった恋愛系の話になるとこういうノリになってしまう。

「そんな、ロマンチックなものでもないですよ、映画館に行ったときに」

必死で複雑な気持ちを整理していた私は、自分の旦那様の口から思いもしないワードが出てきて思わずまた、その顔をみてしまう。いつものようにニコニコと笑っているし、そんなに話を盛るとかいふこともしない人だけに、どんなプロポーズの言葉が出てくるのか、実和ちゃんとは違った意味でドキドキとした気持ちで聞いていた。

「『映画のパンフレットもう二人で二冊買う必要ないよね』って言うただけで」

（それかゝ！ ソッチが告白の言葉だと……）

「映画好きなお二人らしい、プロポーズですね！」

ニコニコと平和に話を続ける二人の横で私は、ヘラっと思いつきり作り笑いをして誤魔化していた。黒くんは何やら、首を傾げているようだ。

「あの、深夜のファミレスで携帯電話超しだという話は？」

私が動揺しながら、一人で必死に二人の時系列を整理していたら、黒くんがボソッと聞いてくる。そうか黒くんには私がプロポーズと

感じていたエピソードを話してただけに、それとの相違に首を傾げていたようだ。

渚くんは、一瞬その言葉にポカンとしたけど、すぐに「ああ」と頷く。

「それは最終結婚意志確認みたいなものなのかな？」

「はあ」

黒くんは、それになんとも間抜けな言葉を返す、そして私の誤魔化し笑いでなんか察したらしい、ズレまくった私たちの関係を。

「どうしたの？ 手止まっているよ！」

私は『イヤイヤ』と首をよこにふる。

「けっこう、こういう話改めてするのって、恥ずかしいかなと」

そう誤魔化しておく。

「ま、一方的に笑って、黒くんたちだけ恥ずかしい思いさせるのも可哀想じゃん」

その言葉に、二人が思いつき顔を赤らめる。確かに渚くんも中の文章を読んでニヤニヤしていた事を思い出す。

「ということは、出会って数ヶ月で付き合って、半年もしないでプロポーズってずいぶんテンポ早いですね、迷う事とかないですか？」

黒くんは、逆にコチラの恥ずかしい話を聞くことで、攻撃に転じてきたようだ。後悔か、私は後悔というものは無かった気はする。でもあえて何も言わずにチラリと隣を見上げた。

「ないかな？ まあこの年だし、告白するにしても、結婚もありと考えられる相手がかんがえませんか？」

その言葉に私と黒くんはビックリした顔で渚くんの顔をみる。

「え、最初からそこまで考えていたの？」

「え？ 男性なのに結婚願望強い方だったのですか？」

私達二人の言葉に渚くんはウーンと悩む。

「いや、三十くらいに出来たらいいなという感じだけど、単に恋愛を楽しむだけの為に人と付き合うというのも面倒だし」

恋愛を楽しむことをモットーにしてきた男が、その言葉に引き攣った笑いを返す。

「でまあ、どうせ百合ちゃんこのまま付き合っていくなら、恋人でも夫婦でも大した違いはないので、変わらないなら、しちゃっても良いかなと」

「はあ」

渚くんらしい言葉だと私は思ったけど、ソレに慣れていない黒くんは、何と言っているのか分からないという顔で、曖昧な相槌をうつ。実和ちゃんにはその言葉が、ラブロマンスチックな内容に変換

されているようで素敵な映画を観ているかのようにホクホクした顔をしている。

「そんな簡単に、結婚なんて決めていいもの？」

からかうように言う私の言葉に、渚くんはポカンとした顔をする。

「簡単に決めたわけでもないし、すぐに後悔するような選択なんてそもそもしてないよ。現に今、すっごい幸せで満足しているし」

ニツコリ笑う天然の渚くんの言葉、慣れてきたと思うのにこう不意にこられると真っ直ぐな言葉に思わず赤面してしまう。

向かいの席を見ると目をハートにした実和ちゃんと、苦笑しつつ嫌みっぽく笑う黒くんの顔が見えた。

「新婚って感じでいいですね」

黒くんの嫌みっぽい言葉に、照れもあり睨む。

「そちらだって、二人っきりの時はもっとデレデレな状態では」

突っ込むと黒くんは笑いを引つ込め、実和ちゃんは顔を赤くして目をそらす。

二人って思いつきり馬鹿ツプルになるタイプなのだろうか？ 想像してみても、コチラが恥ずかしくなってしまう。四人いるうちの三人が照れているという事で我が家のリビングに微妙な空気が流れる。

「あつ、三時だからおやつでもしない？ さっき頂いたケーキもあるし！ 昨晚百合ちゃん焼いたアップルパイもあるし食べよう！」

脳天気な渚くんの言葉が、そんなどこがモヤモヤした空気を吹き飛ばす。私は立ち上がり、お茶の準備に向かうことにする。

印刷も順調だし作業も半分くらいは進んだ。この分だと今日中に余裕で終わることができそうだ。

「じゃあ、お茶はダイニングの方でいいかな？」

作業場所で飲食するのは危険というものである。しかも今回している作業は大切な結婚式のアイテム。汚すわけにはいかない。

渚くんは珍しく率先して、食器棚から皿を出し、いそいそと冷蔵庫からケーキの箱を出す。手伝いたいとか、お客様の前で良い亭主のふりして格好つけるとかいうのではなく、早く食べたからだろう。私はそんな渚くんが可愛くみえて、思わず微笑んでしまった。こんな巨大な男性が可愛く見えるというのも、新婚ボケのなせる技なのかもしれない。

幸福の選択（後書き）

幸福の選択（THE OBJECT OF BEAUTY）
1990年 アメリカ

監督・脚本：マイケル・リンゼイ＝ホッグ
キャスト：ジョン・マルコビッチ
アンディ・マクダウエル
ホス・アクランド
ピーター・ライガート

夜逃げ屋本舗

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

水蒸気オーブンレンジがチンとなる。ザックリ温めモードでバリさを復活させたアップルパイを取り出した。皿に切り分け上にアイスクリームを盛り付け、カウンターにコップに生けていたミントの葉を千切りアイスに載せる。そのお皿を黒くんと、美和ちゃんの前に置くと、二人は子供のように目を輝かせた。

クリームケーキも素敵なモノであるが、こういう焼きたてのパイは、また違った心踊らせるホカホカした空間を作り出す。

「中にカスタードクリームまで入っていて美味しい！ 手作りこんな凝ったパイ作れるなんて月さん凄い ですね！」

美和ちゃんの言葉に、恥ずかしくなりイイイヤと首を横に振る。

「コレはね、冷凍パイシートに近所のケーキ屋さんのケーキの端切れを敷き詰めて上に煮リンゴとプリンを広げてパイ生地で蓋をして焼いただけなの」

私は手抜きを白状する。パイのパリパリさを守るためのスポンジは買ってきたもの、カスタードぼく見せているクリームはプリンで代用とかなりのなんちゃって料理なのである。材料で私が作ったものはリンゴの砂糖煮くらいである。

それでも美味しいと言ってくれたので良かった

「ところで、結婚式まであと一ヶ月チョットだけど、引っ越しとかの準備は進んでるの？ 大変でしょ？ 色々平行して行わないと駄

目だから」

私は話題を変えることにする。

「黒沢さんが、色々手伝ってくれるので、大丈夫です」

美和ちゃんはニコニコと答える。ラブラブという音が聞こえて来そうな二人の様子に、なんかほのぼのして私もニコニコして珈琲を飲む。

「引越しといったらさ、チャンとした業者に頼んだほうがいいですよ」

渚くんが、ほのぼのとした空気に、水を差すような事を言う。その言葉で私は気分をロウになっていく。

「引越しても事件あったんですか？」

黒くんがニヤリと笑って妙な言い回しで聞いてくる。私は溜息をつく。

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

一応もう入籍もして、しかも転居届けもしてしまっているのですが、書類上では実は私はもう横浜市民ではなく川崎市民になっているのだが、未だに会社では月見里で過ごし、実家で暮らしている。

引越しは拳式の一週間前に決め、私はネット見積もりで最も安

かったカタツムリ引っ越しセンターという業者に依頼をする。『カタツムリって引っ越しするにも家すでに背負っているじゃん』と思わないでもないけれど、私は大手の安心感とか、サービスの良さとか、引っ越し業者の名前でもなく安さで選んだから。カタツムリが前もって届けてきた段ボールがビックリするほど少なかったので、私はスーパで足りない段ボールを集める所から私の引っ越し準備は始まった。

元々、夏休みの宿題でも早めに片づけてしまう主義なので、この時期で既に段ボール箱が積まれ倉庫のようになっていた。荷詰めしたのは季節外れの服、実家にあつた新生活に使えそうな引き出物の食器類など、今の生活に使わないものばかりではなるものの、こんな状況でも日常生活を過ごすのには全く困らないという事実が気が付く。

そして、結婚式のスケジュールを決めたり、席次表を決めたり作成したり、結婚式で使用する音楽を決めたり、出席者から挨拶してもらう人を決めお願いしたりと、本格的に結婚準備が忙しくなってくる。大陽くんとメールのやりとりも、実務的な事ばかりになる。逆にその忙しさがマレツジブルーにする余裕も、喧嘩なんてする暇すら与えず、二人で驀進しているといった状況。

それは、私が月見里から大陽になるまでの心の移行だったのかもしれない。私を示す名前を先ず変え、今までの生活を少しずつ大陽仕様にシフトチェンジしていく。そういった中で一番変わっていったのは親との関係かもしれない。

何も親に相談もせず必要最低限の報告だけをしてきた私が、母には結婚式の事を中心であるが、何でも話すようになっていた。自分の話したい話だけをして娘の話なんて聞こうともしなかった父が、

渚くんの事を気にして、話を聞きたがり、結婚準備で困っている事はないか？ と口を開けば聞いてくる。

私がそれまでの人生の中で最も一家団欒を楽しんだ日々でもあった。

そんな慌ただしいようで穏やかな日々もあと一週間という時に、私の夜逃げ事件が起こった。

単身引越という事で私も気楽モードで、実家では引越業者の方と私と父と母。大陽くんのマンションではトラックを先回りして移動した私と母、そして大陽くんの三人で充分だと思っていた。姉の時もそうだったので。

実家にて引越業者を待っていたのだが、待てど、暮らせどこない
そして約束より一時間も遅れで玄関のチャイムになる。ロン毛茶髪
の今時という兄ちゃんはやんぱらやってきて、「ども」と見た目
通りチャラい挨拶をする。

そして三階にある私の部屋まで登ってきて、『えええ！』と何故か不満そうな声をあげる。

「こんなの、俺一人じゃ無理じゃないですか」

彼はそう言って、会社に電話しだす。

「すいませ〜ん、全然話違いますよ！ 荷物けっこういっぱいで〜え、手伝いるっていても、すげ〜小っちゃい女と、おっさんとおばさんですよ」

横にいたので、すべて聞こえているけれど、その兄ちゃんはその会話をし出す。文句言われる筋合いはない、訪問はなかったのだ、ネット見積みもりした時もちゃんと正確に荷物を私は申告した。ただ

机というラジオボタンだけでは不安だったので、備考欄にちゃんとサイズも書いておいた。

それを判断した人の、見積もりミスともいうべきバック設定になっていたようだ。でも頑張れば出来るよね？ という感じだと思うのだが、そういう方向にはその兄ちゃんはいかなかったようだ。

「あのー、コレ俺一人じゃ無理なのでー至急人集めて出直してきますのでーまたきますねー」

そう言って兄ちゃんは、ポカンとしている私らを置いて出て行った。

私は仕方が無く、大陽くんに連絡し、状況を説明する。

「なに？ それ……。まあ、今言っても仕方がないから、またお引越し屋さんが来た段階で連絡してね」

まあ、そう言っしかないでしょう。

そして、仕方がないから我が家では珈琲でも飲むことにする。

「お前の珈琲を、こうして飲めるのも、もう少しで終わりなのだな」

父がしみじみと、私の煎れた珈琲をのみ、三人リビングで寛ぐこと二時間。引越し屋さんから電話もなければ、もちろんトラックでやってくることもない。

「そろそろお昼か、よし！ 俺が特性焼きそばを作つてやろう」

俺様で、関白亭主に見える父だが、昔下宿していた事もあり意外

に炒め料理は得意で、家族に美味しいといって食べてもらうのは好きだったりする。父お手製の塩焼きそばを三人で食べてかたづけ等して一時間チョットの時間が過ぎる、しかしまだなんの連絡も来ない。私は一応大陽くんにメールをいれておく。

部屋にいても落ち着かないので、そのままりビングにて三人で、とりとめもない会話をする。

十五時になり、再び珈琲でも飲みますかという話になり、私が煎れた珈琲とお隣から昨日頂いた薄皮まんじゅうを楽しむ。

十六時過ぎて流石に、待ってられないと引越し屋さんに連絡されるが、『今調整しています、もう少しで作業員を向かわせます』という返事をもらう。私はその電話に溜息をつき、その旨を大陽くんに連絡すると、電話の向こうからも溜息が聞こえた。時間短縮の為に、三階にのぼり部屋の荷物を一階に降ろしておくことにする。あらかたの箱の荷物は一階に降ろしたら六時になっていた。

仕方がないので、母と簡単なサラダと肉と野菜の炒め物といった簡単な夕飯を作り食べ終わってもまだ引越し屋も来なかった。引越し屋に電話をかけても、『もうすぐ行きます』と繰り返すだけ。こうなったらお風呂でも入るかと自棄になった二十時頃に、実家にトラックがやってきた。

午前中にきたあの茶髪の兄ちゃんは、何故か自慢げに『仲間集めできました』と私達に言い放つ。もう文句を言うのも疲れたのでお願いすることにすると。兄ちゃんは連れてきた三人の作業員と共に走るように三階までいき家具を運び、人数に物いわせあつという間にトラックに荷物を積み込む。逆に言えば、四人もいらないだろうという荷物だから、そうなって当然なのだが……。

「では、荷物引越し先に運びますので！ 後ほど現地でお会いしましょう！」

質問する暇も、『この時間なの？』という突っ込みをする暇もあたえられず彼らは去っていった。我に返った私はすぐに大陽くん
に電話する。

「あの、引越し屋さんね、今出たの」

「え！ 今？！」

「と、とりあえず今からソツチ私も向かうね」

私はそんな時間ではあるものの、慌てて電車で一時間チョットかかる大陽くんのマンションに向かう。もちろん母をそんな時間に動かすわけにはいかないので私だけで、状況が状況だけにこの日は大陽くんのマンションに泊まることも許可してもらえた。途中大丈夫だとは思うものの、メールでまだ引越し屋さんが来てないかと大陽くんを確認しながら移動する。

必死な思いで大陽くんのマンションに辿り着いたのは二十二時チョット過ぎだった。でもまだ荷物は届いていなかったらしい。

心配になって、引越し屋さんに連絡するともう営業も終わったというアナウンスが流れるのみ。

「あのさ、もうこんな時間だけど、本当に荷物くるの」

私もそう思うだけに、首を横に傾げるしかない。お風呂にうつかり入る事も出来ず、二人でリビングに並んでTVを見ている事しかない。

そして日付が変わった時間にベルが鳴る。

「お待たせしました。カタツムリ引越しセンターです」

インターホンからそんな声が聞こえる。私はため息をつきながらボタンを押しマンションの入り口の鍵を解除する。

「いや、道が混んでいまして、遅くなりまして申し訳ありません」

一応そのように謝ってくる。朝見たときよりも寢れの見える顔に、文句もなんか言えなくなる。

「お疲れ様でした、あの時間が時間なので下の階に迷惑かけないようにお願います」

そうとだけお願いしておく。そうして四人がかりで、私の荷物の運びいれ作業は深夜にこっそりと行われることになった。

内心のトホホな気持ちを隠しつつ、荷物を運び終えた男の子たちにお茶を出す。四人の男の子はよほど喉が渴いていたのだろう。えらく美味しそうにお茶を飲みそして去っていった。

（なんで、華々しいはずの新生活のスタートが、こんなにも夜逃げのような状況になるのだろうか）

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

「……という感じだったの」

私は黒くんと美和ちゃんに向かって話し終えて、ため息をつく。美和ちゃんはビックリしたように目を丸くして、黒くんは苦笑して

いる。

「大変だったんですね」

同情の目で美和ちゃんは、まっとうな感想を伝える。

「なので、業者選びは気をつけてね。私みたいに安さだけで選ばないで」

私の言葉に美和ちゃんはコクリと頷く。まあ、もう依頼しているし、名前を聞くとメジャーなところなのでそんな心配はなさそうだけど。

ティータイムを終わらせた私達は、ペーパーアイテムの作成を再開させた。

夜逃げ屋本舗（後書き）

夜逃げ屋本舗

1992年 日本

監督・脚本：原隆仁

脚本：真崎慎、長崎行男

キャスト：中村雅俊、

高木美保、

益岡徹、

榊原利彦

母と娘

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

散々な引越しをしたものの、その後の一週間というのは特別な事が起こるわけでもなく、私も太陽くんも仕事もあり普通の一週間で過ごす。

違いと言えば会社のオジサマ方から、『笑顔が輝いているね』幸せだから?』とかからかいの言葉がいつもより多かったくらい。そして私は普段通りの裏で、最低限の洋服と携帯だけで日常を乗り越えるという——そう家出少女なみのシンプル物資生活を実家でおくっていた。

ほぼいつもと変わらない日常生活も、金曜日の夜に非日常な状況となる。千葉の方にいる姉一家と、関西で生活している兄が帰ってきたからだ。

父母と私三人の静かだった家も一気に賑やかになる。一緒に暮らしていた時は散々喧嘩をしていたけれど、久しぶりに全員集合と言うことと、甥っ子の悠斗くんというキュートな存在、そして姉の旦那様というやや気を遣う存在が良い感じに平和な空気を作り出していた。

「へえ、これが太陽くん、結構濃い顔なのね」

「でも、優しそうでいい感じの人だね」

「お前がこういうタイプと結婚するとは意外だよな」

私の携帯に入っている太陽くんの写真を見て皆勝手に盛り上がった

ている。義兄さんだけは、遠慮して優しい言葉で大陽くんを褒めてくる。

「言つとくけどソイツすごい大男だぞ！二メートル以上かるから！」

父がえらく大げさに表現して、甥っ子が素直に信じて眼を丸くしている。

「ゆいちゃん、そんな大きい怪獣みたいな人と結婚して大丈夫？食べられない？」

どうも小さい子には『ゆりちゃん』とは良い辛いらしくて『ゆいちゃん』になる。

「いやいや、百九十センチしかないから」

私は訂正するけれど、『しか』という表現自体が間違えている気がする。

「そうそう、明日ね、悠斗くんにお仕事をお願いしたいことがあるの。二つだけなんだけどやってくれるかな？」

こういう事は悠斗くんが寝てしまう前をお願いしておいた方が良い。悠斗君は『何々』と笑顔で近づいてくる。

「まず教会という所でね、天使の羽つけて私と渚兄さんの後ろを、籠に入った花をまきながらついてきてほしいの」

「分かった！」

悠斗くんは楽しそうにニコニコとした笑顔で頷く。物怖じしない子なので、問題はなさそうだ。

「そしてね、あと一つは披露宴会場でね、後ろからブーケを持ってね、このお兄さんにこう言って渡してもらいたいの」

私は携帯の大陽くんの写真を見せながら甥っ子に説明をする。

「なんて言えばいいの？」

期待に満ちた瞳で見上げてくる甥っ子を前に、私は返事をするのに瞬躊躇う。周りで他の家族が見ているから余計に恥ずかしい。

「『愛の国から、お花を届けにまいりました』って……言える？」

悠斗くんはコクリと素直に頷く。そして周りで爆笑が起きる。

「お前、そんな恥ずかしいイベントよく思いついたな」

兄が嫌味っぽい笑みを浮かべつつこんでくる。

「百合ちゃんって、そういうことするキャラだった？」

姉も大笑いである。

コレは、私が考えついたストーリーではなく、司会進行を担当する女性が盛り上がって作ったシナリオなのである。私のブーケが実は一部取り外しが出来てブートニアになるのである。これはプロポーズの本来の儀式を再現出来るというもので、元来正式なプロポーズは男性が女性に花束を渡して結婚を申し込み、女性がその花束の

一部を抜き出し男性のポケットに刺すと承諾となるらしい。ブーケを注文している時に、そういうブートニアを仕込んだブーケ作れませんが、どうされますか？ と聞かれ思わずお願いしてしまったのである。

あんな電話超しの、いささか間抜けなプロポーズだっただけに、コレを機会に仕切り直したいという気持ちもあったからだ。

それを話したら、司会者は盛り上がって、『ならば、もつと演出したほうが、そうだ——』と言い出して、このようになったのである。

「悠斗！ いい 『愛の国から』 ほら言つて！」

笑いながらも、姉は早速ステージママながらに息子を仕込み出す。甥っ子を一番理解している姉に任せたほうがいいだろう。それにその様子をニヤニヤと見ているみんなの様子も恥ずかしくなって、私は台所へと逃げる。

「お母さん、手伝うよ」

台所で洗いものしていた母に声をかける。

「なら、梨剥いてくれる？」

私は頷いて、梨を洗ってから、母の隣に立ち包丁で梨をむき始める。母はカウンター越しに、姉と甥っ子の様子を見つめ眼を愛しそうに細める。元々シツカリ者の姉だったけれど、結婚して素敵な奥様になり、息子を生んで良い母親になっている。台詞は覚えたように、姉は今度動きの指導まで入っている。どうやら跪いてブーケを渡すつもりようだ。

「お姉ちゃんを見習って、私も頑張らないとね。あれほど完璧な奥様にはなれないかもしれないけど」

姉のように強い妻になり、良い母親になりたい。楽しそうに明日の練習をしている姉と甥っ子を見てそう思いそんな言葉を口にしていた。私の言葉に母は笑う。

「そうね、百合子も玲子を見習って、電話で愚痴るようにね！」

その言葉に思わず手を止め、母の顔を見てしまう。母は真面目な顔で此方を見ている。

「貴方に甘え方というモノを、結局教えてあげることができなかったから。だから今からでも玲子を見習って、泣きたいときは泣きにきて、愚痴りたいときは思いっきり愚痴りなさい」

私はジワつと涙が出そうになるのをジツとこらえる。

「ゴメンなさい、お母さん、私可愛くない子供だったよね」

「何言っているの、こないだも言ったけれど、世界で一番可愛い子供よ」

母は笑いもせずに真顔でケロリとそんな言葉を言ってくる。

「あのね、貴方はまだ分からない感情かもしれないけれど、教えてあげる。勿論娘が結婚して幸せであることが一番嬉しいものだけだね、結婚した娘が電話で相談してきたり、愚痴られたりするのも結構嬉しい事なの。まだ頼られているという気がして。だからコレからはそういう親孝行期待しているわよ！」

ちゃんと言葉で答えなければならぬとは思うものの、声に出したら泣きそうで、私は大きく頷く事しかできなかった。そんな私を見て母は嬉しそうに笑った。

リビングでは『愛の国から、お花を届けにまいりました』という元気な声は何度も響いている。私は深呼吸して笑顔をつくり、剥いた梨をもって母とみんなの所に戻った。あれほど昔は居心地が悪く、息苦しかった空間が今はとても心地良い場所に思えた。それまでの人生で一番、家族でいて楽しいと思える夜。コレからはコレに大陽くんも加わってさらに賑やかになり、さらに楽しい場所になるのだろっ、きつと……。

母と娘（後書き）

母と娘（ANAK）

製作国：2000年フィリピン映画

監督：ロリー・B・キントス

脚本：リッキー・リー

レイモンド・リー

キャスト：ヴィルマ・サントス

クラウディン・バレット

バロン・ゲイスラー

シェイラ・モー・アルヴェロ

素顔のままで

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

最近では娘が嫁ぐ日どのように家を出るものなのかいそういえば良く分からない。

三つ指ついて挨拶をする人って今時どのくらいいるものなのだろうか？ 姉の時も今の状況に甥っ子と義兄はいなかったものの、従姉妹も泊まりに来ていた為に別の意味で賑やかでそんな事はしなかったと思う。式場でまた集合するものの、着付けのある母と私だけが先へ出て、残りは時間を見て義兄の車に乗って来ることになっている。

「ゆいちゃん、バンザイ！ バンザイ！」

玄関に立つ私と母を、甥っ子の元気な声が響く。父と兄が変な事を仕込んだようで、甥っ子は私達を、元気にバンザイをしながら送り出す。

（赤紙もらって出兵する、若者が……）

「うん、悠くんお姉ちゃん頑張ってくるね。みんな色々ありがとうございました。行ってきます。式場でね！」

かなり世間とは違った形でというか間違えた形で私は、嫁ぐ日の朝に家を出る娘というイベントを無事終了させた。

式場に向かうという事で、今日の私はかなりお淑やかなワンピースと淡いピンクの上品なネイルと私にしてはお洒落な高いヒールと

いう畏まった格好をしている。しかし周りの人からみるとかなり不自然な状況なのかもしれない。

というのは、衣装のわりに顔から上がサッパリしすぎているのである。つまりはノーメイクに、髪の毛は櫛で整えカチューシャでおさえただけの状態。このあとスムーズにドレスの着付けとメイクアップと髪の毛のセットをする為に、『当日はノーメイクで髪の毛に余計な整髪剤をつけてこないでいらして下さい』と注意されていたからだ。

近所ならともかく、電車乗っていくような場所にノーメイクでいくのはなかなか緊張する。私は眉がシツカリしている為に、さほどノーメイクでも顔が変わるとは言われないものの、小さい目であるだけにアイメイクがないのが心もとない。大陽くんは、全然変わらないと言うものの、つけまつげとかまでしないもののシャドーの加減とかマスカラとビューラーで印象を深めるなど工夫してきた。しかし今日は洗顔して化粧水とミルクをつけて日焼け止めを塗り、ビューラーでまつげをアップしただけで、出来たら知っている人にはあまり会いたくない状態である。にも関わらず、近所のおば様に会い挨拶されお祝いの言葉を頂き、電車で何故か母の友人にバツタリと会いと、いつも以上に知人と遭遇することになり、すっぴんの顔を晒すことになってしまった。

無事ホテルに着き、私はホッと胸をなで下ろした。前を見ると大陽くんとお義母さんがロビーにいるのが見えた。簡単に自分で着替えるだけの大陽くんはもつと集合時間は短いものの、私の母同様着付けのある義母さんに付き合い早めに来ていたようだ。母親同士、ニコニコと挨拶をし、三人で着付け室に向かおう事にする。

「あら、渚くん？」

後ろから声がかかる。振り向くと、三組の中年男性夫婦と私と同じくらいの女性が二人加わったグループが立っている。ホテルに泊まり朝食を終えてノンビリロビーで話していた一団のようだ。

「叔父さん方、お久しぶりです」

「弘子さん　渚くん、この度はおめでとうございます。ほんまめでたいな〜」

ニコニコと恰幅の良い中年男性が太陽くんに話しかけてくる。そして私の方をチラリと視線を向けてくる。

「もしかして、此方のお嬢様が、伯母の智子でございます。本日は本当におめでとうございます。これからもよろしくね〜」

「渚くんの奥さんって、こんな小さくて可愛いのに!」

「百合子さんですよ。　よろしく願います従姉妹の——」

「よろしく!　佐知子です」

女性五人がかりで話しかけられ、私は圧倒されながらも笑顔をつくり挨拶をする。すっぴん顔だけど……。

挨拶も無事終わり、『そろそろ私らは着付け行かないとならないので』と義母の言葉で散会になる。

三人で入ったエレベータで溜息をついてしまう。

「どうしたの?」

義母さんは心配そうに話しかけてくる。

「いえね、折角伯母様方にお会いするならば、ドレスアップして最高に綺麗な状態でお会いしたかったです。すっぴん状態だったのが恥ずかしくて」

母と義母さんは、その言葉に何故か笑う。

「百合ちゃんは、メイクしていようが、なかるうが可愛いから大丈夫よ」

義母さんの言葉に思わず赤くなってしまふ。母はそんなやりとりを領きながらニコニコという笑顔で見ている。なんか義母さんと母って凄く似ているかもしれないとその時なんか思った。二人とも天然なのかもしれない。

結局その後の着付け室、二人の母は別室に案内され私はメインの着付け室へと案内される。

部屋に入ると、まず手荷物をロッカへと入れて、ワンピースを脱いでコルセットの下着姿に着替えるように指示された。

私はまず、普通のストッキングを脱いで、光沢があり銀のワンポイントのついたストッキングを履いて、背中のホックを手伝ってもらいコルセット下着を着け、更衣室を出る。そのままの格好で鏡の前の美容室にあるような椅子に座らされる。

隣では上品そうな黒留袖を着た女性が、美容師さんと楽しそうに喋っていた。

「まあ、とても綺麗にしてもろうて、ありがとうな」

鏡越しで年齢は六十前後という感じだが、華やか顔立ちをしていて綺麗な女性だった。また映画でもこんな綺麗で上品な京都弁で聞けないなと、その心地よいイントネーションを耳で楽しんでいた。

そうしている間に、私の髪の毛はカラーがいくつも巻かれ顔に下地クリームが塗られ粉がはたかれる。

そんな状態の時に、先程の京弁の隣の女性が席を立てて私の横にやってくる。

「あの失礼します。もしかして貴女は月見里様でいらっしゃいますでしょうか？」

私は、頭にクルクルカラーをいっぴいつけた間抜けな格好で頷く。

「なつくんの伯母の貴子でございます」

『なつくん』って『大陽渚くん』の事だね？ 見事な京都言葉に、『貴子』という名前。もしかして京都の本家の伯母様……。

「月見里百合子と申します。貴子伯母様ですね。渚さんから素敵な伯母様だとお噂を窺っております。よろしく願います……こんな恥ずかしい格好で申し訳ありません」

私は恐縮しながら、もう完璧に衣装も整えヘアセットも済ませた伯母様にご挨拶をする。

「やっぱり、さっきから可愛いお嬢さんがいらっしゃるので、もしかしたらと思ってたんや。よろしくな」

下着姿でメイクも途中で頭をクルクルとカラーを巻いたままの格好で、もっとも気を遣って綺麗な姿で会いたかった存在と初対面を迎えることになった。

「なつくんは、優しい良い子だから。百合子さんが、その笑顔でしっかり支えてやってな」

私は絶対締まらない格好に関わらず、精一杯の笑顔で、ニコニコと話し続ける伯母様の言葉を聞き続けた。

結婚式場の方、舞台裏というのは出来る事なら招待客に見せたくないもの。という事なので、出来たら親族着付け室と、花嫁着付け室を別にしてもらいたかったです。

でも後で聞いた話だと、元々それは別だったらしい。ただ、伯母様が早めに来すぎた事と、前の結婚式の親族そちらの部屋が一杯だったことでそういう事になったらしい。

かくして、親族控え室に行くよりも先に、大陽くんの親戚の半分に微妙過ぎる格好で会う事になってしまった。でも逆にそういう状態で出会った事で、開き直る事ができて自分を飾らず気取らないで付き合えるようになったのかもしれない。物事は良い方向に考えることにした。

素顔のままで（後書き）

素顔のままで（S t r i p t e a s e）

1996年 アメリカ

監督・脚本：アンドリュー・バーグマン

原作：カール・ハイアセン

キャスト：デミ・ムーア

バート・レイノルズ

アイマンド・アサンテ

ビング・レイムス

ロバート・パトリック

結婚式の後で

> i 2 2 2 5 9 — 1 6 0 3 <

髪の毛を結び上げ、メイクアップをしてドレスを着て、ヴェールをつけ、かなり厚底のヒールを履く。そして私は花嫁姿の自分の姿を鏡で向き合うことになる。

決して私はナルシストではないけれど、その姿を綺麗だと思った。今までして事がないほどシツカリとしたメイクをして、真っ白の衣装に身を包んだ自分は、私であるはずなのに私ではないように見える。

花嫁衣装が白いのは、自分の人生を再スタートさせるために、一旦白い色に自分を戻す為ならしい。つまりは人生のリセット。

別にここで白い服を着たからと、それまでの人生が消去されるわけでも、私が変わるだけでもない。でも一瞬であっても自分でない人間になった事で、気持ちも改まった気がした。

介添人に付き沿われ着付け室を出て、大陽くんが待つ部屋へと連れていかれる。男性というのは自分で着替えして、髪の設定も自分でやっとならしい。座っていた大陽くんが私を見て立ち上がる。何故か驚いたように目を見開き、そしてなぜかニヤニヤ笑う。

「なんか変？」

大陽くんは、首を横にふるが何故かニヤニヤしたまま此方を見ている。

「ん？ いや、いいんじゃない！ ただ凄いアイメイクだね！ それにそのもみあげの部分のクリクリバネみたいなの面白いね」

（自分の結婚する人の花嫁姿を見て、出てくる言葉ってソレ？）

こういう時は、嘘でも『綺麗だね』と言って貰いたかったが、韓流ドラマな言葉を言ってくるような人ではないから仕方がないかなと思う。

改めて大陽くんを見ると、衣装合わせのときは簡単に上着を羽織っただけだったけれど、ウイングカラーのシャツに青みがあったグレーのアスコットタイにベストにフロックコートという出で立ちがなかなか決まっている。なまじ背があるだけに丈の長いフロックコートが似合っているようだ。

「渚くん、凄く格好いいよ」

やはり正装って、人の格好良さを四割増しにする。大陽くんは何故か眉を寄せ、目を反らす。

「百合ちゃんも、綺麗だよ」

そうボソつとつぶやいた。大陽くんが目を反らせた意味が何となく分かった。私も照れて目を反らしてしまった。二人にモジモジしていたら、ホテルの方に親戚控え室への移動を促される。そして写真撮影、親族紹介も無事終わり、とうとう結婚式となる。

「緊張することないんじゃない、百合ちゃんはベールがあるんだし」

教会の扉の前で、大陽くんはそんな言葉をかけてくる。

「自然体でいいよ、結婚式の時は普通の顔でいいでしょ、ヘラヘラ作り笑いしている方が可らしいし」

その言葉に、苦笑してしまう。

「そうだね、それに式の間は真面目な顔でいいから、表情筋も少しは休められる」

「そういう真面目な時ほど、逆に笑いが出てきて困るものだけだね」

確かにそれは言えている。その言葉に思わず笑ってしまう。真剣な顔をしないと駄目な所なのに。

「気を引き締めて、いきますか！」

「了解！」

私はチラリと後ろを振り向き、チビ天使を振り返る。

「悠くん、よろしくね！」

そう話しかけると、天使の羽をつけた甥っ子は、ニカッと笑う。

その顔に癒され緊張もなんかほぐれる。

教会の中からオルガンの音が聞こえる私達は腕を組み、胸をはり、開け放たれた大きな扉からバージンロードへと踏み出した。

神聖なる場で、結婚を誓う結婚式は確かに、婚姻届けを提出する以上に結婚するという気持ちを引き締めってくれる儀式である。指輪交換の時に出す手を間違え笑いをとったり、誓いのキスの時に何故かどよめきを受けたりとかはしたもの、ほぼ厳かな雰囲気で行う事ができた。

二人が自分のテンポで行動出来ていたのはこの時までだった。後はもう怒濤のスケジュールで物事が進んでいくものなのだ。

後はその場その場で、必死に対応していくしかなくなる。後は介添人の指示に従って立ってお辞儀したり、移動したりという感じ。ドレスって人の助けがないとスツと立てない代物だから。お祝いの言葉にお礼の言葉を返し、向けられたカメラには笑顔で返し、お酒の瓶をもってこられたらグラスで受けて、という感じでてんでこ舞いの状態になる。一番気をつけるべきポイントは、お酒をついでく人への対応。私も大陽くんもお酒は強くはないので、申し訳ないけれど、バレないように足下のバケツにお酒を空けて対応するしかなかった。ポイントはニコニコとしながらグラスを身体に寄せる感じで下をみないようにしてグラスをテーブルの下に持って行き中身を捨てて、こっそりテーブルに戻す。それを繰り返す。

イベントが盛りだくさんなのに加え、普通だったら一日にそれぞれ小グループでしか会わないメンバーが一同に会し、それが一斉に話しかけたりして絡んでくる状況。それが結婚式および披露宴というイベントなのである。しかも皆お祝いモードでかなりテンションを上げてきているだけに、向き合うとかなりの体力をもっていけるのである。善意で愛をもった人に囲まれてもここまで疲れるのに、えげつない質問するようなマスコミ相手でも笑顔で返す芸能人って凄いものだと尊敬する。

私しか知らない知り合いを大陽くんを紹介し、大陽君しか知らない知り合いに挨拶する。今までの私の人生を共に過ごし、支えてくれた人、そしてコレからの人生お付き合いいきあつていき、お世話になつていくのであろう人達と一気に大量接触。楽しいものの緊張もしたし、メモリーはパンク状態になった。

結婚するには、法的には入籍すればいいだけの事だけど、それ

だけの人にこうして見守られ祝われ結婚するということの意味を改めて、考えさせられる。それが結婚式というイベントの意味のようを感じる。

互いの愛を確かめ合うよりも、二人の結婚を愛情もって見守ってくれる人達の事を意識するための儀式なのだ。

そんな大騒ぎの結婚式や二次会も終わり、私と太陽くんは来て下さった方の祝いの心と愛をいっぱい抱えて、マンションに帰る。

そして部屋に二人で入り、リビングでホッと一息つき、二人で顔を見合わせ笑ってしまう。

「お疲れ様！」

私はそう言う太陽くんに向き直り、畏まって頭を下げる。

「お疲れ様でした。無事一連のイベント二人でやりきったね」

ハハハと可笑しそうに太陽くんは笑う。でもすぐに笑いを引っ込めて真面目な顔をする。

「百合ちゃん、これからよろしく願います」

「此方こそ、ふつつかものですが、よろしく願います」

そういつて二人で向かいあって頭を下げる。他のカップルは結婚式から帰ってどういう会話と行動するのかは分からない。私達の儀式はそんな感じだった。

二人の間にはなんともいえない心地よい疲労感とほのぼのした空気が流れる。同じイベントに向かって頑張り見事やり切った達成感もあるし、自分の場所が出来た事の安心感もあったのかもしれない。

「お風呂入れるね、疲れたでしょ！」

結婚式を終えたばかりで、今夜は浮かれた状態で盛り上がって、そのままお風呂に入ってベッドで三次会を盛り上がるという事もありえたのかもしれないけれど、私も太陽くんもそうするには疲れ過ぎていた。ベッドに二人で入りキスした所までは覚えているけれど、そのあとの事は覚えていない。意識を飛ばすほど愛し合ったという訳ではなく、二人は横になって速攻熟睡してしまったようだ。でも身体を寄せ合って見た夢は最高に幸せで満ち足りたものだったと思う。まさに夢見心地の夜を二人で過ごした事は確かである。

こうして祭り状態のハレの時間は終わり、そして落ち着いたケの時間が始まった。

これから健やかなる時も、病める時もどんな時もコレからは二人で歩いていくそれだけである。

結婚式の後で（後書き）

結婚式の後で（After the Banquet）

製作国：2009年 韓国・日本合作

監督：キム・ウンチョル

キャスト：シン・ソンウ

イエ・ジウォン

ペ・スビン

コ・アソン

マイ・ライフ、マイ・ファミリー

> i 2 2 2 6 0 — 1 6 0 3 <

部屋の照明が落ち、セリーヌ・ディオンのタイタニックのテーマが流れ始める。私はデジイチを手に係員が待機している扉へと近づく。そして音楽がチョット盛り上がってきた所で扉が開き、白いタキシードを着た黒くんと白い柔らかいデザインのウェディングドレスに身を包んだ実和ちゃんが入ってくる。カメラのフラッシュライトを浴びながら、ゆっくりと入ってくる二人は本当に幸せそうで素敵だった。

私はカメラを構え二人のバストアップを写して、今度は退いてあえて逆光で実和ちゃんのドレスがライトに透ける感じの絵で何枚か写して、最後に二人の後ろ姿をさらにカメラにおさめておく。折角の腰の辺りに大きなリボンのついた可愛いデザインの素敵なウェディングドレスなので、映像としてちゃんと残してあげたいものだから。

結婚式の披露宴の空気というのは独特である。ホテルの従業員以外は基本浮かれていて目出度い空気。新郎新婦の会社関係者が同じな事もあってか、会場の緊張感がますますなく、内輪ウケで盛り上がっている所もあり、いつものように説教垂れる上司、黒くんの過去恋愛を匂わせるスピーチをする悪ふざけの過ぎるスピーチをする人、頼んでもないのに酔っぱらって壇上にあがり長々とスピーチして奥さんと娘に強制的に退場させられる親戚の叔父さんなど、苦笑する部分も多いものの、そういった事も笑ってすべて流してしまう脳天気な空気がココには流れている。

再び照明が落ち、同じ白いタキシードの黒くんと淡い桜のようなピンクのドレスに着替えた実和ちゃんが再入場してくる。主役が戻ってきたことで、場は活気を取り戻す。二人は順番にテーブルに回りキヤンドルをともしていく。

私達の席は、会社の若めのメンバーが多かったこともあり、私と友ちゃんが話をして盛り上がっている間に、蝋燭の芯に悪戯されていたようで、なかなか火がつかず苦労していた。それを皆がニヤニヤと見守り、困った顔をする実和ちゃんと苦笑している黒くん。

そういう心温まる？ エピソードが積み重なっていくとともに、私の緊張も高めていた。というのは、私は新郎新婦双方と仲良いこともあり、お祝いスピーチを頼まれたからだ。先にスピーチをする人達の言葉を聞きながら、内心もつとつと長く話してまわって私の喋る時間も潰してくれればと祈ったものの、優秀な司会のお陰で、ほぼスケジュール通りに宴は進んでいく。

「次にご登場頂きますのは、新郎新婦と同じ会社に勤め、会社の同期で、新婦の先輩でいらっやいます大陽百合子さんです。

新郎新婦にとって、キューピットとなった女性だと窺っています。大陽百合子様、どうぞ前の方へご登場頂けますでしょうかお願いいたします」

私は大きく深呼吸をして前に出る。会場の方にお辞儀する。二人を祝いたい気持ちは本ただけど、これだけ大勢の人の前でお話するのは流石に緊張する。

「黒くん、実和ちゃん結婚おめでとうございます」

二人に向かってそう言葉をかけると、二人の笑顔が答えてくれる。

その笑顔で少し落ち着く。

「ご両家の皆様方へも、心からお慶びを申し上げます。
今日の佳き日にあたり、親友へのメッセージにお祝いと感謝の気持ちを含めて、ひと言述べさせていただきたいと思います。」

会場の方に向き直り頭を、頭を下げる。流石に百人を超える人の視線で笑顔が若干強ばってしまう。だから私は黒くんと実和ちゃんの方を見て話すことにする。

「ただいま紹介に預かりました、大陽百合子と申します。私と新郎新婦は共に映画が好きで、よく三人で出かけ映画を楽しむという事をしていただけに、今日こうして二人が結婚するという事を、自分の事のように嬉しく思っています。」

逆に言えば、私が映画一緒に行っていたことで二人の仲が深まるのを実は邪魔していたのかな？　とも今にして思い、少し反省していたりします。でも今キューピットという暖かい言葉で紹介して頂きチョットホッとしています」

私の言葉一つ一つに首をふったり頷いたりと反応する実和ちゃんと、何故か苦笑して聞いている黒くんの顔を私は見つめながら言葉をつづける。

「結婚式でのスピーチは、新郎新婦の恥ずかしいエピソードを話して笑いをとるか、二人の美談で感動させるかと決まっているのですが、私自身あまり話が上手くないので、もう一つの定番である、『結婚とはなんぞや』という内容のスピーチをさせて頂きたいと思います。」

とはいえ、私自身は結婚して二年程しかたっており、そこまで偉そうに語れるほどのノウハウを持っているわけではありませんが、

近い立場だからこそお二人の参考になる何かを語ればなと思っています。

結婚する事が偉いとも想わないし、結婚は絶対するべきだと人に強要するつもりはありません。でも私にとっては結婚って最高に面白いものでした。

面白いといつても、いわゆる感動恋愛映画を楽しむような意味ではなく、コメディ―映画的な意味の話です。」

真剣に話をしているのに、何故か会場に笑いが漏れる。

「というのは、私の夫婦ってサイズも違うので見えている景色も違いますし、性別も違いますし、考え方も違うことで、ズレている部分が多いのです。趣味が合い、気が合うからと結婚したのですが、今までまったく違う生活をしていた同士が一緒になるので、ズレがあつて当たり前で、意外な面も多く、互いに驚きの連続でした。逆に言えば、結婚したあの時の一番の見所ってソコなのではないでしょうか？ そのズレこそが夫の面白さであり、魅力であり、らしさなんだと私が思っています。

また結婚当初に味わえるズレは性格的、考え方のズレだけでなく常識的ズレがあります。『自分はごくごく普通の一般家庭で育った』と思つていても、家族というものが意外に多くのローカルルールを抱えているもので、自分の当たり前が相手にそれが『えっ』と思うといった事が意外に多かつたりします。多分お二人もコレからも経験していくと思います」

我が家においても色々あつた。お風呂上がりは、小さいタオルとバスタオルの二枚使い身体を拭いてきた、しかし渚くんはバスタオル一枚で全てを拭き上げ、しかもバスタオルが何日かつかつて洗濯するというのが当たり前だったようだ。年越し蕎麦も我が家においては大晦日の晩ご飯という位置づけで、そのつもりで行動していた

ら？ 『あれ？ 晩ご飯は？』と聞かれ呆然とした事に始まり、晩ご飯におでんをつくつたら、『メインのおかずは？』と問われて牛筋とロールキャベツを入れてあつたことに驚かれと、いろんな事で二人の認識の違いを見せてきた。

「でも考えてみたら当たり前の事ですよね。それぞれ違う家族に生まれて余所様のルールなんて知らずそれを当たり前に育ってきた訳ですから。

そのズレに直面した時にどうするのか？ それが結婚直後に一番の課題だと思います。その時の対応の仕方として、ぼんやりと曖昧に放置する、それが相手に全てあわせてしまふ、もしくは自分の家のルールを押し通すというものがあります。でもそういうことするのつてとても勿体ないです。

折角自分達で新しく好きな家族ルールを作れるチャンスなのですから。

ルールというと難しいこと、硬い事ではないですよ。味噌汁に具で何がありで何がないのか？ 肉ジャガの肉は牛なのか豚なのか？ とか、マカロニサラダは本当にサラダなのかどうか？ おでんに何をいれるのか？ お雑煮は何味にするのか？ 年越し蕎麦をいつ食べるのか？ とか本当にどうでも良いような事です。」

自分達で作れるからこそ楽しいし、作るからこそ愛おしいと思う場所になるのが家庭というものではないだろうか？ 少なくとも今の私にとって、渚くんと暮らしというのはそういうものだ。二人で築きあげたものだからこそ、二人でいるのに快適な場所となっている。

「でもそんなどうでも良いルールが、その家らしさを作っていくことで、結婚という事なのではないでしょうか？ 私はそう思います。」

チラリと、二人の親族席に目をやったけれど、『馬鹿な事言つて』と不快に感じているような顔をしてない事を確認し、チョットホツとする。

「なので、お二人も是非その事を楽しんで最高のルールと家族を作つて下さい」

私はお辞儀して壇上から降り、自分の席に戻る。本日における私の役割で一番緊張するイベントが無事終わりホツとする。後はカメラを手に気楽モードで招待客として無邪気に二人の結婚を祝いながら楽しむ。

イベントは進み、実和ちゃんによる優しく可愛らしい両親への感謝の手紙が会場の人の涙を誘い、黒くんのお父さんによる味わいのある両家代表の挨拶が心地よい感動を生む。

「ローマ時代から『最近の若い者は……』と言うこと言葉はあるようですが、私と妻の実和も分からない事があればすぐググリ、それでも分からなければYahoo!知恵袋に聞けば良いと手軽に答えを見つけようとする今時の若者です——」

黒くんがそんな出だしから、上手く話を展開させ、「まだまだ未熟な二人を暖かく見守つて下さい」といった内容のメの挨拶によりアットホームで楽しい披露宴はお開きとなる。

コレが映画なら、ここで音楽が始まり二人の名前がトップでスタッフスクロールが流れ映画は感動的に終わるのかもしれない。でもコレは現実。二人の物語はまだまだ続く、というよりコレがオープニングでタイトルが出てくるようなシチュエーション。

その映画のタイトルもジャンルは二人にしか分からないけれど、

私は映画館で物語が始まる前のドキドキ感を覚えていた。とりあえず今日は二人の為に、この後二次会の幹事という彼らの物語の中の役割で盛り上げて、私の人生の主演男優の待つ家に帰り自分の物語に戻ることにしよう。

マイ・ライフ、マイ・ファミリー（後書き）

これで、この物語は完結します。

至らぬ点多かったと思いますが、最後まで読んで頂き
本当にありがとうございました。

この物語の番外編『結婚式マナー読本に書いてなかった事』という物語も

昨日からスタートしています。チラリと登場した鈴木薫さん視点で
此方の

結婚式を描いた内容です。もし良かったら、ソチラも読んで頂けたら嬉しいです。

また、月ちゃんと、の高校時代の物語が現在『アダブティッドチャイルドは荒野を目指す』というタイトルで連載中です。

そこで前彼である星野秀明、鈴木薫との交流が描かれています。
ご興味のある方は、そちらもどうぞ。

マイ・ライフ、マイ・ファミリー（The Savages）

2007年 アメリカ 113分

監督・脚本：タマラ・ジェンキンス

キャスト：ローラ・リニー

フィリップ・シーモア・ホフマン

フィリップ・ボスコ

ピーター・フリードマン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5939p/>

ゼクシィには載ってなかった事

2011年11月15日05時45分発行